

授業科目	英語コミュニケーション I	担当者	近藤 未奈		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

この授業では、語彙、リスニング、会話の各技能の演習をバランス良く行い、医療実務に役立つ総合的な英語力の養成をはかります。医療関連の語彙を増やし、またロールプレイ方式での会話練習を行うことにより、実際の現場で英語を使うことのできる能力のアップを目指します。

■ 目 標

医療専門分野に関係した基礎的な英語表現に慣れ、現場で英語が必要とされた際にも対応できる英語運用能力を養成することを目標とします。

■ 授 業 計 画

第1回	オリエンテーション／基本コミュニケーション	第9回	基本動作
第2回	あいさつと自己紹介	第10回	看護・介護の方針と説明
第3回	訪問予約	第11回	予防リハビリ
第4回	道順	第12回	介護のいろいろ—できること、できないこと
第5回	入浴	第13回	リラクセーション
第6回	打ち合わせ・連絡	第14回	カウンセリング
第7回	チームワーク	第15回	患者や家族への思いやり
第8回	便利な表現／体の各部位を表す英語		

■ 評 価 方 法

受講態度（予習・授業への取り組みなど:40%）、小テスト（20%）、筆記試験（40%）を総合的に評価します。

■ 教 科 書

書 名：English for Manners and Hospitality（マナーとホスピタリティの英語 III 介護・看護・リハビリ）
 著者名：古閑 博美, 土谷 宣子, 北川 宣子
 出版社：鷹書房弓プレス

書 名：Basic Medial Words（やさしいメディカル英単語）
 著者名：高垣 俊之
 出版社：鷹書房弓プレス

■ 参 考 書

書 名：話すための英文法
 著者名：小池 直己
 出版社：岩波書店（岩波ジュニア新書）

書 名：外国人患者が来ても困らない外来診療のための英会話—CD で学ぶ
 著者名：Norma E. Wyse, 小林 ひろみ
 出版社：メジカルビュー社

■ 留 意 事 項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。

成績評価基準の詳細やその他諸注意については初回授業で伝えるので、必ず初回から出席してください。

授業科目	英語コミュニケーションⅡ	担当者	近藤 未奈		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

この授業では、医療分野に限らず、英語で表現されるあらゆる日常的な状況を、聞き取って理解し、会話に応用できる能力の養成をはかります。授業中のアクティビティー（演習）に積極的に参加し、予習や復習に取り組むことにより、将来、実際の場面で英語が必要になった際にも対応できる力が身につきます。

■ 目 標

日本語を母語とする英語学習者が特に苦手とする、リスニングと会話に関して重点的に学びます。英語の音声にたえず触れ、実際に正しい発音で話す練習をすることで、英語を正確に聞き取る能力と話す能力を同時に高めることを目標とします。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション／英語のリズムについて
「トラブル・困難」に関する表現／「位置・場所」を表す表現
- 第2回 「乗り物」に関する表現／「時間・期間／頻度」を表す表現
- 第3回 「ショッピング」に関する表現／「数量／距離・長さ」を表す表現
- 第4回 「スポーツ・エンターテインメント」に関する表現／「感情」に関する表現
- 第5回 「食事・外食」に関する表現／「勧誘／提案・依頼」に関する表現
- 第6回 「旅行・レジャー」に関する表現／「判断・評価」を表す表現
- 第7回 「ビジネス・オフィス」に関する表現／「経験・完了」を表す表現
- 第8回 「インターネット・コンピュータ」に関する表現／「情報の交換」に関する表現
- 第9回 「金銭・費用」に関する表現／「方法・手段」を表す表現
- 第10回 「宿泊」に関する表現／「原因・理由」を示す表現
- 第11回 「天候」に関する表現／「予定／日程／計画」を示す表現
- 第12回 「電話」に関する表現／「許可／義務・必要」を表す表現
- 第13回 「学校」に関する表現／「賛成／不賛成・否定・拒否」を表す表現
- 第14回 「食卓・家庭」に関する表現／「可能性」を示す表現
- 第15回 「健康」に関する表現／「目的」を示す表現

■ 評価方法

受講態度（予習・授業への取り組みなど:50%）、小テスト（30%）、実技テスト（20%）を総合的に評価します。

■ 教科書

書 名：Listening Practice for Daily Expressions（日常表現リスニング15章）
著者名：マイケル シャワティ、西谷 恒史
出版社：音羽書房鶴見書店

■ 参考書

書 名：外国人患者が来ても困らない外来診療のための英会話—CD で学ぶ
著者名：Norma E.Wyse, 小林 ひろみ
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。
成績評価基準の詳細や、その他諸注意については初回授業で伝えるので、受講の意思のある場合は必ず初回から出席してください。

授業科目	英語コミュニケーションⅢ	担当者	近藤 未奈		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

この授業では、医療の現場で使われている英語表現や基本的用語、専門用語の成り立ちを学びます。また、英語文献・論文の内容を正確に読むために必要な文法項目を復習します。英語論文の抄録を読む演習も適宜行います。

■ 目 標

医学英語に特有の英語表現に慣れ、国際的な学術雑誌やデータベースに掲載されている英語文献の内容を正確に理解できる力を身に付けることを目標とします。

■ 授 業 計 画

第1回	オリエンテーション／医学英語の基本構造	第9回	英文法の重要項目（3）
第2回	接尾辞と接頭辞	第10回	英文読解（1）
第3回	英文法の重要項目（1）	第11回	英語論文の基礎知識（1）
第4回	身体部位の用語	第12回	英文読解（2）
第5回	骨の用語	第13回	英語論文の基礎知識（2）
第6回	英文法の重要項目（2）	第14回	カルテに関する用語
第7回	筋肉の用語	第15回	英文読解（3）
第8回	神経の用語		

■ 評 価 方 法

受講態度（予習や授業中の発表など：30%）、小テストおよびレポート課題（30%）、筆記試験（40%）の結果を総合的に評価します。

■ 教 科 書

書名：Basic Medical Words（やさしいメディカル英単語）
【注：前期「英語コミュニケーションI」より継続使用】
著者名：高垣 俊之
出版社：弓プレス

■ 参 考 書

書名：医学英語の文法と書き方
著者名：横井川 泰弘
出版社：金芳堂

書名：図解 PubMed の使い方 インターネットで医学文献を探す 第5版
著者名：岩下愛
出版社：日本医学図書館協会

■ 留 意 事 項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。また、毎回配布される資料は教科書として扱い、過去に配布されたものも毎回持ってきてください。

成績評価基準の詳細や、その他諸注意については初回授業で伝えるので、受講の意思のある場合は必ず初回から出席してください。

授業科目	国語表現学	担当者	岡崎 昌宏		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

レポートの作成など、大学では、自身の考えを練り、それを正確に、過不足なく表現する能力が一層求められる。そしてそれは、社会の様々な場面でも必要となる能力である。この授業では、正確な表現のために必要な知識や技術を習得するとともに、レポートの作成方法を実践的に学ぶ。また、優れた文章を読み、表現技術への意識を高める。

■ 目 標

自身の考えを整理し、それをレポートなどの形で正確に表現できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 概説—正確な表現の重要性
- 第2回 文章を書くための知識（1）—表記など
- 第3回 文章を書くための知識（2）—原稿用紙の使い方、段落など
- 第4回 正確な文章のために（1）—説明不足の文をなくす
- 第5回 正確な文章のために（2）—過度な説明、重複説明をなくす
- 第6回 正確な文章のために（3）—長くなってしまった文を、短くする
- 第7回 正確な文章のために（4）—句読点への意識を高める、語彙力を高める
- 第8回 論文・レポートの文章を読み、その表現の特徴を学ぶ
- 第9回 レポートを書く（1）—様々な事実を集める
- 第10回 レポートを書く（2）—意見の方向を定める
- 第11回 レポートを書く（3）—自説の明確な根拠を考える
- 第12回 レポートを書く（4）—基本的な展開方法を知る
- 第13回 レポートを書く（5）—レポートを書き、推敲する
- 第14回 様々な文章に接し、表現への意識を高める
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

平常点（授業中の課題への取り組みも含む）100%

■ 教科書

授業中に配布するプリントを用いる。

■ 参考書

必要に応じて授業中に紹介する。

■ 留意事項

--

授業科目	論理学	担当者	辻 虎志		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

大学の講義やゼミでは、レポート・意見の発表・ディベート・卒業論文などが課されます。この講義では、こうしたこと全体に必要な不可欠な「考える」技術、および「読む・書く」技術の習得を目指します。特に、この「論理学」では、①問題解決に必要な資料や文献を分析し、それらを活用して発信する技術（コミュニケーション・リテラシー）と、②文章作成に関わるより実践的な技術や知識、つまり「論証のテクニック」といった論理的で説得力のある文章を書くためのスキル（ロジカル・コミュニケーション）を身につけることが目標となります。

■ 目 標

現代社会において、どのような仕事もコミュニケーションなくしては成り立ちません。将来社会人になった際、友人・知人・上司・部下・同僚と、実に様々な相手とのコミュニケーションが必要になってきます。こうした多様な相手にたいして、自分の考えを分かりやすく伝え納得してもらい、実行を意思決定してもらうことが今まで以上に求められるようになります。この講義で紹介する技術は、大学生活を有効に使うために役立つのはもちろんのこと、将来社会人となってからも、自分自身の問題解決のためや、社会に貢献するために役立つでしょう。

■ 授 業 計 画

- 第1回 はじめに
- 第2回 「メッセージ」とは何か
- 第3回 「メッセージ」と見抜く（1） — 内田樹を読む
- 第4回 「メッセージ」と見抜く（2） — 村上龍を読む
- 第5回 「メッセージ」を作る
- 第6回 「要約」とは何か
- 第7回 論理的な文章を書こう — 論文・レポートの「形」
- 第8回 わかりやすい文章を書くために（1） — 接続詞
- 第9回 わかりやすい文章を書くために（2） — パラグラフ・ライティング
- 第10回 思考の整理術 — MECE と So What? / Why So?
- 第11回 説得力を上げるために（1） — 論証とは何か
- 第12回 説得力を上げるために（2） — 妥当な論証形式（演繹）
- 第13回 説得力を上げるために（2） — ちょっと弱い論証形式（帰納など）
- 第14回 注の付け方、引用・参考文献の挙げ方
- 第15回 論文・レポートを書いてみよう

■ 評 価 方 法

平常点:30%（出席点・課題を含む）、筆記テスト:70%

■ 教 科 書

特になし

■ 参 考 書

書 名：『論文の教室 レポートから卒論まで』

著者名：戸田山和久

出版社：NHK ブックス、2002

書 名：『レポートの組み立て方』

著者名：木下是雄

出版社：ちくま学芸文庫、1996

■ 留 意 事 項

特になし

授業科目	人間関係学	担当者	鈴木 暁子		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

人間関係とは即ち、人と人とのコミュニケーションといっても過言ではありません。この講義では、円滑な人間関係を築き維持するための、対人コミュニケーション理論と具体的なコミュニケーション技術について学びます。

■ 目 標

- ①対人コミュニケーションについての基礎理論を理解する。
- ②対人コミュニケーション技術を身につける。
- ③学んだ知識や技術を、日常の対人コミュニケーション場面で実際に活かせるようにする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コミュニケーション学とは？
- 第2回 コミュニケーション構造と機能
- 第3回 敬語と敬意表現
- 第4回 トータルコミュニケーション
- 第5回 非言語的コミュニケーション①
- 第6回 非言語的コミュニケーション②
- 第7回 アクティブ・リスニング①
- 第8回 アクティブ・リスニング②
- 第9回 対人コミュニケーション・スキル①
- 第10回 対人コミュニケーション・スキル②
- 第11回 恋愛コミュニケーション
- 第12回 就職活動コミュニケーション
- 第13回 アサーション・トレーニング①
- 第14回 アサーション・トレーニング②
- 第15回 総まとめ

■ 評 価 方 法

出席点：15回×2点=30点（30%） 筆記試験：70点（70%）

■ 教 科 書

教科書は不要です。

■ 参 考 書

参考書は適宜紹介します。

■ 留 意 事 項

履修する学生は、以下の項目を厳守してください。

- ①私語は厳禁です
- ②講義中発言を求められた際には積極的に応じること
- ③自分の頭で考えること

授業科目	コミュニケーション・リハビリテーション学	担当者	山口忍・森岡悦子		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

前半では、リハビリテーションにおけるコミュニケーション技術について学ぶ。後半では、コミュニケーション障害を生じる失語症、認知症、脳外傷について、症状と障害メカニズムを理解し、コミュニケーションのとり方について学ぶ。

■ 目 標

リハビリテーションの臨床場面において、臨床的なコミュニケーション態度がとれ、患者および家族と対話ができるようになることを目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションにおける「聴く」とは、どういうことか
- 第2回 リハビリテーションにおける「声をかける」とはどういうことか
- 第3回 リハビリテーションにおける「話す」とはどういうことか
- 第4回 クリアスピーチの演習
- 第5回 障害児を持つ母の手記から、嬉しかったことば、悲しかったことばの抽出
- 第6回 障害児を持つ母の手記から、嬉しかったことばのまとめ（脳の本能）
- 第7回 相手の顔を見ることと、応答性について（発達から考える）
- 第8回 失語症のコミュニケーション障害（1）失語症のタイプ別の発話症状を理解する。
- 第9回 失語症のコミュニケーション障害（2）症状に応じたコミュニケーション方法を考える。
- 第10回 認知症（1）認知症の病態や初期症状を正しく理解する。
- 第11回 認知症（2）認知症の患者と家族への対応やコミュニケーションのあり方を考える。
- 第12回 脳外傷によるコミュニケーション障害（1）障害の特徴やその背景を理解する。
- 第13回 脳外傷によるコミュニケーション障害（2）コミュニケーション方法と社会的支援を考える。
- 第14回 レポート課題 VTRを見てコミュニケーションのあり方について考えをまとめる。
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

前半授業は、最終試験 50%で評価する。
 後半授業は、最終テスト20%、小テスト20%、レポート10%とする。
 前半授業、後半授業とも、欠席と遅刻は減点の対象とする。

■ 教科書

なし

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	心理学	担当者	鈴木 暁子		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

心理学は人間の心や行動を客観的に理解するための学問である。人間の心というブラックボックスを科学的に解き明かしていく心理学の研究方法は、私たちの身の回りの事象を客観的に理解する事にも役立つ。この広く深い学問の魅力をできる限り伝えたい。

■ 目 標

人を援助する職業に必要な人間理解の糸口となる心理学の基礎知識を学習するとともに、国家試験科目である臨床心理学の基礎となる知識も身につける事を目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心理学とは①
- 第2回 心理学とは②
- 第3回 心理学とは③
- 第4回 人の性格①
- 第5回 人の性格②
- 第6回 人の性格③
- 第7回 知能と記憶①
- 第8回 知能と記憶②
- 第9回 学習①
- 第10回 学習②
- 第11回 動機づけと情動①
- 第12回 動機づけと情動②
- 第13回 人と音楽
- 第14回 コーチング
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

期末試験80% 提出課題10%、出席・授業態度10%

■ 教 科 書

書 名：改訂版 はじめて出会う心理学
 著者名：長谷川寿一 他
 出版社：有斐閣アルマ

■ 参 考 書

書 名：「心理学概論」 山内弘継・橋本宰監修 ナカニシヤ出版
 著者名：山内弘継・橋本宰監修
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 留 意 事 項

授業科目	言語学	担当者	松井 理直		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

医療ミスを引き起こす原因の1つとなる論理判断の錯誤について、言語学の立場から考察を行う。

■ 目 標

基本的な論理学・統計学の概念を使いこなすことができるようになることが目標である。

■ 授 業 計 画

- 第1回 導入：医療ミスを引き起こす原因について
- 第2回 ことばと論理の関係（1）：連言判断における過誤
- 第3回 ことばと論理の関係（2）：選言判断における過誤
- 第4回 ことばと論理の関係（3）：排他的選言をめぐる過誤
- 第5回 ことばと論理の関係（4）：含意判断における過誤
- 第6回 ことばと論理の関係（5）：「言い換え」とトートロジー
- 第7回 仮説と錯誤
- 第8回 第一種のエラーと第二種のエラー
- 第9回 ことばと確率：医療診断におけるエビデンス
- 第10回 擬陽性問題について
- 第11回 前提確率の影響
- 第12回 統計学の基礎
- 第13回 統計的判断と第一種のエラー
- 第14回 判断力と第二種のエラー
- 第15回 授業のまとめと到達度の確認

■ 評 価 方 法

授業内に行うミニテスト：50% 到達度の確認試験：50%

■ 教 科 書

使用しません。毎回、プリントを配布します。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

真剣に授業を受けること。選択科目の授業であるため、態度の悪い学生は「即座に」受講資格を取り消すので十分注意されたい。

授業科目	情報処理学	担当者	永井 文子		
学科名	理学療法学専攻科	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻科	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

Microsoft Windows© および Microsoft Office© アプリケーションを使用し、ファイル・フォルダの管理、文書作成、レポート作成、表計算、グラフ作成、発表資料作成等、学習に必要なコンピュータスキルを学習する。さらに、セキュリティと情報モラルの基礎を学習する。

■ 目 標

- ・校内コンピュータシステム「Moodle」へのアクセス方法とファイル提出方法を理解し利用できる。
- ・PC上のメールシステムを使用し、各種メールの送受信ができる。
- ・文書作成ソフトを使用し、見やすく体裁の整った文書やレポートを作成できる。
- ・表計算ソフトを使用し、数式や書式設定を応用した表やグラフを作成・操作できる。
- ・プレゼンテーション資料作成ソフトを使用し、簡単な発表用スライドを作成できる。
- ・レポートの特徴と作成の流れ、ルールとマナーの存在を理解してレポートを作成できる。
- ・セキュリティと情報モラルの一般的な事例における、適切な対応／対策を理解し各自のID、メールアドレスおよびそれぞれのパスワードの管理ができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 授業概要。校内システム Moodle の ID / パスワード設定、および学校メールアドレス / パスワード設定
ファイル取得と提出操作
- 第2回 情報倫理、インターネット、eメール、入力操作練習方法
- 第3回 文書作成① Word2010概要、入力、レポート作成と書式
- 第4回 文書作成② レポート作成と構成
- 第5回 文書作成③ 表作成、印刷、オブジェクト利用
- 第6回 文書作成課題（Word 課題）
作成・提出
- 第7回 表計算① Excel2010概要、入力、集計表作成、シート操作
- 第8回 表計算② 集計表管理、関数
- 第9回 表計算③ 関数、グラフ作成、文書ファイルとの連携利用
- 第10回 表計算課題（Excel 課題）
作成・提出
- 第11回 プレゼンテーション① PowerPoint2010概要、入力、保存
- 第12回 プレゼンテーション② 発表資料作成と特殊効果
- 第13回 プレゼンテーション課題（PowerPoint 課題）
作成・発表
- 第14回 総合演習準備
文書及び集計表の作成と連携利用、ファイル管理操作
- 第15回 総合演習課題
作成・提出

■ 評価方法

受講態度10%、提出課題40%、総合演習課題50%

■ 教科書

書名：Windows 7 対応 30時間でマスター Office2010 (ISBN978-4-407-32095-4)

著者名：実教出版編集部 編

出版社：実教出版株式会社

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	医療情報学	担当者	星 雅丈		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

現代の保健・医療・福祉の分野において ICT の活用は必須となっており、将来、医療・福祉現場で働く者として、最低限習得が必要とされる基礎知識がある。本講義では医療情報システムが現場で如何に利用されているかについて解説し、さらに今後の調査研究活動に必要なデータ解析の基礎知識についても講義する。

■ 目 標

- ・ ICT の活用に必要な基礎知識を修得する。
- ・ 医療情報システムが実際にどのように利用されているかを理解する。
- ・ 調査研究におけるデータ解析の基礎知識について学ぶ。

■ 授 業 計 画

- 第1回 情報学（Ⅰ） 情報と社会の関わりについて
- 第2回 情報学（Ⅱ） 情報の表現と処理について
- 第3回 情報学（Ⅲ） ネットワーク技術について
- 第4回 医療情報システム（Ⅰ） オーダーエントリーシステムについて
- 第5回 医療情報システム（Ⅱ） 電子カルテシステムについて
- 第6回 医療情報システム（Ⅲ） 医用画像システムとリハビリテーションについて
- 第7回 医療情報システム（Ⅳ） リハビリテーション関連情報システムについて
- 第8回 医療情報システム（Ⅴ） 医療ネットワークシステムについて
- 第9回 医療情報の倫理 情報倫理・関係法規について
- 第10回 教室講義のまとめ／小テスト
- 第11回 演習：医療統計（Ⅰ） 医療評価指標について
- 第12回 演習：医療統計（Ⅱ） 尺度と度数分布・基本統計量について
- 第13回 演習：医療統計（Ⅲ） 仮説検定について
- 第14回 演習：調査研究（Ⅰ） 精度と真度／コホート研究とケースコントロール研究について
- 第15回 演習：調査研究（Ⅳ） 因果関係について

■ 評 価 方 法

出席 20％／小テスト 20％／課題提出 20％／期末レポート 40％

■ 教 科 書

■ 参 考 書

- 書 名：医療情報 医療情報システム編（第2版）
 著者名：日本医療情報学会編集
 出版社：篠原出版新社
- 書 名：医療情報 情報処理技術編（第2版）
 著者名：日本医療情報学会編集
 出版社：篠原出版新社
- 書 名：第2版 医療情報サブノート
 著者名：日本医療情報学会医療情報技師育成部会 編集
 出版社：篠原出版新社

■ 留 意 事 項

授業の進捗状況により授業計画を適宜変更することがある。
 なお、情報処理演習室における演習講義（第11～15回）では各回の課題提出を電子メールにて行うため、前期科目の「情報処理」において取得する Gmail のアカウントを忘れないように。

授業科目	医療情報学	担当者	周藤 俊治		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

現代の保健・医療・福祉の分野において欠かせない ICT の活用に必要な基礎知識として①デジタルデータがどのように発生しネットワーク上を流れているのか、②医療機関にどのようなシステムが導入・利用されているのか、③情報の収集や活用に関して講義を行なう。

■ 目 標

医療に関する情報がどのように発生し記録・活用されているのか、ICT の発展により医療環境がどのように変わったのか理解する力と、これからの技術の進展や医療環境の変化に対応して最適な医療環境の構築に向けて発想する力を身につけることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 情報学（Ⅰ）情報の表現と処理について
- 第2回 情報学（Ⅱ）ネットワーク技術について
- 第3回 保健医療情報システム（Ⅰ）電子カルテについて
- 第4回 保健医療情報システム（Ⅱ）オーダーエントリーシステムについて
- 第5回 保健医療情報システム（Ⅲ）医用画像システムについて
- 第6回 保健医療情報システム（Ⅳ）医療ネットワークシステムについて
- 第7回 医療統計（Ⅰ）尺度・度数分布について
- 第8回 医療統計（Ⅱ）代表値・散布度について
- 第9回 医療統計（Ⅲ）評価指標について
- 第10回 医療統計（Ⅳ）仮説検定について
- 第11回 評価・検査・測定（Ⅰ）精度と妥当性について
- 第12回 評価・検査・測定（Ⅱ）効果判定について
- 第13回 調査研究（Ⅰ）介入研究と観察研究について
- 第14回 調査研究（Ⅱ）因果関係について
- 第15回 医療情報の倫理 医の倫理・情報の倫理・関連法規について

■ 評 価 方 法

筆記試験 100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

適宜資料を配布します
<http://www.medbb.net> に講義情報を掲載しています

授業科目	統計学	担当者	周藤 俊治		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

取得したデータを集計し有効に活用するには、統計の基礎を理解するとともに取り扱う能力を身につける必要がある。そこで、本講義ではエクセルを授業内で利用しながらデータを実際にとり扱っていく。具体的には見やすい表の作り方やグラフの作り方から、t検定やカイ二乗検定などの手法について講義していく。

■ 目 標

代表値や散布度を算出できる
 推定や検定がどのようなことをしているのか理解する
 エクセルを用いてわかりやすい表・グラフの作成ができる
 エクセルの統計関係の関数を使うことができる

■ 授業計画

- 第1回 データ整理（1）－度数分布
- 第2回 データ整理（2）－代表値と散布度
- 第3回 データ整理（3）－相関
- 第4回 確率変数と確率分布（1）－計算機上での試行について ベルヌーイ分布 二項分布
- 第5回 確率変数と確率分布（2）－正規分布 t分布 カイ二乗分布
- 第6回 母集団と標本－不変分散と中心極限定理
- 第7回 推定（1）－点推定と区間推定
- 第8回 推定（2）－母分散未知の母平均の推定
- 第9回 推定（3）－中心極限定理
- 第10回 推定（4）－母比率 母分散の推定
- 第11回 検定（1）－検定の仕組みと有意水準 第一種の過誤と第二種の過誤
- 第12回 検定（2）－分散既知の正規母集団の検定
- 第13回 検定（3）－分散未知の正規母集団の検定
- 第14回 検定（4）－カイ二乗検定
- 第15回 まとめ－診療で発生するデータ及び公表されているデータの活用について

■ 評価方法

筆記試験 80% 提出課題 20%

■ 教科書

書名：初歩からしっかり学ぶ 実習 統計学入門 ～Excel演習でぐんぐん力がつく
 著者名：涌井良幸、涌井貞美 著
 出版社：技術評論社

■ 参考書

書名：診療情報管理士のためのやさしい医療統計学
 著者名：日本病院会／監 日本診療情報管理学会／編
 阿南 誠、三木 幸一郎、入江 真行、中村 洋一／執筆
 出版社：じほう

■ 留意事項

<http://www.medbb.net> に講義情報を掲載しています

授業科目	文学	担当者	伊東 和幸		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

日本の近現代の文学史を振り返りながら、明治期、大正期、昭和期（戦前、戦後）の散文（小説及び短詩形文学）の代表的作家の作品を紹介しながら、その一部を鑑賞する。

■ 目 標

日本の近現代の文学史の大枠を把握することにより、今後の学生生活、社会生活の中で、「日本の文学史上に残る代表的作家」、あるいは「知る人ぞ知る作家」の作品を読書するきっかけづくりとなることを望む。

■ 授 業 計 画

- 第1回 明治期の自然主義小説と反自然主義小説（夏目漱石を中心に）①
- 第2回 明治期の自然主義小説と反自然主義小説（夏目漱石を中心に）②
- 第3回 明治期の短詩形文学（与謝野晶子、石川啄木、正岡子規を中心に）
- 第4回 大正期の耽美派文学、白樺派文学、新現実主義文学
- 第5回 新現実主義文学（芥川龍之介を中心に）
- 第6回 大正期の大衆小説、探偵小説と短詩形文学（江戸川乱歩・横溝正史、萩原朔太郎・宮沢賢治を中心に）
- 第7回 昭和期（戦前）のモダニズム文学（川端康成・梶井基次郎を中心に）①
- 第8回 昭和期（戦前）のモダニズム文学（川端康成・梶井基次郎を中心に）②
- 第9回 芥川賞、直木賞の制定と昭和期（戦前）の短詩形文学（四季派詩人を中心に）
- 第10回 昭和（戦後）文学（三島由紀夫、安部公房、第三の新人を中心に）①
- 第11回 昭和（戦後）文学（三島由紀夫、安部公房、第三の新人を中心に）②
- 第12回 昭和（戦後）文学（三島由紀夫、安部公房、第三の新人を中心に）③
- 第13回 極私的推奨作家—寺山修司について
- 第14回 極私的推奨作家—福永武彦、佐藤泰志について
- 第15回 極私的推奨詩人—谷川俊太郎、石垣りん、茨木のり子について

■ 評 価 方 法

半期の授業を通して、2回課題を与え、その提出されたレポートの内容と出席率により評価する。（レポート60%、出席率40%）

■ 教 科 書

書 名：日本文学史—近代から現代へ
 著者名：奥野健男
 出版社：中央公論新書（212）

■ 参 考 書

書 名：「潮騒」「金閣寺」

著者名：三島由紀夫

出版社：新潮文庫

書 名：「寺山修司青春歌集」

著者名：寺山修司

出版社：角川文庫

書 名：「廃市・飛ぶ男」

著者名：福永武彦

出版社：新潮文庫

書 名：「きみの鳥はうたえる」

著者名：佐藤泰志

出版社：河出文庫

■ 留 意 事 項

--

授業科目	教育学	担当者	加藤 啓一郎		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

本人の主体性の尊重、関係性の重視という視点に立って、発達、成長の過程を捉えなおし、教育的な働きかけについて実践研究を通して検討する

■ 目 標

教育についての問題を、社会とのかかわりの中で捉えなおすことを通して、医療関係者に必要とされる教育学的思考や手法を身につけることを目的とする

■ 授業計画

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 主体性、関係性の重視と教育
- 第3回 生涯発達の視点と障害について1
- 第4回 生涯発達の視点と障害について2
- 第5回 生涯発達の視点と障害について3
- 第6回 生涯発達の視点と障害について4
- 第7回 生涯発達の視点と障害について5
- 第8回 教育における主体性の問題を捉えなおす
- 第9回 家族、地域の問題について
- 第10回 実践的検討1
- 第11回 実践的検討2
- 第12回 実践的検討3
- 第13回 実践的検討4
- 第14回 実践的検討5
- 第15回 これからの課題

■ 評価方法

レポート100%

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	法学概論	担当者	家 正治		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

「社会あるところに法あり」と言われている。社会規範には、道徳規範、宗教規範、習俗規範、法規範等があるが、それらの中で法規範はどのような特徴を有するかを把握し、また今日の国内法と国際法が当面する主要問題と課題を考察する。

■ 目 標

本講義を通じて、国内社会における「人の支配」に対する「法の支配」、また国際社会における「力の支配」に対する「法の支配」について理解する。そして、その中でリーガル・マインド「法的ものの考え方」に接近する。

■ 授 業 計 画

第1回 法学を学ぶにあたって	第9回 法と裁判
第2回 法とは何か（法と道徳）	第10回 国内法と国際法
第3回 法の発展と法の体系	第11回 戦争の違法化と安全保障
第4回 近代国家と憲法	第12回 国際人権保障とその発展
第5回 日本国憲法と国民主権主義	第13回 人民の自決権とその発展
第6回 日本国憲法と基本的人権尊重主義	第14回 地球環境の保護とその展開
第7回 日本国憲法と平和主義	第15回 国内社会と国際社会における「法の支配」
第8回 日本国憲法と権力分立（三権分立）	

■ 評 価 方 法

筆記試験 70%
出席を含む平常点 30%

■ 教 科 書

書 名：法学入門〔第6版〕
著者名：末川博 編
出版社：有斐閣

■ 参 考 書

書 名：現代法学入門〔第4版〕
著者名：伊藤正己・加藤一郎 編
出版社：有斐閣

書 名：法における常識
著者名：P.G. ヴィノグラドフ著 / 末延三次・伊藤正己 訳
出版社：岩波書店

書 名：「居住の権利」とくらし－東日本大震災復興をみすえて
著者名：家正治 編集代表
出版社：藤原書店

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的な勉学への努力を望みます。

授業科目	国際社会と日本	担当者	家 正治		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

国際社会の構造と現状を理解し、現代国際社会が直面する「戦争と平和の問題」「途上国問題」「人権問題」「地球環境問題」等の全人類的課題をとり上げながら、その中で占める日本の位置と役割について考察する。

■ 目 標

国際社会の構造や実態を把握し、国際社会を規律している原則や規範について理解・認識するとともに、現代国際社会において日本の占める立場と係わりについて理解できるようにする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 国際社会の成立と近代国際社会ならびに日本の位置と係わり
- 第2回 国際社会の発展と現代国際社会ならびに日本の立場と役割
- 第3回 国際社会を動かす主要なアクターと日本の事例
- 第4回 戦争の違法化と国際紛争の平和的解決（日本との係わりで）
- 第5回 勢力均衡政策から集団安全保障体制へ（日本との係わりで）
- 第6回 平和維持活動（PKO）の役割と日本
- 第7回 軍縮の現状と阻害要因及び日本の役割
- 第8回 日米安全保障体制の展開と現状
- 第9回 先進国と途上国をめぐる経済問題①
- 第10回 先進国と途上国をめぐる経済問題②
- 第11回 人権の国際的保障とその発展
- 第12回 人権の国際的保障と日本
- 第13回 難民問題とその庇護と保護および日本
- 第14回 地球環境の保護と国際協力ーとくに日本の役割について
- 第15回 今後の国際社会と日本

■ 評 価 方 法

筆記試験 70%
出席を含む平常点 30%

■ 教 科 書

書 名：新版国際関係
著者名：家正治 編
出版社：世界思想社

■ 参 考 書

書 名：国際機構〔第四版〕

著者名：家正治、小畑郁、桐山孝信 編

出版社：世界思想社

書 名：国際紛争と国際法

著者名：家正治、末吉洋文、桐山孝信、岩本誠吾、戸田五郎 共著

出版社：嵯峨野書院

書 名：「居住の権利」とくらし－東日本大震災復興をみすえて

著者名：家正治編集代表

出版社：藤原書店

■ 留 意 事 項

問題意識を持つとともに日常的存勉学への努力を望みます。

授業科目	物理学	担当者	非常勤		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションの基礎となる力学分野および医療機器と関連が深い電磁気学分野の演習を通して、医療に携わる者に求められる。正確な状況把握と分析力・厳密な論理的思考力・課題解決力を育成する。

■ 目 標

革新的リハビリテーション技術の開発が出来る人材を育成するために、物理学における課題解決と研究開発スキーマを習得させる。合わせて、専門科目への移行をスムーズにさせる。

■ 授業計画

第1回	物理学の発想と方法 (P.1～14)	講義ノート (1)
第2回	ベクトルによる力の表記 (P.15～18)	講義ノート (2)
第3回	運動の解析 (I) (P.19～22)	講義ノート (2、2')
第4回	運動の解析 (II)、運動の法則 (I) (P.22～25)	講義ノート (3)
第5回	運動の法則 (II)、演習 (P.26～30)	
第6回	運動の法則 (III)、運動量、エネルギー (P.29～41)	講義ノート (4)
第7回	モーメントと応力 (P.42～47)	講義ノート (5)
第8回	回転運動 (I) (P.48～52)、前半部分についてのテスト	講義ノート (6)
第9回	回転運動 (II) (P.53～55)、流体 (I) (P.189～191)	講義ノート (6、7)
第10回	流体 (II) (P.192～200)、テスト解説・結果連絡	講義ノート (7)
第11回	電気力と電場 (P.59～71)	講義ノート (8)
第12回	電場のエネルギー (P.71～80)、コンデンサー (P.81～94)	講義ノート (9)
第13回	電流回路 (P.95～110)	講義ノート (10)
第14回	電流と磁気 (P.111～136)	講義ノート (11)
第15回	放射線 (P.201～218)、医療機器	

■ 評価方法

試験 70% 平常点 30% (試験には小テストを含む)

■ 教科書

書名：生命科学のための基礎シリーズ 物理
 著者名：監修：大島泰郎 著者：川久保達之 他3名
 出版社：実教出版

■ 参考書

■ 留意事項

第8回のテストは必ず受験すること

授業科目	生物学	担当者	林 研		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

生物を理解する枠組みとしての細胞と遺伝子について、また「生きている」ことの本質でもある代謝と自己維持の仕組みについて学ぶ。

■ 目 標

生物の体のはたらきを、生命の基本的なシステムとの関連で理解できるようになること。

■ 授業計画

- 第1回 ガイダンス、生物とは何か
- 第2回 細胞（1） 細胞の種類と構造
- 第3回 細胞（2） 細胞の分裂と分化
- 第4回 細胞（3） 動物の発生と幹細胞
- 第5回 細胞（4） 神経、筋肉、骨の細胞
- 第6回 遺伝子（1） 遺伝の法則
- 第7回 遺伝子（2） DNAと遺伝子
- 第8回 遺伝子（3） タンパク質の合成
- 第9回 代謝（1） 酵素と物質代謝
- 第10回 代謝（2） エネルギー代謝
- 第11回 代謝（3） 生態系の物質循環
- 第12回 生体の維持（1） 内分泌系と自律神経系
- 第13回 生体の維持（2） 免疫
- 第14回 バイオテクノロジー
- 第15回 まとめと復習

■ 評価方法

期末試験 80% 小テスト2回 20%

■ 教科書

書名：ZEROからの生命科学
 著者名：木下勉、小林秀明、浅賀宏昭
 出版社：南山堂

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	生活科学 (福祉住環境論)	担当者	山田 隆人		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

OT・PTの職能の一つとして、日常生活活動の支援がある。環境因子である居住環境を改善することで、対象者の生活機能の維持・向上を計ります。本講義では、居住環境の改善に関連する制度や施策、関連する職能との連携および居住環境改善を行う為の基礎知識を学びます。

■ 目 標

居住環境改善に関する法制度や社会状況を理解する
 高齢者や障害者の暮らしの状況を理解する
 障害の特性を理解し、環境支援の方法を理解する

■ 授 業 計 画

- 第1回 高齢者を取り巻く社会状況と住環境
- 第2回 介護保険制度の概要
- 第3回 高齢者向けの住宅施策の変遷と概要
- 第4回 障害者を取り巻く社会状況と住環境
- 第5回 障害者福祉施策の概要、障害者向けの住宅施策の変遷と概要
- 第6回 住環境整備とケアマネジメント
- 第7回 住宅の構造と作り
- 第8回 福祉住環境整備の進め方
- 第9回 居住環境改善・手すり
- 第10回 居住環境改善・手すりトイレ
- 第11回 居住環境改善・浴室
- 第12回 居住環境改善・福祉用具
- 第13回 居住環境改善・動線計画
- 第14回 居住環境改善計画の検討1
- 第15回 居住環境改善計画の検討2

■ 評 価 方 法

成績は、出席5割、提出物5割で判断します。講義の中で、レポート等の提出課題があります。

■ 教 科 書

書 名：改訂版 福祉住環境コーディネーター検定試験 2級公式テキスト
 著者名：東京商工会議所 編
 出版社：東京商工会議所

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	自然科学概論	担当者	林 研		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

自然科学の歴史、方法、および様々な分野の成果・現状について紹介する。

■ 目 標

科学の方法を理解した上で幅広い知識を身につけ、現代の諸問題を考える力をつけることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 ガイダンス、自然科学とは何か
- 第2回 科学の歴史
- 第3回 科学の方法
- 第4回 宇宙と物質
- 第5回 相対論と量子論
- 第6回 素粒子の世界
- 第7回 原子力と放射線
- 第8回 エネルギーと環境
- 第9回 地球科学
- 第10回 生命の起源と進化
- 第11回 ゲノムサイエンス
- 第12回 脳とニューロン
- 第13回 認知科学
- 第14回 複雑系の科学
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

期末試験 90% 出席 10%

■ 教 科 書

使用しません。適宜資料を配付します。

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	栄養学	担当者	仲村 祐江		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

授業計画の内容を学ぶことにより、人体における食物の役割を理解し、健康増進・疾病予防における栄養素を学習します。

■ 目 標

栄養学の基礎である人間の活動や代謝のメカニズムなどを理解することにより、保健・医療・福祉・介護に関する分野においてより高度な知識を持つスペシャリスト育成を目指します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 栄養の概念
- 第2回 栄養と食生活
- 第3回 食物の摂取調節と栄養素の補給
- 第4回 栄養素とその機能
- 第5回 食物の消化と呼吸
- 第6回 エネルギー代謝
- 第7回 糖質の栄養
- 第8回 脂質の栄養
- 第9回 タンパク質の栄養
- 第10回 無機質の栄養
- 第11回 ビタミンの栄養
- 第12回 水分・電解質の代謝
- 第13回 食物繊維と難消化性多糖類
- 第14回 生活習慣病
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

- 筆記試験 80%
- 小テスト 10%
- 出席状況 10%

■ 教 科 書

書名：栄養科学シリーズ NEXT 基礎栄養学
 著者名：木戸康博・中坊幸弘
 出版社：講談社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	基礎ゼミナール	担当者	専任教員（多数）	
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数 2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修 必修

■ 内 容

自分自身の療法士として将来像、求められる学習態度・学習方法、療法士としてのコミュニケーション技能、対象者の理解、プレゼンテーション方法、レポートの書き方などについて、講義とグループ活動をとおして学ぶ。
また、療法士として求められるリスク管理やチーム医療の概要について学ぶ。

■ 目 標

1. 自分の将来像をイメージし、早期に大学生としての学習方法や学習に対する構えをつくる。
2. 療法士としての求められる態度・知識・技能を知り、1歩でも近づくための方向付けを行う。
3. 他者の意見を理解する能力、自分の考えを整理して表現する能力、情報を収集し整理する力、問題解決能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を高める。

■ 授 業 計 画

前期

第1回 学長講話

大学での学習法について先輩から学ぼう

第2回 ハラスメントについて学ぼう（森田講師）

第3回 療法士としてのコミュニケーション技能について学ぼう①（山口教授）

第4回 療法士としてのコミュニケーション技能について学ぼう②（演習）

第5回 療法士としてのコミュニケーション技能について学ぼう③（演習）

第6回 自分自身のマナーについて見直そう（マナーアップ研修） * 1

第7回 違法薬物について学ぼう（薬物乱用防止講演会） * 1

第8回 先輩セラピストの話を聞いてみよう * 1

第9回 自分が目指す療法士像（卒業後の自分）とそれになるために必要なこと（これからのキャンパスライフ）について考え、意見交換しよう

第10回 3、4の内容をまとめて発表の準備をしよう。

第11回 まとめた内容を発表し、グループ間で意見交換しよう（模造紙を使用） 2会場
1グループ発表6分 質疑6分（12分） 1会場6～7班

第12回 自分自身の学習方法について見直そう①

～お互いのノートを持ち寄り、良いノートの取り方と学習方法について意見交換しまとめる～

第13回 自分自身の学習方法について見直そう②

～第7回で意見交換した内容を報告する（ノートの取り方の事例報告を含む）～

第14回 障がいのある当事者の話を聞いてみよう①（講話・座談会） * 1

第15回 障がいのある当事者の話を聞いてみよう①（グループディスカッション）

後期

第16回 国家試験の問題を解いてみよう * 1

第17回 チーム医療について学ぼう① 講義とディスカッションテーマの提示（石倉教授）

第18回 チーム医療について学ぼう② グループディスカッション

第19回 療法士としてのリスク管理について学ぼう①（森田講師）

第20回 療法士としてのリスク管理について学ぼう②（一次救急救命法 AED の使用方法） * 1

第21回 医療・福祉に関する情報収集の方法について学ぼう 講義

第22回 情報の収集を実践してみよう（課題を設定し、みんなで調べてみよう）①

第23回 情報の収集を実践してみよう（課題を設定し、みんなで調べてみよう）②

第24回 収集した情報の整理方法とレポートの作成方法について学ぼう 講義

第25回 収集した情報を整理しレポートの作成してみよう①

第26回 収集した情報を整理しレポートの作成してみよう②

第27回 わかりやすいプレゼンテーションの方法を学ぼう 講義

第28回 調べた内容を発表するための準備をしよう①（パワーポイントの作成）

第29回 調べた内容を発表するための準備をしよう②（パワーポイントの作成）

第30回 調べた内容を発表してみよう 2会場 1グループ発表6分 質疑6分（12分） 1会場6～7班

■ 評価方法

授業への貢献度（講義・座談会・ディスカッション時）：60%、
課題点（レポート）：20%、発表点：20% * 2

■ 教科書

■ 参考書

書名：知へのステップ 第3版

著者名：学習技術研究会

出版社：くろしお出版

書名：アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門

著者名：佐藤望 他

出版社：慶應義塾大学出版会

書名：大学基礎講座 充実した大学生活をおくるために

著者名：藤田哲也

出版社：北大路書房

書名：広げる知の世界 大学でのまなびのレッスン

著者名：北尾謙治 他

出版社：ひつじ書房

■ 留意事項

* 1 第6, 7, 8, 14, 16, 20回に関しては、外部講師の都合により日程を変更する可能性があります。

* 2 授業を欠席した場合は、該当回の出席・態度、課題、発表点は0点となる。

授業科目	医の倫理 (医療倫理学・生命倫理学)	担当者	浅野 遼二		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

「医の倫理」の理想的系譜を明らかにし、「生命倫理」としての「医の倫理」の中心課題を講義する。

■ 目 標

理学療法や作業療法などのリハビリテーション医療を学ぶ者に必要な「医の倫理」の知識を習得することにある。

■ 授 業 計 画

- 第1回 「医の倫理」思想史と理学療法士・作業療法士の倫理綱領
「誓い」から「患者の権利章典」までの「医の倫理」の系譜を簡潔に示し、理学療法士と作業療法士の倫理規定の位置づけを明らかにする
- 第2回 規範倫理学から応用倫理学へ
規範倫理学（徳倫理学、功利主義的倫理学、義務倫理学）と応用倫理学（環境倫理学、生命倫理学）を簡潔に示し、「医の倫理」の学的原点を明らかにする。
- 第3回 「生命倫理」としての「医の倫理」
人権回復闘争と先端医療技術の発展に由来するバイオエシックス（生命倫理学）の成立とテーマを明らかにし、「医の倫理」の諸問題を提示する。
- 第4回 「医の倫理」の中心課題～恩恵と自律～
自律、恩恵、正義、無危害等の原理と、医師と患者関係を規定する「インフォームド・コンセント」思想を講ずる。
- 第5回 「医の倫理」の中心課題～生命の質～
功利主義倫理に立脚するエンゲルハートとシンガーの人格的生命論を講じ、パーソン論を展開する。
- 第6回 「医の倫理」の中心課題～生命の尊厳～
聖書と義務倫理学に立脚するシュヴァイツァーとウォーノックの道徳的感情論的生命論を展開する。
- 第7回 ケア倫理としての「医の倫理」
20世紀後半になって一躍注目を集めた「ケア倫理」を語り、療法士の職業倫理の原点と育成を講義する。
- 第8回 これからの「医の倫理」
ケア倫理に基礎を置きながら、現代医学が直面する iPS 細胞等を含む倫理的諸問題を検討する。

■ 評 価 方 法

- 筆記試験 70%
授業態度（出席点を含む） 30%

■ 教 科 書

書 名：プリントを配布する。

■ 参 考 書

書 名：「バイオエシックスの基礎」

著者名：加藤尚武、飯田亘之編

出版社：朝日出版

書 名：「生命医学倫理」

著者名：ビーチャム、チルドレス著、永安幸正、立木教夫訳

出版社：成文堂

書 名：「インフォームド・コンセント」

著者名：ビーチャム、ファーデン著、酒井忠昭、秦洋一訳

出版社：みすず書房

書 名：「医の倫理」

著者名：中川米造

出版社：玉川大学出版部

書 名：「バイオエシックス入門」

著者名：今井道夫、香川知晶

出版社：東信堂

書 名：「生命倫理と法」

著者名：内山雄一編

出版社：太陽出版

■ 留 意 事 項

授業科目	チーム医療論	担当者	今井・森田・木村		
学科名	理学療法学専攻	学年	4年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

患者の治療という共通の目的を達成するために医療現場では様々な職種がそれぞれの専門を生かし協調して働くことが必要である。これがチーム医療である。皮相なチーム医療の解釈では、医師によるパートナーリズムを排して、職種の上下なく協調して医療をすることとしているが、リーダーシップのないチーム医療は危険である。本講義では、各自が、実習中の経験をもとにチーム医療について実践例をレポートにまとめ報告し、そのレポートも踏まえて医師、理学療法士、看護師、などの資格を持つ教官が講義をおこなう。

■ 目 標

チーム医療とは、チームリーダーの下に、自己の専門性を十分に理解をした応分の技量をもつ専門職種が各々の役割を認識し、問題点と療養目標を共有することの重要性を正しく認識し、各専門職種間の緻密な連携・協働を行うことである。こうした認識を踏まえた上で、本講義の目標は、各自の経験と講義から、の本質を理解し、医療チームとして機能するために必要なことは何かを学習し理解することである。

■ 授業計画

- 第1回 チーム医療の実際（1）今井
- 第2回 チーム医療の実際（2）今井
- 第3回 チーム医療の実際（3）今井
- 第4回 チーム医療の実際（4）今井
- 第5回 チーム医療論 概論（1）木村
- 第6回 チーム医療論 概論（2）木村
- 第7回 チーム医療の実際とセラピストに求められる能力（1）今井
- 第8回 チーム医療の実際とセラピストに求められる能力（2）今井
- 第9回 チーム医療の実際とセラピストに求められる能力（3）今井
- 第10回 チーム医療の実際とセラピストに求められる能力（4）今井
- 第11回 チーム医療実践のために必要な能力（1）森田
- 第12回 チーム医療実践のために必要な能力（2）森田
- 第13回 チーム医療実践のために必要な能力（3）森田
- 第14回 チーム医療実践のために必要な能力（4）森田
- 第15回 総括 今井

■ 評価方法

出席 30% 症例報告 30% 筆記試験 40%

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	スポーツ医学	担当者	中村 憲正		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

スポーツ医学の急性および慢性の内科的・整形外科的疾患について学ぶ。スポーツ選手の健康管理、トレーニングによる生理的適応現象、トレーニングによる病的現象、外傷、スポーツによる内科的・整形外科的障害とその対策。生活習慣病、フィットネスについて知識を得る。

■ 目 標

スポーツ活動の場において、医療スタッフ、教育者、指導者として必要なスポーツ医学の知識を体得する。

■ 授業計画

- 第1回 スポーツ医学概論 スポーツと健康、エイジングについて学ぶ
- 第2回 運動の生理、病理学 力学刺激による生体反応を学ぶ
- 第3回 スポーツ障害総論1 内科的なスポーツ障害について学ぶ
- 第4回 スポーツ障害総論2 外科的なスポーツ障害について学ぶ
- 第5回 部位別スポーツ障害 頭頸部・体幹
- 第6回 部位別スポーツ障害 上肢
- 第7回 部位別スポーツ障害 下肢
- 第8回 アンチドーピング
- 第9回 スポーツにおけるメディカルサポートシステムの構築 その理論と実際
- 第10回 フィジカルトレーニングの理論と実践 その最先端を学ぶ
- 第11回 アスレティックトレーナーとは
- 第12回 スポーツ現場とスポーツ医学1 スポーツ現場で発生しやすいスポーツ医学的問題について学ぶ。
- 第13回 スポーツ現場とスポーツ医学2 スポーツ現場におけるコンディショニングについて学ぶ。
- 第14回 スポーツと栄養
- 第15回 予備日

■ 評価方法

レポート100%

■ 教科書

書 名：新板スポーツ外傷・障害の理学診断・理学療法ガイド

著者名：臨床スポーツ医学編集委員会

出版社：文光堂

書 名：アルレティックリハビリテーションガイド 競技復帰・再発予防のための実践的アプローチ

著者名：福林 徹

出版社：文光堂

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	リハビリテーション概論	担当者	井上 悟		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリという言葉は、一般社会でも非常によく使われるようになった。通常、疾病や外傷によって生じた障害に対する機能回復のための訓練治療として用いられてきている。しかし、この解釈は、リハビリテーションの中の極めて狭い領域を示しているに過ぎない。

リハビリテーション≠運動・機能訓練 である。

リハビリテーション本来の理念を歴史的背景を含め紹介する。

■ 目 標

リハビリテーション (rehabilitation) を正しく理解する。

正しい知識をもって、リハビリテーション医療の対象や現状、各専門職の役割について知る。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションとは？ その理念
- 第2回 リハビリテーションの領域
- 第3回 リハビリテーションの過程・諸段階
- 第4回 リハビリテーション医療（機関）の役割分担
- 第5回 リハビリテーション医療はチーム医療
- 第6回 リハビリテーション医療を支える専門職
- 第7回 疾患と障害の関係、障害の種類とその様相
- 第8回 障害と障害分類
- 第9回 障害評価（機能障害の評価、能力障害の評価）
- 第10回 疾病の治療と廃用症候群（二次障害）
- 第11回 高齢者の現状と介護保険制度
- 第12回 障害の受容とノーマライゼーション
- 第13回 地域におけるリハビリテーション
- 第14回 リハビリテーションを支える社会保障制度、法律
- 第15回 早期病院見学実習に向けて

■ 評価方法

出席・授業態度等30%、筆記試験70%

■ 教科書

書 名：リハビリテーション総論（第2版）
 著者名：椿原 彰夫
 出版社：診断と治療社

■ 参考書

書 名：リハビリテーション
 著者名：砂原茂一
 出版社：岩波新書

書 名：リハビリテーション概論：リハ医学全書
 著者名：砂原茂一
 出版社：医歯薬出版

書 名：入門リハビリテーション概論 第7版
 著者名：中村隆一
 出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

各回の講義テーマ、内容については関連する講義の進捗状況により変更することがあります。

授業科目	リハビリテーション医学	担当者	阿部 和夫		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーション医学の講義では、リハビリテーション医学の目的である、「障害を持つ人々を身体的、精神的、社会的、経済的にできる限り自立させる」ことをどのように達成したら良いのかを考える機会を受講者に提供したいと思います。

■ 目 標

講義を参考にして、リハビリテーションに対する自分の考えを持つことができ、リハビリテーション関連職種の専門家を目指すための明確な動機付けができることを期待しています

■ 授 業 計 画

- 第1回 リハビリテーションとは（リハビリテーションの定義、目的）
- 第2回 疾病と障害について
- 第3回 リハビリテーションにおける障害の評価（障害の捉え方）
- 第4回 心理学（神経心理学、臨床心理学、など）とリハビリテーション
- 第5回 発達とリハビリテーション
- 第6回 リハビリテーションの段階
- 第7回 リハビリテーションの実際
- 第8回 各論のための概説（評価法、検査法）
- 第9回 脳血管障害
- 第10回 脳外傷における高次脳機能障害
- 第11回 脊髄損傷
- 第12回 変性疾患
- 第13回 筋疾患
- 第14回 末梢神経疾患
- 第15回 補遺、まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

書 名：リハビリテーション概論 医学生・コメディカルのための手引書
 著者名：上好昭孝、土肥信之
 出版社：永井書店

■ 参 考 書

書 名：神経の病気
 著者名：図説カラダ大辞典編集委員会 編
 出版社：金沢医科大学出版局

.....

書 名：神経心理学入門
 著者名：山鳥重
 出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

私語など、他の受講者および講義をしている私の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。医療業界で働くための最低限の常識を身につけて講義に望んでください。

授業科目	言語聴覚概論	担当者	山口忍		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士が担当する言語聴覚嚥下障害の概要について知る。臨床場面で遭遇する失語症・運動性構音障害の方とのフリートークについて、留意点を知るとともに、実際の患者様と「話そう会」を通じてコミュニケーションを図る。

■ 目 標

言語聴覚障害について知り、特に嚥下障害のメカニズムと評価・訓練について説明ができるようになる。言語障害の患者様と、障害に配慮したフリートークを実施できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 言語・聴覚・嚥下障害の概要
- 第2回 コミュニケーション・リハビリテーション学の復習 聞くことと話すこと
- 第3回 小児領域：発達遅滞
- 第4回 小児領域：発達障害
- 第5回 嚥下障害：嚥下の基本的メカニズムと嚥下障害の実態
- 第6回 嚥下障害：評価と訓練
- 第7回 聴覚障害：聴覚障害者の聞こえと補聴機器
- 第8回 失語症・運動性構音障害の症状
- 第9回 失語症・運動性構音障害の患者様とのコミュニケーションの注意点
- 第10回 失語症・運動性構音障害の会話場面の VTR 視聴と演習
- 第11回 話そう会の事前授業
- 第12回 話そう会の実施
- 第13回 〃
- 第14回 〃
- 第15回 話そう会の振り返りとレポート作成

■ 評 価 方 法

話そう会の出席を重視（80％）して評価する 残り20％はレポート評価

■ 教 科 書

書 名：絵でわかる言語障害－ことばのメカニズムから対応まで
 著者名：毛束真知子
 出版社：学研

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

話そう会は、土曜日に実施する。日程は、開講後追って知らせる。

授業科目	看護学・介護学概論	担当者	森田婦美子・橋本卓也		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1年
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 人体の構造, 生理学の基礎理解のもと, 人間の病気の成り立ちと回復過程, 健康について理解を深める。介護学では近年, 重要視されている「キュアからケアへ」という理念に内包されている「治療から全人的ケアへ」「医学モデルから生活・社会モデル」への転換という視点を共有するとともに「利用者本位」や「自己決定」等の理念・アプローチを巡って利用者-介護者間に生起する「ジレンマ」についても考察する。また, 重い障害を持つ人たちから提起された「介助者手足論」という考え方を通して利用者の尊厳を支えるケアのあり方や自立(自律)支援をめざすケアについて理解を深める。

■ 目 標

- (看護学) ①医療従事者の土台となる解剖、生理学が理解できる。
 ②病気の成り立ちと回復過程が理解できる。
 (介護学) ①日本が抱える介護問題の実態及び、その要因について理解できる。
 ②利用者本位・当事者主体の視点にたった介護・介助のあり方について考察することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 食物を摂取して消化、吸収し排泄する仕組み
 第2回 食物を摂取して消化、吸収し排泄する仕組みの障害による影響
 第3回 食物を摂取して消化、吸収し排泄する仕組みによる障害からの回復
 第4回 尿をつくる仕組み
 第5回 尿をつくる仕組みの障害による影響
 第6回 尿をつくる仕組みの障害による影響からの回復
 第7回 内部環境を整える仕組みと障害による影響 (内分泌 糖尿病)
 第8回 生体防衛機構・免疫系の障害による影響 (性感染症)
 第9回 オリエンテーション
 日本が抱える介護問題の背景 (日本の近代化と少子・高齢化問題)
 第10回 介護に関する保健・福祉政策の動向と我が国の介護制度の流れ
 第11回 介護の原理性 (介護の本質及び全人的視点に立ったケアのあり方)
 第12回 介護・介助実践を巡って生起するジレンマについて
 第13回 重い障害を持つ人たちから提起された「介助者手足論」を通して利用者本位の視点にたったケアの本質を問う
 第14回 アシュリー事件を通して重い障害をもつ人たちに対する介助のあり方・価値を問う
 第15回 感情労働としてのケアワークについて

■ 評 価 方 法

筆記試験 50% (看護学) レポート 50% (介護学) その他、出席状況を加味し総合的に評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

書名：(介護論) アシュリー事件
 著者名：児玉真美
 出版社：生活書院

■ 留 意 事 項

授業への積極的な参加を望む。他者に迷惑をかける等の授業中の態度は減点の対象にする。

授業科目	疫学・公衆衛生学	担当者	白井 文恵		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

地域で生活する人々の健康の維持・増進・向上のために必要な公衆衛生学について学ぶ。

■ 目 標

- ①健康を守る社会の仕組みを理解する。
- ②健康に関する研究手法である疫学について理解する。

■ 授業計画

- 第1回 公衆衛生の意義
- 第2回 疫学
- 第3回 人口統計
- 第4回 母子保健
- 第5回 健康状態と生活習慣病
- 第6回 高齢者保健福祉
- 第7回 障害児・障害者対策
- 第8回 精神保健福祉
- 第9回 感染症対策（関係法規）
- 第10回 感染症対策（性感染症、ウイルス性肝炎）
- 第11回 感染症対策（結核、インフルエンザ）
- 第12回 感染症対策（予防接種）
- 第13回 食品衛生
- 第14回 社会保障制度
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 教科書

書名：国民衛生の動向・厚生指標 増刊 2013／2014
 出版社：厚生労働統計協会

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	救急医学・救急措置法	担当者	藤岡 他		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、救急医学の概要と救急措置法について学ぶ。蘇生法、止血法、体位保持法、固定法、運搬法を学習する。

リハビリテーション医療の対象者は、脳血管障害、循環器疾患等の基礎疾患を有しており、対象者の評価やリスク回避についても広く学習する。

■ 目 標

救急病態を理解し、緊急場面で必要となる蘇生法、止血法、包帯法、体位保持法、固定法、運搬法を修得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 救急医学総論 (大野)
- 第2回 呼吸器、循環器の救急病態と処置法 (大野)
- 第3回 循環器、代謝系疾患の救急病態と処置法 (大野)
- 第4回 心肺停止の病態 ショックの病態 (神納)
- 第5回 心肺停止の処置 ショックの処置 (堀江)
- 第6回 外傷の病態 環境障害の病態 (神納)
- 第7回 外傷の処置 環境障害の処置 (堀江)
- 第8回 意識障害の病態 吐下血と腹痛の病態 (神納)
- 第9回 意識障害の処置 吐下血と腹痛の処置 (堀江)
- 第10回 止血法 ① (森田)
- 第11回 止血法 ② (森田)
- 第12回 緊急出産 (森田)
- 第13回 消化器、内分泌疾患の救急病態と処置法 (藤岡)
- 第14回 感染症、アナフィラキシーの救急病態と処置法 (藤岡)
- 第15回 急性中毒、異物の救急病態と処置法 (藤岡)

■ 評価方法

定期試験 100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	地域医療実践学	担当者	辻 郁 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	4年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法士・作業療法士として、より良い実践力を発揮できるよう、必要な基礎的知識を深め、その知識を確実なものとするための、主としてグループワークによる授業である。

■ 目 標

1. 理学療法士・作業療法士に必要な知識・技術は何かが系統的にわかること
2. 自己に不足している知識領域がわかること
3. 不足している知識を充足させ、実践に必要な基礎知識を固めることができること

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
地域医療実践に必要な知識・技術を実践者から学ぶ
講義
- 第2回 必要な知識を系統的に整理し、全体像を見直す
グループワーク
- 第3回 自分に適した学習スタイルを明らかにする
自己の課題を分析し文章化する 自己の学習プログラムを立てる
レポート課題
- 第4回 ミニテスト 不足している知識領域を明らかにする
- 第5回 知識を充足する
グループワーク／グループ別講義
- 第6回 知識を充足する
グループワーク／グループ別講義
- 第7回 ミニテスト 不足している知識領域を明らかにする
- 第8回 知識を充足する
グループワーク／グループ別講義
- 第9回 知識を充足する
グループワーク／グループ別講義
- 第10回 地域医療実践の視点から、臨床実習での事例をまとめなおす。
必要な施策を提案し、その根拠を示す
レポート課題
- 第11回 地域医療実践の視点から、臨床実習での事例をまとめなおす。
必要な施策を提案し、その根拠を示す
レポート課題
- 第12回 自分に適した学習スタイルを見直す
自己の課題を分析し文章化する、自己の学習プログラムを立てる
レポート課題
- 第13回 ミニテスト 不足している知識領域を明らかにする
- 第14回 知識を充足する
グループワーク／講義
- 第15回 ミニテスト 不足している知識領域を明らかにする

■ 評価方法

筆記試験（80%）およびレポート（20%）で、それぞれ60%以上の点数で合格とする

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

必要な知識を得るだけでなく、この科目を通して、自分自身の学習スタイルや課題を明らかにし、今後の理学療法・作業療法の実践の基盤をかためてもらいたい

授業科目	障害者福祉論	担当者	橋本 卓也		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

障害者福祉に関する理念・価値・法制度及び障害構造等を体系的に理解するとともに障害をもつ人たちの生活・教育・雇用・施設環境等の実態を通して彼らを排除する社会構造への関心と支援のあり方を模索する。障害をもつ人たちがおかれている現状を把握し「医学モデル」という狭義の捉え方ではなく、「生活／社会モデル」の視点からこの問題を捉える

■ 目 標

- ①障害者福祉の理念・価値および障害をもつ人たちの生活実態を把握することができる
- ②障害をもつ人たちの生活ニーズを解決するための制度・施策を把握し、支援のあり方を考察することができる
- ③医学モデルと生活／社会モデルの差異を理解できる

■ 授業計画

- | | | |
|------|-------------------------------------|---------------|
| 第1回 | オリエンテーション | 障害者福祉の理念および価値 |
| 第2回 | 障害の概念および障害構造について（ICIDHモデルからICFモデルへ） | |
| 第3回 | 障害者の法的定義と日本の障害者の実態 | |
| 第4回 | 障害者福祉の史的展開及び動向（欧米と日本の差異） | |
| 第5回 | 日本の障害者福祉施策体系 | |
| 第6回 | 障害者の雇用・就労の現状と課題 | |
| 第7回 | 障害者の所得保障と経済的負担軽減 | |
| 第8回 | 障害者総合支援法Ⅰ（旧：障害者自立支援法） | |
| 第9回 | 障害者総合支援法Ⅱ | |
| 第10回 | 障害児教育の変遷と課題 | |
| 第11回 | 障害者施設論（世界の情勢と課題及び地域移行について） | |
| 第12回 | 障害者の権利擁護（権利侵害の実態と要因） | |
| 第13回 | 障害者のセルフヘルプ運動（理念と機能・役割） | |
| 第14回 | 障害者ケアマネジメントと障害者の意思決定支援について | |
| 第15回 | ゲストスピーカー（障害当事者）による講義と交流 | |

■ 評価方法

定期試験 85%
出席率 15% その他、授業中の態度等を加味し総合的に評価する

■ 教科書

■ 参考書

書名：よくわかる障害者福祉
著者名：小澤 温（編）
出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

授業への積極的な参加を望む

授業科目	健康科学概論	担当者	佐藤 秀紀		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本授業では、健康と人間の生活にかかわる心身の諸問題を課題として、生涯にわたり積極的な健康を保持増進させていくという Positive Health の観点から多様化した現代社会に対応できる健康処方について説明する。

■ 目 標

現代社会における人（ヒト）の適応とライフスタイルについて理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 健康科学とは何か がんを科学する
- 第2回 健康に影響する因子 喫煙の科学
- 第3回 健康に影響する因子 アルコール依存症の科学
- 第4回 生活習慣病と健康 メタボリックシンドロームの科学
- 第5回 生活習慣病と健康 血圧の科学
- 第6回 精神の健康 うつ病の科学
- 第7回 精神の健康 不安障害の科学
- 第8回 栄養と健康 ダイエットの科学
- 第9回 運動の身体的効果 ①筋力トレーニングの科学と中高年のための運動法
- 第10回 運動の身体的効果 ②骨粗しょう症の科学
- 第11回 各種疾患に対する運動処方 ①首の痛み・肩の痛み
- 第12回 各種疾患に対する運動処方 ②股関節の痛み
- 第13回 各種疾患に対する運動処方 ③膝の痛み
- 第14回 各種疾患に対する運動処方 ④手のトラブル・踵の痛み
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

小テスト50%、学期末試験50%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

書名：『生き方としての健康科学』
 著者名：山崎喜比古 朝倉隆司編
 出版社：有信堂

■ 留 意 事 項

授業科目	感染症学	担当者	藤岡 重和		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

感染症と人・微生物との関わり、感染防御機構、感染症の検査と診断、治療、そして感染予防策について学習する。理学療法、作業療法の領域においても、感染症については特に注意が必要であり、各種感染症について基本的理解ができるように解説する。

■ 目 標

1. 微生物と感染症、感染防御機構について基本的理解ができる
2. 代表的な感染症について、病原微生物とその感染経路、臨床像、診断と治療法を理解する
3. 院内感染および感染予防策について説明できる

■ 授 業 計 画

第1回	感染症総論	(1)	微生物と感染症、感染防御機構
第2回	感染症総論	(2)	感染症の検査と診断、感染症の治療
第3回	感染症各論	(1)	呼吸器感染症、結核
第4回	感染症各論	(2)	消化器感染症、食中毒
第5回	感染症各論	(3)	肝炎
第6回	感染症各論	(4)	尿路感染症、性感染症
第7回	感染症各論	(5)	皮膚、粘膜の感染症
第8回	感染症各論	(6)	人獣共通感染症、寄生虫感染症
第9回	感染症各論	(7)	小児の感染症、母子感染
第10回	感染症各論	(8)	高齢者の感染症、日和見感染症
第11回	感染症各論	(9)	新興感染症、感染症トピックス
第12回	感染制御学	(1)	院内感染、標準予防策、感染経路別予防策
第13回	感染制御学	(2)	術後感染症、カテーテル関連感染症、針刺しと感染症
第14回	感染制御学	(3)	薬剤耐性菌による感染症、その他
第15回	総復習		

■ 評 価 方 法

定期試験 80% 小テスト 10% 出席、態度 10%

■ 教 科 書

「臨床微生物、医動物 (NURSING GRAPHICUS EX 5)」 MC メディカ出版 (2004年)

■ 参 考 書

「微生物学 第2版 (新クイックマスター)」 医学芸術社 (2010年)
「病原体、感染、免疫 第2版」 南山堂 (2012年)

■ 留 意 事 項

--

授業科目	医療安全学	担当者	藤岡重和・森田婦美子		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

頻発する医療事故を概観し、医療職を取りまく社会的環境と医療現場の現状を理解する。次に、事故発生のメカニズムと事故分析、事故対策について学習する。また、事故事例の分析を通して医療機関における安全対策のありかたについて考える。

■ 目 標

1. 医療事故の実際を知り、安全対策の必要性について理解する
2. 事故の発生要因について説明できる
3. 医療機関における安全対策を説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 医療事故の疫学、医療事故事例の紹介
- 第2回 医療事故の定義、分類、医療事故の報告制度
- 第3回 事故発生のメカニズム
- 第4回 事故分析、事故対策
- 第5回 医療機関における安全対策（1）
- 第6回 医療機関における安全対策（2）
- 第7回 医療事故後の対応、医療事故に関する法的責任
- 第8回 リハビリテーション業務における安全対策
- 第9回 事例検討：事故分析、事故対策（講義）
- 第10回 事例検討：医療機関における安全対策（講義）
- 第11回 事例検討：リハビリテーション業務における安全対策（講義）
- 第12回 事例検討：事故分析、事故対策（1）（発表）
- 第13回 事例検討：事故分析、事故対策（2）（発表）
- 第14回 事例検討：医療機関における安全対策（発表）
- 第15回 総復習

■ 評 価 方 法

定期試験 60%、提出課題 20%、出席、態度 20%

■ 教 科 書

「医療安全（NURSING GRAPHICUS EX 1）」MC メディカ出版（2009年）

■ 参 考 書

「リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドライン」
日本リハビリテーション医学会診療ガイドライン委員会編 医歯薬出版

■ 留 意 事 項

--

授業科目	基礎解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

人体および人体を構成している細胞・組織・器官の形態・構造の基本を系統的に学ぶ。

■ 目 標

人体の構造を理解するための基礎的知識を身につける。

■ 授 業 計 画

第1回 解剖学総論

1. 細胞・組織・器官・系
2. 肉眼解剖と組織学
3. 系統解剖と局所解剖学
4. 発生学
5. 体表解剖学
6. 人体の正常・異常・個体差
7. 解剖学的姿勢
8. 基本的な解剖学用語

第2回 骨学総論

1. 骨の肉眼的構造
2. 髄腔と骨髓
3. 体腔

第3回 関節靭帯学総論

1. 線維性連結
2. 軟骨性連結
3. 滑膜性連結
4. 関節の一般構造（関節包、滑膜、滑液）

5. 関節の特殊構造（関節円板、関節半月、関節靭帯、関節唇）

第4回 筋学総論

1. 筋の分類（平滑筋と横紋筋）
2. 随意筋と不随意筋
3. 骨格筋の基本形態
4. 腱と腱膜
5. 筋の付着（起始と停止）
6. 筋の作用（屈曲・伸展、内転・外転、内旋・外旋）
7. 主動筋、拮抗筋、協力筋
8. 骨格筋の補助装置（筋膜、支帯、筋間中隔、筋滑車、滑液包、腱鞘）

第5回 神経学総論1

1. 中枢神経系と末梢神経系
2. 求心性神経と遠心性神経
3. 白質と灰白質

4. 神経細胞（神経細胞体、樹状突起、軸索、髄鞘）
5. 神経線維と神経

第6回 神経学総論2

1. 脊髄の白質と灰白質（前柱、後柱、前索、側索、後索）
2. 脊髄の区分（頸髄～尾髄）

3. 脊髄髄節と脊髄神経（髄節、前根と後根、前枝と後枝）

練習問題配布（第1～6回分）

第7回 中間試験

組織および胚葉

1. 組織（上皮組織、支持組織）
2. 胚葉（外胚葉、中胚葉、内胚葉）
3. 三層性胚盤と器官・組織形成

第8回 循環器系総論

1. 血管系の役割
2. 血管（動脈・毛細血管・静脈の構造）
3. 動脈・静脈と動脈血・静脈血

4. 吻合
5. 終動脈

第9回 心臓

1. 心筋細胞
2. 心臓の位置
3. 心臓を包む膜
4. 心臓の内腔（心房と心室）

5. 肺循環と体循環

第10回 心臓

1. 房室弁（腱索と乳頭筋、左房室弁・右房室弁）
2. 動脈弁（肺動脈弁・大動脈弁）

3. 心臓の血管（冠状動脈、冠状静脈洞）

第11回 動脈系

1. 大動脈
2. 大動脈弓（腕頭動脈、左総頸動脈、左鎖骨下動脈）
2. 頭頸部に分布する動脈

3. 上肢帯と上肢に分布する動脈
4. 胸部内臓・腹部内臓に分布する動脈

第12回 静脈系

1. 右心房に注ぐ静脈
2. 頭頸部からの静脈
3. 上肢帯と上肢からの静脈

3. 奇静脈
4. 門脈

第13回 胎児循環

1. 胎盤
2. 臍静脈と臍動脈
3. 静脈管（アランチウス管）
4. 卵円孔
5. 動脈管（ボタロー管）

- リンパ系
1. リンパ管とリンパ節
2. 胸管
3. 右リンパ本幹
4. 脾臓

練習問題配布（第7～13回分）

第14回 総復習1 復習のための練習問題とその解説

第15回 総復習2 復習のための練習問題とその解説

■ 評価方法

中間試験 40% 本試験 60%

■ 教科書

書名：PT・OT・STのための解剖学 第1版

著者名：渡辺正仁 監修

出版社：廣川書店

書名：ネッターコンパクト解剖学アトラス 上巻・下巻

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

書名：消っして忘れない解剖学 要点整理ノート

著者名：井上 馨・松村譲児 編集

出版社：羊土社

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	解剖学基礎実習	担当者	柴田 雅朗		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

上肢の骨・関節・筋・体幹の骨・関節・筋について、骨実習や組織実習、体表解剖学などを通して学ぶ。

■ 目 標

運動器系の解剖学を理解する上での基礎的知識を身につける。

■ 授 業 計 画

第1回 全身骨格とその分類

1. 骨の標本を使って全身骨格を作る。 2. 全身骨格を軸骨格と付属性骨格に分ける。
3. 付属性骨格をさらに分類する。 4. 海綿骨と緻密骨を区別する。

第2回 脊柱と体表解剖学

1. 椎骨の基本構造。 2. 頸椎・胸椎・腰椎・仙骨・尾骨について観察する。
3. 自分自身の体で椎骨を触知する。

第3回 上肢帯骨と体表解剖学

1. 肩甲骨の各部を観察する。 2. 鎖骨の各部を観察する。 3. 肩甲骨と鎖骨を触知する。
4. 肩甲骨と鎖骨の動きを理解する。

第4回 胸郭と体表解剖学

1. 胸骨の各部 2. 胸骨角 3. 肋硬骨と肋軟骨 4. 真肋と仮肋 5. 肋骨の各部
6. 第一肋骨（前斜角筋結節と鎖骨下動脈溝） 7. 頸肋と腰肋 8. 胸骨と肋骨の触知

第5回 自由上肢と体表解剖学

1. 上腕骨の各部 2. 橈骨の各部 3. 尺骨の各部 4. 手の骨 5. 手根溝
6. 自由上肢骨の触知

第6回 脊柱と胸郭の連結

1. 椎骨間の連結 2. 椎間板 3. 環軸関節（正中環軸関節と外側環軸関節、環椎十字靭帯）
4. 胸郭の連結 5. 肩鎖関節 6. 胸鎖関節

第7回 上肢の関節と靭帯

1. 肩関節 2. 腕尺関節 3. 腕橈関節 4. 上橈尺関節 5. 下橈尺関節 6. 手関節
7. 手根中手関節 8. 中手指節関節 9. 指節間関節

復習のための練習問題配布

第8回 下肢帯骨と骨盤

1. 寛骨 2. 腸骨 3. 坐骨 4. 恥骨 5. 骨盤

第9回 自由下肢骨

1. 大腿骨 2. 脛骨 3. 腓骨 4. 膝蓋骨 5. 足の骨

第10回 股関節と仙腸関節

1. 股関節の構造と動き 2. 仙腸関節の構造と動き

第11回 膝関節、脛腓関節と足関節

1. 膝関節の構造と動き 2. 脛腓関節の構造と動き 3. 足関節の構造と動き

第12回 頭蓋骨その1

1. 頭蓋を構成する骨 2. 頭蓋骨の連結 3. 泉門

第13回 頭蓋骨その2

1. 眼窩 2. 鼻腔 3. 副鼻腔 4. 側頭下窩 5. 翼口蓋窩 6. 顎関節

練習問題配布

第14回 総復習1

復習のための練習問題とその解説

第15回 総復習2

復習のための練習問題とその解説

■ 評価方法

中間試験 40% 本試験 60%

■ 教科書

書名：PT・OT・STのための解剖学 第1版

著者名：渡辺正仁 監修

出版社：廣川書店

書名：ネッターコンパクト解剖学アトラス 上巻・下巻

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

書名：消っして忘れない解剖学 要点整理ノート

著者名：井上 馨・松村讓兒 編集

出版社：羊土社

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	運動器系の解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動器系のうち骨・関節靭帯については、解剖学基礎実習で既に学んだ。本科目では運動器系を構成しているもののうち、筋について詳細に学ぶ。

■ 目 標

身体の各部を構成している筋の名称、支配神経、主な作用を説明することが出来る。

■ 授 業 計 画

第1回 骨格筋の構造

1. 骨格筋線維の構造
2. 骨格筋の神経
3. 筋紡錘と腱器官

第2回 体幹の筋

1. 固有背筋

第3回 体幹の筋（続き）

1. 胸部の筋

第4回 体幹の筋（続き）

1. 腹部の筋
2. 骨盤の筋

第5回 上肢の筋（軸骨格から上肢帯への筋）

1. 僧帽筋
2. 肩甲挙筋
3. 菱形筋
4. 前鋸筋
5. 鎖骨下筋
6. 広背筋
7. 大胸筋
8. 小胸筋

第6回 上肢の筋（上肢帯から上腕骨への筋）

1. 肩甲下筋
2. 棘上筋
3. 棘下筋
4. 小円筋
5. 大円筋
6. 烏口腕筋
7. 三角筋

第7回 上肢の筋（上肢帯から上腕骨への筋）（続き）

1. 上腕前面の筋
2. 上腕後面の筋
3. 前腕前面の筋

第8回 上肢の筋（上肢帯から上腕骨への筋）（続き）

1. 前腕後面の筋

手の筋

1. 母指球筋
2. 小指球筋

第9回 下肢の筋

1. 寛骨筋
2. 大腿前面の筋
3. 大腿内側の筋
4. 大腿後面の筋

第10回 下肢の筋（続き）

1. 下腿前面の筋
2. 下腿外側の筋
3. 下腿後面の筋

第11回 下肢の筋（続き）

1. 足底の筋

頭部の筋

1. 表情筋
2. 咀嚼筋
3. 舌筋

第12回 頸部の筋

1. 広頸筋
2. 胸鎖乳突筋
3. 舌骨筋群

第13回 頸部の筋（続き）

1. 椎前筋群
2. 斜角筋群

練習問題配布

第14回 総復習1

復習のための練習問題とその解説

第15回 総復習2

復習のための練習問題とその解説

■ 評価方法

中間試験 40% 本試験 60%

■ 教科書

書名：PT・OT・STのための解剖学 第1版

著者名：渡辺正仁 監修

出版社：廣川書店

書名：ネッターコンパクト解剖学アトラス 上巻・下巻

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

書名：消っして忘れない解剖学 要点整理ノート

著者名：井上 馨・松村讓兒 編集

出版社：羊土社

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	神経系の解剖学	担当者	石倉 隆		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

神経系の解剖学は、中枢神経系リハビリテーションのみならず、動作や ADL の障害を神経メカニズムから考える上で非常に重要な科目である。そのため、単に神経系の肉眼的解剖に留まらず、リハビリテーションに活用できる神経機能解剖に重点を置いて講義する。具体的には、脊髄、延髄、橋、中脳、小脳、間脳、大脳皮質、大脳基底核の個別の解剖に加え、運動路、感覚路の機能解剖を通じて、運動、感覚、情動の神経メカニズムを講義する。

■ 目 標

脳の各部位の解剖を理解するとともに、人間に表出する運動や感覚、情動を脳機能解剖から説明できる。脳機能解剖を脳画像に投影して説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションにおける神経解剖学の必要性
- 第2回 神経組織学、神経系の発生、変性、再生
- 第3回 脳神経と自律神経系
- 第4回 脊髄と延髄
末梢神経とミオトーム、デルマトーム
- 第5回 橋と中脳
- 第6回 小脳と間脳
- 第7回 大脳基底核と大脳皮質
- 第8回 運動路と感覚路
- 第9回 髄膜と脳脊髄液、脳の血管
- 第10回 化学的神経解剖学、中枢神経系の肉眼的解剖学
- 第11回 神経機能解剖学の総合的理解：動作を通じた重要伝導路の理解
- 第12回 神経解剖学の脳画像への反映
- 第13回 脳画像から機能を読み解く：障害の画像的分析
- 第14回 まとめ1
- 第15回 まとめ2

■ 評価方法

単位認定試験受験資格者に対し、定期試験で100%評価する。

■ 教科書

書 名：神経解剖学講義ノート
 著者名：寺島 俊雄
 出版社：金芳堂

■ 参 考 書

書 名：脳の機能解剖と画像診断

著者名：真柳佳昭

出版社：医学書院

書 名：神経解剖集中講義 第2版

著者名：寺本 明・他 監訳

出版社：医学書院

書 名：CD-ROMでレッスン 脳画像の読み方

著者名：石原 健司

出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

症例や例示資料は、実際の患者さんに説明と同意を得て、講義で使用させていただくためだけに公開しています。みだりに他言しないよう、また、取り扱いには十分に注意してください。

授業科目	内臓系の解剖学	担当者	赤松 香奈子		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

医学の基礎である解剖学のうち内臓系について、単なる形態構造のみの学習にとどまらず、関連する器官と合わせてその構造と機能を学ぶ。

■ 目 標

医療専門職として必要な内臓系の構造と機能を、関連器官と合わせて理解する。
さらには適切な専門用語を用いて説明することができることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
- 呼吸器系 (1)
- 第2回 呼吸器系 (2)
- 第3回 呼吸器系 (3)
- 第4回 消化器系 (1)
- 第5回 消化器系 (2)
- 第6回 消化器系 (3)
- 第7回 泌尿器系 (1)
- 第8回 泌尿器系 (2)
- 第9回 生殖器系 (1)
- 第10回 生殖器系 (2)
- 第11回 内分泌系 (1)
- 第12回 内分泌系 (2)
- 第13回 感覚器 (1)
- 第14回 感覚器 (2)
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験100%とする

■ 教 科 書

- 書 名：理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のための解剖学 第一版
著者名：渡辺 正仁
出版社：廣川書店
-
- 書 名：ネッターのコンパクト解剖学アトラス 上巻・下巻
著者名：相磯貞和 訳
出版社：南江堂

■ 参 考 書

- 書 名：ネッター 解剖学アトラス
著者名：Frank H.Netter
出版社：南江堂

■ 留 意 事 項

--

授業科目	生理学	担当者	清田直恵・木村晃大		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

人体の各臓器がいかに正常の機能を維持し、1個体としての機能を発揮しているかを学習する。

■ 目 標

各臓器における構造と機能を理解するだけでなく、生理学を通じて生命現象を理論的に考察する力も養うことを目標とする。

■ 授 業 計 画

前期

第1回 オリエンテーション・細胞と内部環境（1）（清田）

第2回 細胞と内部環境（2）（清田）

第3回 筋（1）（清田）

第4回 筋（2）（清田）

第5回 神経系（1）（清田）

第6回 神経系（2）（清田）

第7回 神経系（3）（清田）

第8回 感覚（1）（清田）

第9回 感覚（2）（清田）

第10回 感覚（3）（清田）

第11回 運動（1）（清田）

第12回 運動（2）（清田）

第13回 骨（清田）

第14回 代謝と体温（清田）

第15回 前期総括

後期

第16回 血液（木村）

第17回 循環（1）（木村）

第18回 循環（2）（木村）

第19回 循環（3）（木村）

第20回 呼吸（1）（木村）

第21回 呼吸（2）（木村）

第22回 腎臓と排泄（1）（木村）

第23回 腎臓と排泄（2）（木村）

第24回 消化（1）（木村）

第25回 消化（2）（木村）

第26回 内分泌（1）（木村）

第27回 内分泌（2）（木村）

第28回 内分泌（3）（木村）

第29回 性と生殖（木村）

第30回 後期総括

■ 評 価 方 法

筆記試験（90%）、小テスト（10%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教科書

書名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学

著者名：石澤光郎 他

出版社：医学書院

■ 参考書

書名：標準生理学

著者名：本郷利憲 他

出版社：医学書院

書名：やさしい生理学（改訂第6版）

著者名：彼末一之、能勢博

出版社：南江堂

書名：カラー図解 よくわかる生理学の基礎

著者名：佐久間康夫（監訳）

出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

書名：カラー図解 人体の正常構造と機能 全10巻縮刷版

著者名：坂井建雄、河原克雅

出版社：日本医事新報社

書名：生理学（カラーイラストで学ぶ 集中講義）

著者名：岡田隆夫

出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

生理学は解剖学とならんで医療従事者にとって必須の科目であり、臨床医学を学ぶ上での土台となります。また国家試験でも、生理学について幅広く深い知識が問われます。そのことを意識して授業に臨んでください。また、授業時間のみでは理解は深まりませんで、自分に適した自己学習方法を見つけ、積極的に予習・復習を行う習慣を身につけましょう。

授業科目	生理学実習	担当者	清田 直恵		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

解剖学・生理学・運動学の講義を踏まえ、環境の変化や運動に対する生体の反応や恒常性維持について学習する。

■ 目 標

実際の人の生理機能を自らの手で計測し、その結果を解析・考察することにより、人体機能のダイナミクスやホメオスタシスが維持されるメカニズムを理解する。また、この実習を通して、医療従事者として必要な姿勢や洞察力を養う。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 実習内容・データ分析についての講義（1）
- 第3回 実習内容・データ分析についての講義（2）
- 第4回 第1クール実習（1）
- 第5回 第1クール実習（2）
- 第6回 第1クール実習（3）
- 第7回 第2クール実習（1）
- 第8回 第2クール実習（2）
- 第9回 第2クール実習（3）
- 第10回 第3クール実習（1）
- 第11回 第3クール実習（2）
- 第12回 第3クール実習（3）
- 第13回 実習のまとめ（1）
- 第14回 実習のまとめ（2）
- 第15回 実習のまとめ（3）

■ 評価方法

レポート（50%）、筆記試験（40%）、実習態度（10%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教科書

特に指定しない

■ 参考書

適宜紹介する

■ 留意事項

出席や実習中の態度も成績評価に含みます。レポート提出は期限厳守のこと。期限を過ぎての提出は認めません。レポート未提出者は再履修とします。被検者の安全や守秘義務が守られなければならない授業ですので、事前学習をしっかりと行い、真剣に取り組むこと。また、国家試験に直結する内容も含まれますので、予習・復習を各自で取り組むこと。

授業科目	運動生理学	担当者	清田 直恵		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体運動において、生体内の各種機構がどのように働いているかを講義する。

■ 目 標

運動生理学の基礎的な知識および考え方を身につけることを目標とする。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション	第9回 運動とエネルギー（1）
第2回 運動と筋骨格系（1）	第10回 運動とエネルギー（2）
第3回 運動と筋骨格系（2）	第11回 運動と健康
第4回 運動と神経系（1）	第12回 トレーニング
第5回 運動と神経系（2）	第13回 運動と発育・発達
第6回 運動と神経系（3）	第14回 運動と加齢
第7回 運動と呼吸・循環（1）	第15回 総括
第8回 運動と呼吸・循環（2）	

■ 評 価 方 法

筆記試験（90%）、小テスト（10%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

書名：運動生理学20講 第2版

著者名：勝田 茂

出版社：朝倉書店

書名：スポーツ・運動生理学概説

著者名：山地 啓司他

出版社：明和出版

書名：改訂 身体活動と体力トレーニング

著者名：藤原勝夫・外山寛

出版社：日本出版サービス

書名：身体機能の調節性

著者名：池上晴夫

出版社：朝倉書店

書名：姿勢制御の神経生理機構

著者名：藤原勝夫

出版社：杏林書院

書名：運動生理学の基礎と発展

著者名：春日 規克・竹倉 宏明

出版社：フリースペース

■ 留 意 事 項

授業科目	運動学総論	担当者	境 隆弘		
学科名	理学療法学専攻	学 年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法にとっての運動学（Kinesiology）は、「人間の運動の科学」であり、人間のからだの構造を学ぶ解剖学、人間のからだの機能を学ぶ生理学、そして、身体および身体各部を物体とみなした時の力学を基礎とした応用科学であることについて学ぶ。

■ 目 標

運動学用語を理解し、使用できるようになる。

運動力学を理解する。

上肢・下肢の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。

■ 授 業 計 画

第1回 コース・ガイダンス

講義の進め方、評定方法の他、理学療法士、作業療法士にとっての運動学の重要性を学ぶ

第2回 運動学（Kinesiology）総説

解剖学・生理学ならびに運動療法学との関連、Kinematics と Kinetics について学ぶ

第3回 身体運動①基本 運動学を学ぶにあたって必要な身体におけるの運動面と軸について学ぶ

第4回 身体運動②名称 運動学を学ぶにあたって必要な身体各部の運動方向の名称について学ぶ

第5回 身体運動③演習 ①②で学んだ身体運動について、演習を行い理解を深める

第6回 運動を構成する要素と器官① ヒトの運動を生む器官のうち、骨と関節について学ぶ

第7回 運動を構成する要素と器官② ヒトの運動を生む器官のうち、筋について学ぶ

第8回 運動を構成する要素と器官③ ①②で学んだ運動を構成する要素と器官について、演習を行い理解を深める

第9回 力学の基礎① 運動学を学ぶにあたって必要なニュートン力学について学ぶ

第10回 力学の基礎② 運動学を学ぶにあたって必要な身体とてこについて学ぶ

第11回 力学の基礎③ 運動学を学ぶにあたって必要なモーメント（トルク）について学ぶ

第12回 力学の基礎④ 運動学を学ぶにあたって必要な生体における力とモーメントについて学ぶ

第13回 構えと姿勢① ヒトの運動にかかわる構えと姿勢の名称について学ぶ

第14回 構えと姿勢② ①で学んだ構えと姿勢について、演習を行い理解を深める

第15回 上肢の関節運動学① 肩甲帯に関する運動器官と関節運動学について学ぶ

第16回 上肢の関節運動学演習① 肩甲帯の関節運動学について、演習を行い理解を深める

第17回 上肢の関節運動学② 肩関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ

第18回 上肢の関節運動学演習② 肩関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める

第19回 上肢の関節運動学③ 肘関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ

第20回 上肢の関節運動学演習③ 肘関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める

第21回 上肢の関節運動学④ 前腕に関する運動器官と関節運動学について学ぶ

第22回 上肢の関節運動学演習④ 前腕の関節運動学について、演習を行い理解を深める

第23回 上肢の関節運動学⑤ 手関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ

第24回 上肢の関節運動学演習⑤ 手関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める

第25回 上肢の関節運動学⑥ 手指に関する運動器官と関節運動学について学ぶ

第26回 上肢の関節運動学演習⑥ 手指の関節運動学について、演習を行い理解を深める

第27回 実技試験（口頭試問含む） 学んだ関節運動学について実技試験を実施する

第28回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック 実技試験の解説、講評を行う

第29回 総括① 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う

第30回 総括② 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 80%

小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 教科書

書名：基礎運動学

著者名：中村隆一、斎藤宏

出版社：医歯薬出版

■ 参考書

書名：筋骨格系のキネシオロジー

著者名：嶋田智明ほか監訳

出版社：医歯薬出版

書名：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）

著者名：奈良 勲監訳

出版社：医学書院

書名：図解 四肢と脊柱の診かた

著者名：野島元雄監訳

出版社：医歯薬出版

書名：カパンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）

著者名：萩島秀男監訳

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

理学療法の基礎学問として重要な科目であり、2年生に進んで、運動学各論、運動学実習、臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学総論	担当者	山田隆人・都甲佳奈		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法と作業療法にとっての運動学（Kinesiology）は、「人間の運動の科学」であり、人間のからだの構造を学ぶ解剖学、人間のからだの機能を学ぶ生理学、そして、身体および身体各部を物体とみなした時の力学を基礎とした応用科学であることについて学ぶ。

■ 目 標

運動学用語を理解し、使用できるようになる。

運動力学を理解する。

上肢・下肢の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定方法の他、理学療法士、作業療法士にとっての運動学の重要性を学ぶ
- 第2回 運動学（Kinesiology）総説
解剖学・生理学ならびに運動療法学との関連、Kinematics と Kinetics について学ぶ
- 第3回 身体運動①基本 運動学を学ぶにあたって必要な身体におけるの運動面と軸について学ぶ
- 第4回 身体運動②名称 運動学を学ぶにあたって必要な身体各部の運動方向の名称について学ぶ
- 第5回 身体運動③演習 ①②で学んだ身体運動について、演習を行い理解を深める
- 第6回 運動を構成する要素と器官① ヒトの運動を生む器官のうち、骨と関節について学ぶ
- 第7回 運動を構成する要素と器官② ヒトの運動を生む器官のうち、筋について学ぶ
- 第8回 運動を構成する要素と器官③ ①②で学んだ運動を構成する要素と器官について、演習を行い理解を深める
- 第9回 力学の基礎① 運動学を学ぶにあたって必要なニュートン力学について学ぶ
- 第10回 力学の基礎② 運動学を学ぶにあたって必要な身体とてこについて学ぶ
- 第11回 力学の基礎③ 運動学を学ぶにあたって必要なモーメント（トルク）について学ぶ
- 第12回 力学の基礎④ 運動学を学ぶにあたって必要な生体における力とモーメントについて学ぶ
- 第13回 構えと姿勢① ヒトの運動にかかわる構えと姿勢の名称について学ぶ
- 第14回 構えと姿勢② ①で学んだ構えと姿勢について、演習を行い理解を深める
- 第15回 上肢の関節運動学① 肩甲帯に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第16回 上肢の関節運動学演習① 肩甲帯の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第17回 上肢の関節運動学② 肩関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第18回 上肢の関節運動学演習② 肩関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第19回 上肢の関節運動学③ 肘関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第20回 上肢の関節運動学演習③ 肘関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第21回 上肢の関節運動学④ 前腕に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第22回 上肢の関節運動学演習④ 前腕の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第23回 上肢の関節運動学⑤ 手関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第24回 上肢の関節運動学演習⑤ 手関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第25回 上肢の関節運動学⑥ 手指に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第26回 上肢の関節運動学演習⑥ 手指の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第27回 実技試験（口頭試問含む）
学んだ関節運動学について実技試験を実施する
- 第28回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック
実技試験の解説、講評を行う
- 第29回 総括① 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う
- 第30回 総括② 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 70%

小テスト・実技テストで30%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 教科書

書名：基礎運動学

著者名：中村隆一、斎藤宏

出版社：医歯薬出版

■ 参考書

書名：筋骨格系のキネシオロジー

著者名：嶋田智明ほか監訳

出版社：医歯薬出版

書名：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）

著者名：奈良 勲監訳

出版社：医学書院

書名：図解 四肢と脊柱の診かた

著者名：野島元雄監訳

出版社：医歯薬出版

書名：カパンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）

著者名：萩島秀男監訳

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

作業療法の基礎学問として重要な科目であり、2年生に進んで、運動学各論、運動学実習と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学各論	担当者	境 隆弘		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

下肢、体幹・頭頸部の機能解剖に立脚した運動の分析を関節運動学と運動力学の視点から部位別に学ぶ。姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学的分析と筋出力、運動学習について学ぶ。

■ 目 標

下肢、体幹・頭頸部の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学を理解し、観察や分析が出来るようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定の他、前期に学んだ運動学総論、後期に学ぶ運動学実習との関連性を学ぶ
- 第2回 下肢の関節運動学① 股関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第3回 下肢の関節運動学演習① 股関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第4回 下肢の関節運動学② 膝関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第5回 下肢の関節運動学演習② 膝関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第6回 下肢の関節運動学③ 足関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第7回 下肢の関節運動学演習③ 足関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第8回 体幹の関節運動学 体幹に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第9回 体幹の関節運動学演習 体幹の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第10回 頭頸部・顔面の関節運動学 頭頸部・顔面に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第11回 頭頸部・顔面の関節運動学演習 頭頸部・顔面の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第12回 四肢と脊柱の運動連鎖 開放性運動連鎖（OKC）と閉鎖性運動連鎖（CKC）について学ぶ
- 第13回 四肢と脊柱の運動連鎖演習 OKCとCKCに関する演習を行い、理解を深める
- 第14回 筋トルク 様々な収縮形態により発揮される筋トルクについて学ぶ
- 第15回 筋トルク演習 実際に筋トルクを計測し、理解を深める
- 第16回 姿勢制御の神経機構 ヒトの姿勢反応について学ぶ
- 第17回 姿勢制御の神経機構演習 ヒトの姿勢反応について、演習を行い理解を深める
- 第18回 運動戦略 ヒトの運動戦略（ストラテジー）について学ぶ
- 第19回 運動戦略演習 ヒトの運動戦略（ストラテジー）について、演習を行い理解を深める
- 第20回 歩行の運動学① 歩行の運動学について、概論を学ぶ
- 第21回 歩行の運動学② 歩行の運動学的分析について学ぶ
- 第22回 歩行の運動学③ 歩行の運動力学的分析について学ぶ
- 第23回 運動学習 ヒトの運動学習機能について学ぶ
- 第24回 運動学習演習 ヒトの運動学習について、演習を行い理解を深める
- 第25回 実技試験（口頭試問含む）① 学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第26回 実技試験（口頭試問含む）② 学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第27回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック① 実技試験の解説、講評を行う
- 第28回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック② 実技試験の解説、講評を行う
- 第29回 総括① 本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う
- 第30回 総括② 本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 80%

小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 教科書

書名：基礎運動学

著者名：中村隆一、斎藤宏

出版社：医歯薬出版

■ 参考書

書名：筋骨格系のキネシオロジー

著者名：嶋田智明ほか監訳

出版社：医歯薬出版

書名：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）

著者名：奈良 勲監訳

出版社：医学書院

書名：図解 四肢と脊柱の診かた

著者名：野島元雄監訳

出版社：医歯薬出版

書名：カパンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）

著者名：萩島秀男監訳

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

理学療法の基礎学問として運動学総論から続く重要な科目であり、さらに運動学実習、臨床運動学と引き続き勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学各論	担当者	井口知也・大友健治		
学科名	作業療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

下肢・体幹・頭頸部の機能解剖に立脚した運動の分析を関節運動学と運動力学の視点から部位別に学ぶ。姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学的分析と筋出力、運動学習について学ぶ。

■ 目 標

下肢・体幹・頭頸部の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学を理解し、観察や分析が出来るようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定の他、前期に学んだ運動学総論、後期に学ぶ運動学実習との関連性を学ぶ
- 第2回 下肢の関節運動学① 股関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第3回 下肢の関節運動学演習① 股関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第4回 下肢の関節運動学② 膝関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第5回 下肢の関節運動学演習② 膝関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第6回 下肢の関節運動学③ 足関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第7回 下肢の関節運動学演習③ 足関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第8回 体幹の関節運動学 体幹に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第9回 体幹の関節運動学演習 体幹の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第10回 頭頸部・顔面の関節運動学 頭頸部・顔面に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第11回 頭頸部・顔面の関節運動学演習 頭頸部・顔面の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第12回 四肢と脊柱の運動連鎖 開放性運動連鎖（OKC）と閉鎖性運動連鎖（CKC）について学ぶ
- 第13回 四肢と脊柱の運動連鎖演習 OKCとCKCに関する演習を行い、理解を深める
- 第14回 筋トルク 様々な収縮形態により発揮される筋トルクについて学ぶ
- 第15回 筋トルク演習 実際に筋トルクを計測し、理解を深める
- 第16回 姿勢制御の神経機構 ヒトの姿勢反応について学ぶ
- 第17回 姿勢制御の神経機構演習 ヒトの姿勢反応について、演習を行い理解を深める
- 第18回 運動戦略 ヒトの運動戦略（ストラテジー）について学ぶ
- 第19回 運動戦略演習 ヒトの運動戦略（ストラテジー）について、演習を行い理解を深める
- 第20回 歩行の運動学① 歩行の運動学について、概論を学ぶ
- 第21回 歩行の運動学② 歩行の運動学的分析について学ぶ
- 第22回 歩行の運動学③ 歩行の運動力学的分析について学ぶ
- 第23回 運動学習 ヒトの運動学習機能について学ぶ
- 第24回 運動学習演習 ヒトの運動学習について、演習を行い理解を深める
- 第25回 実技試験（口頭試問含む）① 学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第26回 実技試験（口頭試問含む）② 学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第27回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック① 実技試験の解説、講評を行う
- 第28回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック② 実技試験の解説、講評を行う
- 第29回 総括① 本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う
- 第30回 総括② 本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 80%

小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

以下の素材と割合で総合的に評価する

なお、欠席、遅刻早退は減点対象（無断遅刻・無断欠席は-10点、事前連絡のある遅刻・欠席は-5点とする）

■ 教科書

書名：基礎運動学

著者名：中村隆一，斎藤宏

出版社：医歯薬出版

■ 参考書

書名：筋骨格系のキネシオロジー

著者名：嶋田智明ほか監訳

出版社：医歯薬出版

書名：触診解剖アトラス（体幹・上肢・下肢）

著者名：奈良 勲 監訳

出版社：医学書院

書名：図解 四肢と脊柱の診かた

著者名：野島元雄 監訳

出版社：医歯薬出版

書名：カバンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）

著者名：萩島秀男 監訳

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

作業療法の基礎学問として運動学総論から続く重要な科目であり，さらに運動学実習、臨床運動学と引き続き勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学実習	担当者	島 雅人		
学科名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動学総論、運動学各論により修得した基礎知識・技術を踏まえ、実際に行われている動作を観察し分析するといった実習を行うことで、理学療法・作業療法の基礎となる人体の運動のしくみについて理解を深める。

■ 目 標

基本動作・歩行を観察する視点を身につけること
 観察した動作を運動学的用語で説明することができるようになること
 観察した動作を運動学・運動力学的に分析することができるようになること

■ 授 業 計 画

- 第1回 ①コース・ガイダンス：講義の進め方、評定方法、その他
 ②これまでに学んできた運動学総論、運動学各論の知識の確認
 ③体位、構えの（姿勢）の表現、動作分析の手順と方法
- 第2回 寝返りの動作観察・分析①（観察・データ収集・分析作業）
- 第3回 寝返りの動作観察・分析②（観察データの整理・分析作業）
- 第4回 寝返りの動作観察・分析③（発表・まとめ）
- 第5回 起き上がりの動作観察・分析①（観察・データ収集・分析作業）
- 第6回 起き上がりの動作観察・分析②（観察データの整理・分析作業）
- 第7回 起き上がりの動作観察・分析③（発表・まとめ）
- 第8回 立ちあがりの動作観察・分析①（観察・データ収集・分析作業）
- 第9回 立ちあがりの動作観察・分析②（観察データの整理・分析作業）
- 第10回 立ちあがりの動作観察・分析③（観察データの整理・分析作業）
- 第11回 立ちあがりの動作観察・分析④（発表・まとめ）
- 第12回 歩行の動作観察・分析①（観察・データ収集・分析作業）
- 第13回 歩行の動作観察・分析②（観察・データ収集・分析作業）
- 第14回 歩行の動作観察・分析③（観察・データ収集・分析作業）
- 第15回 歩行の動作観察・分析④（発表・まとめ・総括）

■ 評 価 方 法

定期試験70% 発表・レポート30%

■ 教 科 書

書 名：基礎運動学
 著者名：中村隆一、斎藤宏
 出版社：医歯薬出版

書 名：ペリー歩行分析 正常歩行と異常歩行 第2版
 著者名：Jacquelin Perry 著 / 武田 功ほか監修
 出版社：医歯薬出版

■ 参 考 書

書 名：カラー版 筋骨格系のキネシオロジー原著第2版

著者名：Donald A. Neumann 著 / 嶋田智明ほか 監訳

出版社：医歯薬出版

書 名：日常生活活動の運動学

著者名：D. P. Greene, S. L. Roberts 著 / 嶋田智明 監訳

出版社：医歯薬出版

書 名：観察による歩行分析

著者名：ゲッツ・ノイマン, キルステン

出版社：医学書院

書 名：オーチスのキネシオロジー 身体運動の力学と病態力学 原著第2版

著者名：監訳 山崎 敦 他

出版社：ラウンドフラット

■ 留 意 事 項

運動学総論・各論の知識をもとに、動作を観察・分析することは、将来的に臨床で対象者の動作を観察・分析することにつながります。観察した動作を自分自身で分析する（調べる・考える・まとめる）ことがとても重要になります。

授業科目	人間発達学	担当者	藪中 良彦		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法士・作業療法士として必要な子どもの発達の知識を、運動発達を中心に学習する。

■ 目 標

子どもの機能獲得の仕組みを知ることで、子どもの治療だけでなく、成人の治療にも発達の知識を利用できるようになることが、この科目の目標である。

■ 授 業 計 画

第1回 人間発達とは？発達理論	第9回 目の機能の発達
第2回 姿勢反射	第10回 知覚認知の発達
第3回 運動発達の概観	第11回 言語・コミュニケーション・心理・社会的発達
第4回 新生児から3ヶ月までの運動発達	第12回 幼児期・学童期の発達
第5回 4ヶ月から6ヶ月までの運動発達	第13回 青年期・成人期・高齢期の発達
第6回 7ヶ月から9ヶ月までの運動発達	第14回 発達検査・日常生活動作の検査
第7回 9ヶ月から12ヶ月までの運動発達	第15回 運動発達の理論と評価方法
第8回 手の機能の発達	

■ 評 価 方 法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
レポート（20点）
小テスト（30点）
定期試験（50点）

■ 教 科 書

書 名：コメディカルのための専門基礎分野テキスト 人間発達学
著者名：福田恵美子
出版社：中外医学社
.....
書 名：機能的姿勢-運動スキルの発達
著者名：高橋智宏
出版社：協同医書出版社

■ 参 考 書

書 名：乳児の発達 写真でみる0歳児
著者名：高橋孝文
出版社：医歯薬出版株式会社
.....
書 名：写真でみる乳児の運動発達
著者名：木本孝子、中村勇
出版社：協同医書出版社
.....
書 名：乳幼児の運動発達検査 AIMS アルバータ乳幼児運動発達検査法
著者名：上杉雅之、嶋田智明、武政誠一
出版社：医歯薬出版株式会社
.....
書 名：PEDI リハビリテーションのための子どもの能力低下評価法
著者名：里宇明元、近藤和泉、問川博之
出版社：医歯薬出版株式会社
.....
書 名：赤ちゃんの運動発達 絵でみる治療アプローチ
著者名：芝田利生、櫻庭修
出版社：協同医書出版社

書名：遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法—九州大学小児科改訂新装版
著者名：遠城寺宗徳
出版社：慶應義塾大学出版会

書名：新版 K 式発達検査法2001年版—標準化資料と実施法
著者名：新版 K 式発達検査研究会
出版社：ナカニシヤ出版

書名：KIDS 乳幼児発達スケール
著者名：三宅和夫
出版社：達科学研究教育センター

書名：1987年全訂版田中ビネー知能検査法
著者名：田中教育研究所
出版社：田研出版

書名：WISC-IV の臨床的利用と解釈
著者名：上野 一彦
出版社：日本文化科学社

書名：日本版デンバー式発達スクリーニング検査—JDDST と JPDQ
著者名：上田 礼子
出版社：医歯薬出版株式会社

書名：K・ABC アセスメントと指導—解釈の進め方と指導の実際
著者名：前川 久男
出版社：丸善メイツ

書名：グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック
著者名：小林重雄
出版社：三京房

書名：日本版フロスティック視知覚発達検査
著者名：飯鉢和子、鈴木陽子、茂木茂八
出版社：日本文化科学社

書名：日本版ミラー乳児発達スクリーニング検査と JMAP 簡易版
著者名：土田玲子、岩永竜一郎
出版社：パシフィックサプライ株式会社

書名：乳幼児精神発達診断法—0才～3才まで
著者名：津守 真、稲毛 教子
出版社：大日本図書

書名：乳幼児精神発達質問紙 (1～3才まで)
著者名：津守真, 稲毛教子
出版社：大日本図書

書名：乳幼児精神発達診断法—3才～7才まで
著者名：津守 真, 磯部 景子
出版社：大日本図書

書名：乳幼児精神発達質問紙 3～7才まで
著者名：津守 真, 稲毛 教子
出版社：大日本図書

書名：視覚機能の発達障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社

書名：手の発達機能障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学	担当者	春海 淳子		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学は「こころの病」や「こころのメカニズム」について学ぶものです。私たちのこころは流動的で環境からの影響を受けながら形成され、揺らぎもします。そうした、こころのありようについて、身近な素材や具体的な話をを用いて臨床心理学に関する理論や概念の基礎的素養を身につける機会にします。

■ 目 標

学んだことを今後の専門職としての活動の中や普段の生活に行かせるよう習得することを目指します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 臨床心理学とは
- 第2回 臨床心理査定（1）：意義と方法（観察、面接、検査）
- 第3回 臨床心理査定（2）：発達検査・知能検査（体験、事例）
- 第4回 臨床心理査定（3）：人格検査（概要）
- 第5回 臨床心理査定（4）：人格検査（体験、事例）
- 第6回 精神病理（1）：統合失調症、気分障害
- 第7回 精神病理（2）：不安障害、身体表現性障害、人格障害
- 第8回 こころの構造（1）：人格構造論の観点から
- 第9回 こころの構造（2）：発達論的観点から
- 第10回 臨床心理面接（1）：目的、基本的技法（体験）
- 第11回 臨床心理面接（2）：来談者中心療法
- 第12回 臨床心理面接（3）：精神分析
- 第13回 心理臨床面接（4）：学習理論と行動療法
- 第14回 集団と他者の影響
- 第15回 総合的ふりかえり

■ 評 価 方 法

講義への参加・貢献（レポート等）：30% 筆記試験：70%

■ 教 科 書

特に指定しません

■ 参 考 書

適宜紹介します

■ 留 意 事 項

--

授業科目	病理学概論	担当者	魏 民		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

ヒトが疾病に罹患する原因とその機序を総論的に学ぶ

■ 目 標

病態別（細胞の損傷と適応、循環障害、免疫、炎症・感染症、腫瘍、先天異常）に整理された知識を得る

■ 授 業 計 画

第1回 病理学の目的と概要

病因論：内因、外因の概念、疾病の分類

第2回 傷害に対する細胞の反応：退行性病変、進行性病変

第3回 循環障害：循環系の構造と機能、局所循環障害、全身循環障害

第4回 免疫：免疫系の仕組みと働き、アレルギー、膠原病、免疫不全症候群

第5回 炎症・感染症：炎症の定義と原因、炎症の経過、感染の成立と感染経路

第6回 腫瘍Ⅰ：腫瘍の定義と分類、腫瘍の進展形式

第7回 腫瘍Ⅱ：腫瘍発生の原因、腫瘍の診断と治療

第8回 先天異常・奇形：先天異常の概念と分類、代表的な先天異常

■ 評 価 方 法

筆記試験 80% 提出課題 20%

■ 教 科 書

書名：標準理学療法学・作業療法学 病理学

著者名：梶原博毅・横井豊治

出版社：医学書院

■ 参 考 書

書名：ルービン病理学 第4版

著者名：鈴木利光 他監訳

出版社：西村書店

■ 留 意 事 項

授業科目	一般臨床医学	担当者	弓場 他		
学科名	理学療法学科	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学科	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

一般外科、消化器外科、眼科、泌尿器科、婦人科、産科学、耳鼻咽喉科、皮膚科の代表的疾患について、その病因、病態、特徴的に現れる症状、一般的に行われる検査、治療法について基礎的な学習をする。

■ 目 標

1. 一般外科、消化器外科、眼科、泌尿器科、婦人科、産科学、耳鼻咽喉科、皮膚科の代表的な疾患について、その病因、病態、臨床像、治療法を理解する。
2. 各疾患におけるリハビリテーションの留意事項を説明できる。

■ 授 業 計 画

第1回	外科学総論、一般外科	(弓場)
第2回	上部消化管外科 (食道、胃、十二指腸)	(弓場)
第3回	下部消化管外科 (結腸、直腸、肛門、小腸)	(弓場)
第4回	肝胆膵の外科 (肝臓、胆嚢、膵臓)	(弓場)
第5回	泌尿器疾患 ①	(藤本)
第6回	泌尿器疾患 ②	(藤本)
第7回	皮膚科疾患 ①	(池上)
第8回	皮膚科疾患 ②	(池上)
第9回	産科学	(福山)
第10回	婦人科疾患	(福山)
第11回	耳鼻咽喉科領域の疾患 ①	(矢吹)
第12回	耳鼻咽喉科領域の疾患 ②	(矢吹)
第13回	眼科疾患 ① (眼球および眼付属器の解剖について)	(岡村)
第14回	眼科疾患 ② (眼球の解剖を復習・代表的疾患について疾患の原因・治療等)	(岡村)
第15回	総復習	

■ 評 価 方 法

定期試験 100%

■ 教 科 書

書 名：PT・OTのための一般臨床医学
 著者名：明石 謙
 出版社：医歯薬出版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	内科学	担当者	藤岡 重和		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

循環器疾患、呼吸器疾患など生体内部の障害について、その病因、病態、特徴的に現れる症状、一般的に行われる検査と診断、治療法、予後などについて基礎的な学習をする。

■ 目 標

1. 代表的な内科疾患について、その病因、病態、臨床像、診断と治療法を理解する
2. 内科疾患患者におけるリハビリテーションの留意事項を説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 内科学総論
- 第2回 循環器総論 (概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
- 第3回 循環器疾患 (1) 高血圧、虚血性心疾患
- 第4回 循環器疾患 (2) 弁膜症、先天性心疾患、心筋疾患
- 第5回 循環器疾患 (3) 心不全、不整脈、その他
- 第6回 循環器疾患 (4) 大動脈疾患、末梢動脈および静脈疾患
- 第7回 呼吸器総論 (概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
- 第8回 呼吸器疾患 (1) 感染性肺疾患、アレルギー性肺疾患
- 第9回 呼吸器疾患 (2) 慢性閉塞性肺疾患、間質性肺疾患
- 第10回 呼吸器疾患 (3) 肺腫瘍、肺循環障害
- 第11回 呼吸器疾患 (4) 呼吸不全、呼吸調節の異常、胸膜疾患、その他
- 第12回 消化器総論 (概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
- 第13回 消化器疾患 (1) 食道疾患、胃の疾患
- 第14回 消化器疾患 (2) 小腸、大腸の疾患
- 第15回 消化器疾患 (3) 肝疾患
- 第16回 消化器疾患 (4) 胆道疾患、膵疾患、その他
- 第17回 代謝、内分泌総論 (概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
- 第18回 代謝、内分泌疾患 (1) 糖尿病、脂質代謝異常、その他
- 第19回 代謝、内分泌疾患 (2) 下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患
- 第20回 腎総論 (概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
- 第21回 腎疾患 (1) 糸球体疾患、全身性疾患と腎障害
- 第22回 腎疾患 (2) 腎不全、電解質異常、その他
- 第23回 免疫、アレルギー総論 (概要、病因、病態生理、症状、検査と診断)
- 第24回 免疫、アレルギー疾患 (1) アレルギー疾患
- 第25回 免疫、アレルギー疾患 (2) 膠原病、免疫不全症
- 第26回 血液、造血器疾患 (1) 赤血球系疾患
- 第27回 血液、造血器疾患 (2) 白血球系疾患、出血性疾患
- 第28回 中毒および環境要因による疾患
- 第29回 リハビリテーションと内科臨床について
- 第30回 総復習

■ 評価方法

定期試験 80% 小テスト 10% 出席、態度 10%

■ 教科書

「ナースの内科学 第8版」, 中外医学社 (2010年)

■ 参考書

「標準理学療法学作業療法学 専門基礎分野 内科学 第2版」, 医学書院 (2004年)

「臨床病態学 1巻、2巻」, NOUVELLE HIROKAWA (2006年)

「看護のための臨床病態学」, 南山堂 (2012年)

■ 留意事項

内科学を学習するにあたって、解剖学、生理学、病理学をよく理解しておく必要があります。授業の前に、復習をしておいてください。感染症については、三年生前期の感染症学において詳しく学習します。

授業科目	整形外科学	担当者	中村 憲正		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

人体の運動器にかかわる疾患の診断と治療について学習する。

■ 目 標

運動器疾患の基礎となる骨・関節、筋・神経の構造や病態について十分な知識を得る。特に、外傷学については、重点的に学習し、臨床の場で必要とされる知識体系を構築する。また、整形外科的な診断法や治療法について臨床に必要な知識を得る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 整形外科総論 1 歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靭帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
- 第2回 整形外科総論 2 歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靭帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
- 第3回 骨折と脱臼 1
骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
- 第4回 骨折と脱臼 2
骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
- 第5回 骨と関節の感染症 骨と関節の感染症につき学ぶ。
- 第6回 関節リウマチ
関節リウマチとその類縁疾患につき学ぶ。
- 第7回 慢性関節疾患 — 退行変性による慢性関節疾患につき学ぶ。
- 第8回 壊死性骨疾患 — 骨壊死の特徴につき学ぶ。
- 第9回 骨系統疾患 — 骨系統疾患につき学ぶ。
- 第10回 代謝性骨疾患 — 代謝性骨疾患につき学ぶ。
- 第11回 腫瘍 1 — 筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
- 第12回 腫瘍 2 — 筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
- 第13回 予備日
- 第14回 予備日
- 第15回 脊椎と脊髄 1 — 脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
- 第16回 脊椎と脊髄 2 — 脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
- 第17回 股関節 — 股関節疾患、外傷につき学ぶ。
- 第18回 膝関節 — 膝関節疾患につき述べ、固有の治療法につき学ぶ。
- 第19回 膝のスポーツ傷害 1 — 膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
- 第20回 膝のスポーツ傷害 2 — 膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
- 第21回 足と足関節 1 — 足と足関節の傷害につき学ぶ。
- 第22回 足と足関節 2 — 足と足関節の傷害につき学ぶ。
- 第23回 下腿 — 下腿の傷害につき学ぶ。
- 第24回 肩 — 肩関節スポーツ傷害を中心に学び、最新治療に触れる。
- 第25回 肘 — 肘関節疾患、傷害につき学ぶ。
- 第26回 手 1 — 手の外科につき学ぶ。
- 第27回 手 2 — 手の外科につき学ぶ。
- 第28回 予備日
- 第29回 予備日
- 第30回 予備日

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 教科書

書名：標準整形外科

出版社：医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	臨床神経学	担当者	阿部 和夫		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床神経学は、前半では、神経疾患について、後半では主に高次脳機能障害についての講義を行います。臨床神経学を理解することは、理学療法士・作業療法士を目指す学生にとって不可欠であるにも関わらず、大脳から筋肉あるいは感覚器に至る広汎な解剖学的領域に關与する多彩な疾患を学習することに対して負担を感じる学生が多いかもしれません。本講義では、神経・筋疾患で見られる主要な疾患とそれにとまなう障害の特性について、その疾患概念、病態、発症機構、神経科学的検査についての基礎知識および治療について学習します。

■ 目 標

リハビリテーション医学およびリハビリテーション医療に携わる職種として必要不可欠な神経学の知識を取得することを目標にします。一方通行の授業ではなく、学生が積極的にかつ真摯に学習に取り組むことを期待します。

■ 授業計画

- 第1回 神経内科学総論
- 第2回 機能的疾患（頭痛など）
- 第3回 脳血管障害
- 第4回 脳腫瘍
- 第5回 運動ニューロン病
- 第6回 脊髄小脳変性症
- 第7回 パーキンソン病
- 第8回 パーキンソン病以外の錐体外路疾患
- 第9回 脱髄疾患
- 第10回 感染症
- 第11回 脊髄疾患
- 第12回 末梢神経障害（ニューロパチーなど）
- 第13回 筋疾患
- 第14回 神経筋接合部での疾患
- 第15回 てんかん（失神との鑑別）
- 第16回 高次脳機能障害総論
- 第17回 脳血管の解剖と画像（1）
- 第18回 脳血管の解剖と画像（2）
- 第19回 高次脳機能障害に關した電気生理学
- 第20回 高次脳機能障害の診察法
- 第21回 失語症と其の關連疾患
- 第22回 視覚の高次脳機能障害
- 第23回 聴覚の高次脳機能障害
- 第24回 感覚の高次脳機能障害
- 第25回 運動の高次脳機能障害
- 第26回 失音楽
- 第27回 記憶障害
- 第28回 失行
- 第29回 身体認識の障害
- 第30回 認知症

■ 評価方法

試験100%

■ 教科書

なし

■ 参考書

書名：神経の病気

著者名：図説カラダ大辞典編集委員会 編

出版社：金沢医科大学出版局

.....
書名：神経心理学入門

著者名：山鳥重

出版社：医学書院

■ 留意事項

私語など、他の受講者および講義をしている私の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。医療業界で働くための最低限の常識を身につけて講義に望んでください。

授業科目	臨床運動学	担当者	島 雅人		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動学総論、運動学各論、運動学実習で修得した知識を踏まえ、疾病や外傷により生じる心身機能・身体構造の変化や活動の変化について学ぶ。実際の運動を教材等で観察し、模倣しながら、障害のある対象者の運動特性を学ぶ。

■ 目 標

疾病や外傷により生じる心身機能・身体構造の変化、運動・活動を理解できる。
障がい者の姿勢や動作を観察し、その特徴や要因を検討することができる。
機能障害と能力障害の関連を理解できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス：講義の進め方、評定の他、これまでに学んだ基礎運動学との関連性を学ぶ
関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
- 第2回 関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
- 第3回 関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
- 第4回 関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
- 第5回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
- 第6回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
- 第7回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
- 第8回 骨・関節疾患（変形性関節症・RA など）による運動の変化を学ぶ
- 第9回 骨・関節疾患（変形性関節症・RA など）による運動の変化を学ぶ
- 第10回 中枢性の運動麻痺（特に脳卒中片麻痺）による運動の変化を学ぶ
- 第11回 中枢性の運動麻痺（特に脳卒中片麻痺）による運動の変化を学ぶ
- 第12回 中枢性の運動麻痺（特に脳卒中片麻痺）による運動の変化を学ぶ
- 第13回 神経変性疾患（特にパーキンソン病）による運動の変化を学ぶ
- 第14回 神経変性疾患（特にパーキンソン病）による運動の変化を学ぶ
- 第15回 総括
本講義で学んだことについて復習、再確認を行う

■ 評 価 方 法

定期試験：80% 小テスト20%

■ 教 科 書

書 名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

書 名：ペリー歩行分析 正常歩行と異常歩行 第2版
著者名：Jacquelin Perry 著 / 武田 功ほか監修
出版社：医歯薬出版

■ 参 考 書

書 名：理学療法士のための6ステップ式臨床動作分析マニュアル 第2版

著者名：黒川幸雄 他

出版社：文光堂

書 名：標準理学療法学 専門分野 臨床動作分析

著者名：奈良 勲 監修／高橋正明 編集

出版社：医学書院

書 名：オーチスのキネシオロジー 身体運動の力学と病態力学 原著第2版

著者名：監訳 山崎 敦 他

出版社：ラウンドフラット

書 名：動画で学ぶ脳卒中のリハビリテーション

著者名：編集：園田 茂

出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

本講義では、基礎運動学の知識をもとに病態運動を学ぶ。本講義の知識は、理学療法の対象者の動作を分析し問題点を推測したり、機能障害と能力障害の考察を行う上で重要な科目となるため、出席はもちろんのこと、自分自身の頭と体を活用し、異常動作の模倣等が行えるように取り組んで欲しい。

授業科目	精神医学	担当者	小畔 美弥子		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

主な精神疾患について症状・診断・治療を学ぶ

■ 目 標

精神医学に興味を持ち，基本知識を身につける

■ 授 業 計 画

- 第1回 精神医学とは 精神疾患の診断・分類
- 第2回 精神症状とその評価
- 第3回 統合失調症
- 第4回 アルコール・薬物関連障害
- 第5回 認知症
- 第6回 気分障害
- 第7回 神経症性障害①
- 第8回 神経性障害②
- 第9回 発達障害・児童精神医学
- 第10回 パーソナリティー障害
- 第11回 摂食障害
- 第12回 睡眠障害
- 第13回 治療①
- 第14回 治療②
- 第15回 精神医療の関連法規・福祉

■ 評 価 方 法

筆記試験80%，出席・受講態度20%

■ 教 科 書

書名：text 精神医学
 著者名：加藤進昌 神庭重信
 出版社：南山堂

■ 参 考 書

書名：パーソナリティー障害の診断と治療
 著者名：ナンシーマックウィリアムズ
 出版社：創元社

■ 留 意 事 項

授業科目	精神科リハビリテーション学	担当者	足立 一		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

精神科リハビリテーションに関する教材を用いた講義及び演習を行う

■ 目 標

精神科リハビリテーションの基本概念, 回復と評価・支援の実際, 関連する地域社会資源, 制度についての知識を深める

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
精神科リハビリテーションの定義
- 第2回 精神保健医療福祉の現状と歴史
- 第3回 精神疾患・障害の成因と分類
- 第4回 精神機能とその障害① (意識・知能・性格)
- 第5回 精神機能とその障害② (記憶・欲動・自我)
- 第6回 精神機能とその障害③ (知覚・思考)
- 第7回 精神科治療と各種リハビリテーション① (薬物療法)
- 第8回 精神科治療と各種リハビリテーション② (リハビリテーション評価)
- 第9回 精神科治療と各種リハビリテーション③ (リハビリテーション)
- 第10回 疾患別リハビリテーション① (統合失調症)
- 第11回 疾患別リハビリテーション② (気分障害)
- 第12回 疾患別リハビリテーション③ (神経症性障害)
- 第13回 疾患別リハビリテーション④ (てんかん)
- 第14回 疾患別リハビリテーション⑤ (精神作用物質による行動の障害)
- 第15回 疾患別リハビリテーション⑥ (その他)
まとめ

■ 評価方法

定期試験：60%
小テスト：30%、計3回
レポート：10%、計1回

■ 教科書

書名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学
著者名：奈良勲 鎌倉矩子 監修
出版社：医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	小児科学	担当者	吉原 直子		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

小児科学に必要な基本知識の確認と、小児の特徴、発達および小児特有の病気を学習する。

■ 目 標

セラピストとして必要な小児科学の知識の習得をすること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 小児の発育と発達
- 第2回 小児の生活と小児保健
- 第3回 出生前小児科学と先天異常
- 第4回 新生児
- 第5回 小児内科学
- 第6回 小児感染症
- 第7回 免疫・アレルギー・血液疾患
- 第8回 代謝・内分泌疾患
- 第9回 神経・筋疾患①
- 第10回 神経・筋疾患②
- 第11回 発達障害・心身症
- 第12回 小児診断学
- 第13回 まとめ①
- 第14回 まとめ②
- 第15回 まとめ③

■ 評 価 方 法

筆記試験（小テスト・レポートを含む）80% 出席・態度20%

■ 教 科 書

書 名：シンプル理学療法シリーズ「小児理学療法テキスト」

出版社：南江堂

書 名：視覚でとらえるフォトサイエンス生物図録

出版社：数研出版

■ 参 考 書

書 名：240動画でわかる赤ちゃんの発達地図

著者名：木原秀樹

出版社：株式会社メディカ出版

■ 留 意 事 項

--

授業科目	老年医学	担当者	藤岡重和・森田婦美子・大中玄彦		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

老年期にみられる障害の特性を理解するために老化のメカニズムや生理学的特性、老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化、高齢者を取りまく地域の問題など幅広く学習する。また、老化に伴い特徴的に現れる疾患・障害とその病態についても学習する。

■ 目 標

1. 老化に伴う生理機能変化、老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化を理解する
2. 老化に伴い特徴的に現れる疾患・障害とその病態について説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 老年医学総論（1） 老化と老年病の考え方（藤岡）
 第2回 老年医学総論（2） 加齢に伴う生理機能変化（藤岡）
 第3回 老年医学総論（3） 高齢者に多い症候とそのアセスメントについて（森田）
 第4回 老年医学総論（4） 老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化と高齢者へのアプローチ（森田）
 第5回 老年医学各論（1） 心、血管機能の老化と循環器疾患（大中）
 第6回 老年医学各論（2） 呼吸機能の老化と呼吸器疾患（大中）
 第7回 老年医学各論（3） 腎、排泄機能の老化と疾患（大中）
 第8回 老年医学各論（4） 内分泌、代謝機能の老化と疾患（大中）
 第9回 老年医学各論（5） 消化機能の老化と消化器疾患（大中）
 第10回 老年医学各論（6） 神経機能の老化と疾患、骨、運動機能の老化と疾患（藤岡）
 第11回 老年医学各論（7） 加齢による免疫機能の変化、高齢者の感染症（藤岡）
 第12回 老年医学各論（8） 増血機能の老化と疾患、感覚機能の老化（藤岡）
 第13回 高齢者を取りまく地域の諸問題について（森田）
 第14回 高齢者の医療、介護、福祉、保健（森田）
 第15回 総復習（藤岡）

■ 評価方法

定期試験 80% 小テスト 10% 出席、態度 10%

■ 教 科 書

「標準理学療法学作業療法学 専門基礎分野 老年学 第3版」 医学書院（2009年）

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	高次脳機能障害学	担当者	森岡 悦子		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、中枢神経系の解剖機能を理解し、高次脳機能障害の症状についての基本的知識を習得する。また簡単な評価結果から、障害のメカニズムを理解する。

■ 目 標

高次脳機能障害の基礎的知識を習得し、簡単な評価結果から障害メカニズムに基づいて障害を理解できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 高次脳機能障害の概要
 脳がどのように情報を処理しているのかを学び、高次脳機能の概要を理解する。
- 第2回 脳と高次脳機能
 高次脳機能に関わる脳の各領域の名称および脳の構造を理解する。
- 第3回 記憶障害（1） 記憶の種類、記憶のシステムを学ぶ。
- 第4回 記憶障害（2） 記憶障害について病巣部位による特徴の違いを理解する。
- 第5回 記憶障害（3） 記憶障害を理解した上で、簡単な検査法を学び実施できるようになる。
- 第6回 失行とその他の行為障害（1） 失行が生じるメカニズムと症状をよく理解し、簡単な検査法を学ぶ。
- 第7回 失行とその他の行為障害（2） 失行以外の行為障害について、症状と病巣部位との関連を把握する。
- 第8回 失認と関連症状（1） 視覚失認について症状およびメカニズムを理解する。
- 第9回 失認と関連症状（2） 聴覚失認と触覚失認について、症状およびメカニズムを理解する。
- 第10回 半側空間無視（1）
 半側空間無視が生じるメカニズムと症状を理解し、生活に与える影響について学ぶ。
- 第11回 半側空間無視（2）
 半側空間無視の検査方法を学ぶ。
- 第12回 失語症 失語症の基本的概念を学び、後期講義のコミュニケーション・リハビリテーション学に必要な知識を理解する。
- 第13回 遂行機能障害
 症状と障害メカニズムについて基本的知識を理解し、簡単な評価方法を学ぶ。
- 第14回 脳外傷による高次脳機能障害
 脳外傷による高次脳機能障害の特徴を学び、必要な社会的支援について考察する。
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

定期試験70%、小テスト30%。遅刻と欠席は減点の対象とする。

■ 教 科 書

書名：石合純夫著
 著者名：高次脳機能障害学
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	作業療法概論	担当者	辻 郁 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

講義形式で、歴史や理論的背景、種々の展開例から、作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ

■ 目 標

1. 作業療法の枠組みを概観できる
2. 作業療法の実践例を知ること、その専門性を理解できる
3. チームアプローチについて具体的な考えが持てる

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法の歴史
作業療法の生い立ち
- 第2回 作業療法の歴史-2
我が国における作業療法の発展
- 第3回 作業療法の対象者理解
1. ライフステージからみる
2. 病期からみる
- 第4回 発達過程における作業療法の実際
- 第5回 精神障害者に対する作業療法の実際
- 第6回 身体障害者に対する作業療法の実際
- 第7回 高次脳機能障害者に対する作業療法の実際
- 第8回 職業（就労）支援における作業療法の実際
- 第9回 老年（高齢）期における作業療法の実際
- 第10回 地域における作業療法の実際
- 第11回 社会保障外にある人たちへの作業療法の実際
- 第12回 作業療法の“作業”の意味
- 第13回 作業療法実践の枠組み
- 第14回 作業療法の理論的背景
- 第15回 まとめ 作業療法の全体像をまとめる（辻）

■ 評 価 方 法

筆記試験（100%）
欠席は、5点減点、遅刻早退は、3点減点

■ 教 科 書

■ 参 考 書

書 名： 標準作業療法学 作業療法概論
 著者名： 岩崎テル子 編集
 出版社： 医学書院

書 名： 作業療法の世界
 著者名： 鎌倉矩子
 出版社： 三輪書店

■ 留 意 事 項

実践例を知ること、作業療法の専門性を理解し、よりよいチームアプローチが出来るような学習を進めてほしい。

授業科目	理学療法概論	担当者	今井 公一		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法の歴史、概念、理学療法の周辺から実際について、リハビリテーションや生活機能といった広域かつ現代的視点から授業を展開します。

■ 目 標

1. リハビリテーションと理学療法の歴史について理解する。
2. 理学療法の概念について理解する。
3. リハビリテーションチームの中での理学療法の役割について理解する。

■ 授 業 計 画

第1回	リハビリテーションと理学療法	第9回	現代社会と理学療法
第2回	理学療法概念と技術（1）	第10回	現代社会と理学療法
第3回	理学療法概念と技術（2）	第11回	グループワーク（1）
第4回	理学療法の実際	第12回	グループワーク（2）
第5回	理学療法の実際	第13回	グループワーク（3）
第6回	現代社会と理学療法	第14回	グループワーク（4）
第7回	現代社会と理学療法	第15回	グループワーク（5）
第8回	現代社会と理学療法		

■ 評 価 方 法

出席 30% 提出物 30% 筆記試験 40%

■ 教 科 書

書名：リハビリテーション
 著者名：砂川茂一
 出版社：岩波新書

書名：健康な暮らしと運動
 著者名：東京都老人総合研究所
 出版社：東京化学同人

書名：車イスから見た街
 著者名：村田稔
 出版社：岩波ジュニア新書

書名：脳から見たリハビリ治療
 著者名：久保田 競 他
 出版社：講談社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法概論	担当者	藪中 良彦		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法士になる事を目標に入学してきてはいるが、理学療法のわずかな部分の知識しかない学生に対して、今後4年間学ぶ理学療法の大枠を示す。

■ 目 標

理学療法の大枠を理解することにより、今後4年間で学ばなければならない内容の概略を把握する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 当大学の理学療法学専攻のカリキュラムの解説、理学療法の歴史及び概念
- 第2回 理学療法の対象と活動分野
- 第3回 理学療法の流れと方法
- 第4回 理学療法と障害モデル
- 第5回 理学療法の教育、根拠に基づいた理学療法
- 第6回 理学療法に関する法律と医療保険及び介護保険制度
- 第7回 中枢神経疾患理学療法概論
- 第8回 骨関節疾患理学療法概論（スポーツリハビリテーションを含む）
- 第9回 呼吸循環疾患理学療法概論
- 第10回 小児理学療法概論
- 第11回 記録・報告書の書き方
- 第12回 個人情報の管理、対象者の権利、医療専門職としての倫理
- 第13回 医療事故
- 第14回 感染症対策
- 第15回 臨床実習において学生に求められるもの

■ 評 価 方 法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
 小テスト（40点）
 定期試験（60点）

■ 教 科 書

書 名：理学療法入門テキスト
 著者名：監修 細田多穂、編集 中島喜代彦、森田正治、久保田章仁
 出版社：南江堂

■ 参 考 書

書 名：理学療法学概論 第3版
 著者名：監修 千住秀明
 出版社：神陵文庫

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法障害学	担当者	伊禮 まり子		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法と障害について学ぶ。国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）について学び、ICFに基づく障害の捉え方を理解する。理学療法において対象となる障害について、障害像・原因・評価・アプローチの概要を学ぶ。

■ 目 標

理学療法と障害について理解する。国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）の違いを理解し、ICFに基づいた障害の捉え方を経験する。理学療法において対象となる障害について、障害像・原因・評価・アプローチの概要を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション・理学療法と障害
- 第2回 国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）
- 第3回 障害各論（痛み）
- 第4回 障害各論（関節可動域制限）
- 第5回 障害各論（筋力低下）
- 第6回 障害各論（筋緊張異常）
- 第7回 障害各論（運動麻痺）
- 第8回 障害各論（協調性障害）
- 第9回 障害各論（感覚障害）
- 第10回 障害各論（平衡機能障害）
- 第11回 障害各論（全身持久力）
- 第12回 障害各論（基本動作障害）
- 第13回 障害各論（歩行障害）
- 第14回 障害各論（ADL 障害）
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験（90%）、小テスト（10%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教 科 書

書 名：リハビリテーションビジュアルブック
 著者名：落合慈之監修 稲川利光編集
 出版社：学研

■ 参考書

書名：PT・OT・ST・ナースを目指す人のためのリハビリテーション総論

著者名：椿原彰夫

出版社：診断と治療社

書名：最新 リハビリテーション医学 第2版

著者名：米本恭三監修 石神重信ら編集

出版社：医歯薬出版株式会社

書名：学生のためのリハビリテーション医学概論

著者名：粕森良二

出版社：医歯薬出版株式会社

書名：ビジュアルレクチャー 基礎理学療法学

著者名：大橋ゆかり 編集

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	理学療法管理学	担当者	今井 公一 他		
学科名	理学療法専攻	学年	4年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本における理学療法の実践から、各職場の業務とその管理について学びます。また、理学療法士に求められている能力について、国家試験の出題内容から理解します。

■ 目 標

1. 理学療法士の各職場の現状を理解する。
2. 理学療法士に求められている能力について国家試験の出題内容からまとめる

■ 授 業 計 画

- 第1回 理学療法士に求められている能力（グループワーク1）
- 第2回 理学療法士に求められている能力（グループワーク2）
- 第3回 理学療法士に求められている能力（グループワーク3）
- 第4回 理学療法士に求められている能力（グループワーク4）
- 第5回 理学療法士に求められている能力（グループワーク5）
- 第6回 理学療法士に求められている能力（グループワーク6）
- 第7回 理学療法士に求められている能力（グループワーク7）
- 第8回 理学療法士に求められている能力（グループワーク8）
- 第9回 理学療法士に求められている能力（グループワーク9）
- 第10回 理学療法士に求められている能力（グループワーク10）
- 第11回 理学療法業務と管理（1）
- 第12回 理学療法業務と管理（2）
- 第13回 理学療法業務と管理（3）
- 第14回 理学療法業務と管理（4）
- 第15回 理学療法業務と管理（5）

■ 評 価 方 法

提出物 20% 筆記試験 80%

■ 教 科 書

書名：理学療法士過去問題集 共通問題 / 専門問題
 著者名：久美出版編集部
 出版社：久美（株）

■ 参 考 書

- 書名：PT OT 基礎から学ぶ解剖学ノート
 著者名：中島雅美
 出版社：医歯薬出版
- 書名：PT OT 基礎から学ぶ生理学ノート
 出版社：医歯薬出版
- 書名：PT OT 国試共通問題完全学習ノート
 著者名：有馬慶美
 出版社：文光堂
- 書名：イメカラ 呼吸器 / 循環器
 著者名：西田有正
 出版社：メディックメディア

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法研究法	担当者	伊禮まり子 他		
学科名	理学療法専攻	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法学における研究の意義、目的および研究を遂行する際の具体的な方法論について学ぶ。また、本専攻教員のこれまでの研究活動および現在の研究テーマやゼミでの活動に触れ、今までの学習内容などに基づく興味と合わせて、卒業研究において希望する研究テーマについて整理する。

■ 目 標

- ・理学療法学における研究の意義、目的および研究を遂行する際の具体的な方法論について理解することができる。
- ・今までの学習内容および教員の研究活動などに基づいて、自分の興味のある分野について考え、希望する研究テーマについて整理することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーションと理学療法研究の必要性（EBM・EBPT）
- 第2回 研究デザイン
- 第3回 研究計画
- 第4回 研究倫理
- 第5回 文献検索
- 第6回 文献研究
- 第7回 データの処理
- 第8回 データの表現
- 第9回 統計の基礎
- 第10回 卒業研究ゼミ、教員研究活動紹介
- 第11回 卒業研究ゼミ、教員研究活動紹介
- 第12回 卒業研究ゼミ、教員研究活動紹介
- 第13回 卒業研究ゼミ、教員研究活動紹介
- 第14回 レポートまとめ（1）
- 第15回 レポートまとめ（2）

■ 評 価 方 法

レポート（100%）に出席状況を併せて評価する。

■ 教 科 書

--

■ 参 考 書

書 名：はじめての研究法 コメディカルの研究法入門

著者名：千住秀明・玉利光太郎

出版社：神陵文庫

書 名：標準理学療法学専門分野 理学療法研究法

著者名：内山靖 編集

出版社：医学書院

書 名：理学療法科学シリーズ 理学療法研究法入門第3版

著者名：理学療法科学学会 監修

出版社：iPEC

書 名：健康・スポーツ科学のための研究方法 研究計画の立て方とデータ処理方法

著者名：出村愼一

出版社：杏林書院

書 名：保健・医療のための研究法入門

著者名：Diana M. Bailey 著 朝倉隆司監訳

出版社：協同医書出版社

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法研究法実習	担当者	伊禮まり子 他		
学科名	理学療法専攻	学年	4年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

研究における計画書や論文、プレゼンテーションの意義、方法について学ぶとともに、実際の自分の卒業研究テーマについて、計画書の作成から具体的な方法論の検討、研究概略のプレゼンテーションを経験する。

■ 目 標

- ・ 研究における計画書の意義、方法を理解し、卒業研究についての研究計画書を作成、発表することができる。
- ・ 研究計画書に基づいた研究の方法論を検討することができる。
- ・ 研究における論文作成やプレゼンテーションの意義、方法を理解し、卒業研究の概略を発表することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 研究計画書の意義、方法
- 第2回 研究計画書作成
- 第3回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第4回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第5回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第6回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第7回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第8回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第9回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第10回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第11回 論文作成の意義
- 第12回 論文作成の方法
- 第13回 プレゼンテーションの方法
- 第14回 卒業研究概略発表
- 第15回 卒業研究概略発表

■ 評 価 方 法

研究計画書20%、研究計画書発表20%、卒業研究概略の内容40%、卒業研究概略のプレゼンテーション20%

■ 教 科 書

--

■ 参 考 書

--

■ 留 意 事 項

--

授業科目	理学療法評価学Ⅰ（概論・測定・評価）	担当者	今井 公一		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法の対象者をどのような視点で理解すればよいのか、また対象者の生活像の理解と問題分析のためにどのような具体的な方法があるのか、総論的な内容を学習した後、評価法の各論を学びます。各論の個々の内容は目標を参照。

■ 目 標

1. 生活機能について説明できる 2. 理学療法評価の過程について説明できる 3. 理学療法評価実施にあたってのリスクについて説明できる 4. 形態測定及び関節可動域測定の方法について説明できる 5. 筋機能の評価について説明できる 6. 筋力測定の方法について説明できる 7. 神経機能(意識・知能・高次脳機能、運動麻痺、協調障害、感覚障害、反射・反応、筋緊張)の評価について説明できる 8. 神経系に対する個々の評価方法について説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 生活機能と理学療法評価
- 第2回 理学療法評価の過程
- 第3回 理学療法評価に必要となる視点と臨床的能力
- 第4回 理学療法評価と安全性
- 第5回 筋骨格系の評価（1）
- 第6回 筋骨格系の評価（2）
- 第7回 筋骨格系の評価（3）
- 第8回 筋骨格系の評価（4）
- 第9回 筋骨格系の評価（5）
- 第10回 筋骨格系の評価（6）
- 第11回 筋骨格系の評価（7）
- 第12回 筋骨格系の評価（8）
- 第13回 筋骨格系の評価（9）
- 第14回 筋骨格系の評価（10）
- 第15回 筋骨格系の評価（11）
- 第16回 筋骨格系の評価（12）
- 第17回 筋骨格系の評価（13）
- 第18回 筋骨格系の評価（14）
- 第19回 筋骨格系の評価（15）
- 第20回 筋骨格系の評価（16）
- 第21回 神経系の評価（1）
- 第22回 神経系の評価（2）
- 第23回 神経系の評価（3）
- 第24回 神経系の評価（4）
- 第25回 神経系の評価（5）
- 第26回 神経系の評価（6）
- 第27回 神経系の評価（7）
- 第28回 神経系の評価（8）
- 第29回 神経系の評価（9）
- 第30回 筋骨格系及び神経系障害の評価 総まとめ

■ 評価方法

出席10% 提出物 10% 筆記試験 80%

■ 教科書

書名：ICF の理解と活用

著者名：上田 敏

出版社：きょうされん

書名：運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢 / 下肢・体幹

著者名：林 典雄

出版社：メジカルビュー社

書名：理学療法評価法

著者名：中島 喜代彦

出版社：神陵文庫

書名：ベッドサイドの神経の診かた

著者名：田崎 義昭

出版社：南山堂

書名：新・徒手筋力検査法

著者名：津山直一他訳

出版社：協同医書出版

書名：診察と手技がみえる vol.1

著者名：古谷伸之

出版社：メディックメディア

書名：絵でみる脳と神経

著者名：馬場元毅

出版社：医学書院

書名：リハビリテーション評価

著者名：正門由久

出版社：医歯薬出版

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	理学療法評価学Ⅲ (評価プロセス)	担当者	今井 公一		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法評価学Ⅰで学んだ個々の検査・測定方法に加えて、各論的に重要な評価方法を学び、後半は臨床適応のために今まで学んできた評価方法についての理解を深めます。

■ 目 標

1. 学んだ個々の評価方法（呼吸・循環・代謝、痛み、整形外科的検査、バランス評価、FIM、BI、SF36）について説明できる 2. 治療プログラムの立案を前提とした個々の評価結果の解釈ができる 3. 各評価結果を統合し生活機能の問題について考察できる

■ 授業計画

- 第1回 理学療法評価各論 (1)
- 第2回 理学療法評価各論 (2)
- 第3回 理学療法評価各論 (3)
- 第4回 理学療法評価各論 (4)
- 第5回 理学療法評価各論 (5)
- 第6回 理学療法評価 臨床適応 (1)
- 第7回 理学療法評価 臨床適応 (2)
- 第8回 理学療法評価 臨床適応 (3)
- 第9回 理学療法評価 臨床適応 (4)
- 第10回 理学療法評価 臨床適応 (5)
- 第11回 理学療法評価 臨床適応 (6)
- 第12回 理学療法評価 臨床適応 (7)
- 第13回 理学療法評価 臨床適応 (8)
- 第14回 理学療法評価 臨床適応 (9)
- 第15回 理学療法評価 臨床適応 (10)

■ 評価方法

出席10% 提出物 10% 筆記試験 80%

■ 教科書

書名：ICF の理解と活用

著者名：上田 敏

出版社：きょうされん

書名：運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢 / 下肢・体幹

著者名：林 典雄

出版社：メジカルビュー社

書名：理学療法評価法

著者名：中島 喜代彦

出版社：神陵文庫

書名：ベッドサイドの神経の診かた

著者名：田崎 義昭

出版社：南山堂

書名：新・徒手筋力検査法

著者名：津山直一他訳

出版社：協同医書出版

書名：診察と手技がみえる vol.1

著者名：古谷伸之

出版社：メディックメディア

書名：絵でみる脳と神経

著者名：馬場元毅

出版社：医学書院

書名：リハビリテーション評価

著者名：正門由久

出版社：医歯薬出版

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	理学療法評価学実習	担当者	牧之瀬 一博		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

3年次で行う理学療法評価学実習は、臨床場면을強く意識して行う。特に、症例プレゼンテーションや模擬的なカンファレンスの実施を通して、臨床思考能力をトレーニングする場とする。また、各疾患別の理学療法評価を体系的に学ぶ。

■ 目 標

各疾患別の障害像の理解と基本的な理学療法評価を学ぶ。
カンファレンスを通して、臨床思考の在り方を学ぶ。

■ 授 業 計 画

- 第1回 理学療法評価学実習の目指すところ（症候障害学ならびにクリニカル・リーズニング）。
- 第2回 カンファレンス形式による症例プレゼンテーション
- 第3回 カンファレンス形式による症例プレゼンテーション
- 第4回 症例プレゼンテーションからICFの枠組みを理解する
- 第5回 症例プレゼンテーションからICFの枠組みを理解する
- 第6回 中枢神経疾患（片麻痺）の障害像の理解と理学療法評価：急性期
- 第7回 中枢神経疾患（片麻痺）の障害像の理解と理学療法評価：回復期
- 第8回 中枢神経疾患（片麻痺）の障害像の理解と理学療法評価：慢性期
- 第9回 神経筋疾患の障害像の理解と理学療法評価
- 第10回 運動器疾患（変形性関節症）の障害像の理解と理学療法評価
- 第11回 脊髄損傷の障害像の理解と理学療法評価
- 第12回 呼吸循環不全の障害像の理解と理学療法評価
- 第13回 脳性麻痺の障害像の理解と理学療法評価
- 第14回 基本的なクリニカルリーズニングの知識のまとめ
- 第15回 基本的なクリニカルリーズニングの知識のまとめ

■ 評 価 方 法

実技試験（30%）、筆記試験（30%）、発表点（20%）、出席点（20%、態度を含む）で評価する。

■ 教 科 書

書名：症候障害学序説 理学療法の臨床思考過程モデル
著者名：内山 靖
出版社：文光堂

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学演習	担当者	牧之瀬 一博		
学科名	理学療法専攻	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

「理学療法評価学」で学んだ基本的な検査測定手技のより臨床的意義と、各種神経学的検査を習得する。各種検査の臨床的意義や結果の判定方法を考察し、学生同士で正確に検査を行い、判定できることを目標にする。また臨床場面で用いるICFの理解を促すため、ペーパーペイシエントを用いて演習を行う。演習は実技トレーニングと思考能力トレーニングから構成する。

■ 目 標

各種検査法を学生同士間で正確に実施することができる。
ペーパーペイシエントの障害像から評価すべき項目を挙げるすることができる。
行動学習を通して、国家試験頻出レベルの知識を自分のものとする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
理学療法評価学演習の目指すところ
- 第2回 カルテ情報の診方：情報収集とコミュニケーション演習，バイタルサインの診方
- 第3回 関節可動域検査（上肢・体幹）
- 第4回 関節可動域検査（上肢・体幹）
- 第5回 徒手筋力検査（上肢・体幹）
- 第6回 徒手筋力検査（上肢・体幹）
- 第7回 神経学的検査
- 第8回 痛みの基本的評価
- 第9回 中枢性麻痺と末梢性麻痺の理解と筋緊張検査
- 第10回 ペーパーペイシエントを用いた中枢神経障害疾患（脳血管障害）の障害像の理解
- 第11回 ペーパーペイシエントを用いた中枢神経障害疾患（神経変性疾患）の障害像の理解
- 第12回 ペーパーペイシエントを用いた運動器疾患の障害像の理解
- 第13回 臨床実習Ⅲオリエンテーション
臨床実習Ⅲに向けた演習
- 第14回 ベーシックなバイタルサインの測定，関節可動域測定，徒手筋力検査，各種基本的検査法の実技①
- 第15回 ベーシックなバイタルサインの測定，関節可動域測定，徒手筋力検査，各種基本的検査法の実技②

■ 評 価 方 法

実技試験（40%），筆記試験（40%），出席点（20%無断欠席や遅刻の有無，態度も含めて判断する）で評価する。

■ 教 科 書

書名：標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学（第2版）
著者名：内山靖（編集）
出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	運動療法学 I	担当者	牧之瀬 一博		
学科名	理学療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法における運動療法の位置づけと基本的概念を講義と演習から学ぶ

■ 目 標

各種運動療法技術の理論・目的・方法・適応について理解し、説明できること

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
運動療法の概念：定義や目的, 対象疾患, EBM
- 第2回 関節可動域障害に対する運動療法
- 第3回 関節可動域障害に対する運動療法
- 第4回 関節可動域障害に対する運動療法
- 第5回 筋力低下に対する運動療法
- 第6回 筋力低下に対する運動療法
- 第7回 筋力低下に対する運動療法
- 第8回 持久力増強運動
- 第9回 協調性障害に対する運動療法
- 第10回 協調性障害に対する運動療法
- 第11回 一般的な運動療法についてのまとめ
- 第12回 運動学習を目的とした運動療法
- 第13回 痛みに対する運動療法
特殊な運動療法
- 第14回 組織の病態生理と修復
- 第15回 講義全体のまとめ

■ 評 価 方 法

実技試験（40%）、筆記試験（40%）、出席点（20%無断欠席や遅刻の有無、態度も含めて判断する）で評価する。

■ 教 科 書

- 書 名：標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論（第3版）
- 著者名：吉尾雅春編（編集）
- 出版社：医学書院

- 書 名：エビデンスに基づく理学療法 活用と臨床思考過程の実際
- 著者名：内山靖（編集）
- 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	運動療法学Ⅱ	担当者	島 雅人		
学科名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動療法学Ⅰで学んだ知識をもとに、学生間での実技演習を通して各運動療法の基本的な技術を身につける。また、障害を有する対象者に対して、どのようにリスクを管理しながら効果的な運動療法を実施していくかを思考し模擬的に実施する。そのため、本学の履修においては、運動療法の原則や疾患の知識を復習しながら学んでいく。

■ 目 標

1. 運動療法に必要な解剖・運動・生理学の知識及び運動療法の原則について理解を深める
2. 学生同士で各運動療法技術を実施することができる
3. 各運動療法技術を障害のある対象者に実施する際の注意点（リスク）を理解できる
4. 各障害を想定した運動療法を模擬的に実施できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 コースガイダンス
運動療法Ⅰで学習した内容の確認 / 四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
- 第2回 四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
- 第3回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第4回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第5回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第6回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第7回 自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促進
- 第8回 自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促進
- 第9回 自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促進
- 第10回 自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促進
- 第11回 抵抗運動の方法
- 第12回 抵抗運動の方法
- 第13回 筋力低下が生じる要因と筋力増強運動の実際
- 第14回 筋力低下が生じる要因と筋力増強運動の実際
- 第15回 筋力低下が生じる要因と筋力増強運動の実際
- 第16回 筋力低下が生じる要因と筋力増強運動の実際
- 第17回 筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第18回 筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第19回 全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第20回 筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第21回 筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第22回 筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第23回 基本動作能力の獲得を目的とした運動療法
- 第24回 基本動作能力の獲得を目的とした運動療法
- 第25回 基本動作能力の獲得を目的とした運動療法
- 第26回 基本動作能力の獲得を目的とした運動療法
- 第27回 基本動作能力の獲得を目的とした運動療法
- 第28回 基本動作能力の獲得を目的とした運動療法
- 第29回 実技の到達度確認
- 第30回 実技の到達度確認

■ 評価方法

定期試験60%、提出ノートの内容20%、実技テスト20%

■ 教科書

書名：標準理学療法学 専門分野 運動療法学総論 第3版
著者名：シリーズ監修：奈良 勲 編集：吉尾 雅春
出版社：医学書院

■ 参考書

書名：最新運動療法大全―“基礎と実践” & “エビデンス情報”
著者名：キャロリン・キスナー（著），川島 由紀子（翻訳）
出版社：ガイアブックス

書名：関節可動域制限―病態の理解と治療の考え方
著者名：沖田 実
出版社：三輪書店

書名：筋機能改善の理学療法とそのメカニズム―理学療法の科学的基礎を求めて第2版
著者名：望月 久、山田 茂
出版社：NAP

書名：関節機能解剖学に基づく 整形外科運動療法ナビゲーション 上肢
著者名：整形外科リハビリテーション学会
出版社：メヂカルビュー

書名：関節機能解剖学に基づく 整形外科運動療法ナビゲーション 下肢・体幹
著者名：整形外科リハビリテーション学会
出版社：メヂカルビュー

■ 留意事項

本講義では、運動療法学 I の知識・技術をもとにして実施するため、事前に復習をしておくこと。
講義は実際に疾病や外傷のある対象者を想定しながら実技演習を行うため、適切な態度で臨むこと。
各運動療法技術を実施するにあたり、まとめノートを作成する。

授業科目	小児期理学療法治療学	担当者	藪中 良彦		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

正常発達と共に各疾患別の発達を理解し、小児理学療法評価法を学び、各小児疾患別の治療プログラム立案について学習する。

■ 目 標

脳性麻痺や二分脊椎や筋ジストロフィー等の小児理学療法対象疾患のある子ども達に対して、適切な評価・治療が行えるようになること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 姿勢反射、1歳までの運動発達（1）
- 第2回 1歳までの運動発達（2）
- 第3回 1歳までの運動発達（3）
- 第4回 脳性麻痺概論
- 第5回 脳性麻痺 痙直型片麻痺
- 第6回 脳性麻痺 痙直型両麻痺
- 第7回 脳性麻痺 痙直型四肢麻痺
- 第8回 脳性麻痺 アテトーゼ、失調型
- 第9回 二分脊椎、筋ジストロフィー
- 第10回 重症心身障がい児
- 第11回 運動発達遅滞、知的障害、ダウン症
- 第12回 新生児理学療法
- 第13回 小児疾患
- 第14回 小児理学療法評価法（1）
- 第15回 小児理学療法評価法（2）

■ 評 価 方 法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
小テスト（40点）
定期試験（60点）

■ 教 科 書

書名：小児理学療法学テキスト
著者名：細田多穂
出版社：南江堂

■ 参 考 書

- 書名：理学療法 Mook 15 子どもの理学療法 脳性麻痺の早期アプローチから地域理学療法まで
著者名：黒川幸雄、高橋正明、鶴見隆正
出版社：三輪書店
- 書名：PT マニュアル 小児の理学療法
著者名：河村光俊
出版社：医歯薬出版株式会社
- 書名：発達障害児の新しい療育 こどもと家族とその未来のために
著者名：今川忠男
出版社：三輪書店
- 書名：モーターコントロール 原著第3版 運動制御の理論から臨床実践へ
著者名：田中 繁、高橋 明
出版社：医歯薬出版株式会社

書名：乳児の発達 写真でみる0歳児

著者名：高橋孝文

出版社：医歯薬出版株式会社

書名：GMFM –粗大運動能力尺度

著者名：近藤 和泉、福田 道隆、青山 香

出版社：医学書院

書名：Clinics in Developmental Medicine No. 159 Gross Motor Function Measure
(GMFM-66 & GMFM-88) User's Manual

著者名：Dianne J. Russell, Peter L. Rosenbaum, Lisa M. Avery, Mary Lane

出版社：Mac Keith Press

書名：Gross Motor Function Measure (GMFM) Self-Instructional Training CD-ROM

著者名：Mary Lane, Dianne Russell

出版社：Mac Keith Press

書名：PEDI リハビリテーションのための子どもの能力低下評価表

著者名：里宇明元、近藤和泉、間川博之

出版社：医歯薬出版株式会社

書名：脳性まひ児の24時間姿勢ケア – The Chailey Approach to Postural Management

著者名：今川忠男

出版社：三輪書店

書名：脳損傷による異常姿勢反射活動

著者名：梶浦 一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

書名：脳性麻痺の運動障害 原著第2版

著者名：梶浦 一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

書名：脳性麻痺の類型別運動発達

著者名：梶浦 一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

書名：脳性まひ児の家庭療育 原著第3版

著者名：梶浦 一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

書名：赤ちゃんの運動発達 絵でみる治療アプローチ

著者名：芝田利生、櫻庭修

出版社：協同医書出版社

書名：誕生から1歳まで 機能的姿勢 – 運動スキルの発達

著者名：高橋智宏

出版社：協同医書出版社

書名：アテトーゼ・失調・低緊張の評価と治療：子どもへの感覚運動入力の実際

著者名：調 誠也、調 信子、鈴木 ほがら

出版社：協同医書出版社

書名：ボバース概念の実戦ハンドブック

著者名：紀伊克昌

出版社：パシフィックサプライ株式会社

書名：子育てと健康シリーズ17 子どもの障害をどう受容するか

著者名：中田 洋二郎

出版社：大月書店

書名：子育てと健康シリーズ21 医療的ケアハンドブック

著者名：横浜「難病児の在宅療育」を考える会

出版社：大月書店

- 書名：240動画でわかる赤ちゃんの発達地図—胎児・新生児期から歩行するまでの発達のつながりが理解できる
著者名：木原 秀樹
出版社：メディカ出版
- 書名：ネオネイタルケア2009年秋季増刊新生児発達ケア実践マニュアル（ネオネイタルケア 09年秋季増刊）
著者名：木原 秀樹
出版社：メディカ出版
- 書名：新生児理学療法
著者名：大城昌平, 木原秀樹
出版社：メディカルプレス
- 書名：視覚機能の発達障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社
- 書名：手の発達機能障害
著者名：紀伊克昌
出版社：医歯薬出版株式会社
- 書名：EBOT時代の評価法 作業療法ジャーナル増刊号 Vol.38. No. 7. 2004
出版社：三輪書店
- 書名：上肢-上部体幹の機能改善—評価と治療アプローチ
著者名：高橋 智宏、柴田 秀雄、辻 薫
出版社：協同医書出版社
- 書名：発達障害と作業療法（基礎編）
著者名：岩崎 清隆、鎌倉 矩子、山根 寛、二木 淑子
出版社：三輪書店
- 書名：発達障害と作業療法（実践編）
著者名：岩崎 清隆、岸本 光夫、鎌倉 矩子、山根 寛
出版社：三輪書店
- 書名：脳性麻痺のクリニカルリーズニングアプローチ—理学療法・作業療法評価と治療
著者名：上杉雅之、成瀬進
出版社：医歯薬出版株式会社
- 書名：イラストでわかるスペシャルシーティング—姿勢評価アプローチ
著者名：上杉雅之、成瀬進
出版社：医歯薬出版株式会社
- 書名：重症心身障害療育マニュアル
著者名：江草 安彦、岡田 喜篤、鈴木 康之、末光 茂
出版社：医歯薬出版株式会社
- 書名：重症心身障害療育マニュアル
著者名：江草 安彦、岡田 喜篤、末光 茂、鈴木 康之
出版社：医歯薬出版株式会社
- 書名：重症児のQOL（クオリティー・オブ・ライフ）—「医療的ケア」ガイド
著者名：藤岡 一郎
出版社：クリエイツかもがわ
- 書名：こどもの整形外科疾患の診かた—診断・治療から患者家族への説明まで
著者名：亀ヶ谷 真琴
出版社：医学書院
- 書名：脳性麻痺リハビリテーションガイドライン
著者名：日本リハビリテーション医学会
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	呼吸器障害理学療法治療学	担当者	野村 卓生		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

「呼吸と運動」に関する解剖学・生理学的な基本知識を整理し、呼吸器疾患の病態およびその基本治療を学ぶ。酸素化能障害や換気能力障害などの呼吸器の障害に対する評価と理学療法について、その禁忌やリスク管理をふまえて講義し、実技実習を行う。

■ 目 標

肺解剖 T シャツやペットボトルを利用した肺胞モデルの製作、フィジカルアセスメント、呼吸機能検査や運動耐容能評価の実習もふまえ、疾患、病態、病期（急性期、慢性期）に応じた理学療法について理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 「運動と呼吸」
内部障害の範囲と特徴を理解する。呼吸器系の役割と運動時の適応、呼吸器系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。
- 第2回 「酸素化能、換気能力」
酸素化能障害、換気能力障害の基本的概念をふまえ理解する。酸素化能、換気能力の基本的な評価法について学習する。
- 第3回 「呼吸理学療法における評価1」
基本となる胸部の観察、呼吸困難の評価方法、打診、聴診の実際を学習する。
- 第4回 「呼吸理学療法における評価2」
呼吸機能、運動耐容能の評価方法について、その実際を学習する。
- 第5回 「慢性閉塞性肺疾患（COPD）の理学療法」
COPDにおける障害、呼吸器疾患患者のADLおよびQOL低下の特徴を理解し、特有の評価方法について学習する。他部門からの情報、理学療法評価結果に基づいた理学療法を学習する。
- 第6回 「拘束性肺疾患、外科手術後、その他呼吸器疾患の理学療法」
疾患、病態の特徴を理解し、特有の評価方法、理学療法について学習する。外科手術が生体に与える影響を理解し、術前後および急性増悪例への理学療法を学習する。
- 第7回 「排痰法」
呼吸リハビリテーションにおける排痰法の目的とその適応、徒手のおよび体位肺痰法の実践を学習する。
- 第8回 「理学療法士による吸引行為」
吸引プロトコル（日本理学療法士協会）に沿って吸引のための基礎知識、実際の概要を学習する。

■ 評価方法

期末試験 70%、提出課題（場合によっては小テスト） 30%

■ 教 科 書

書 名：内部障害理学療法学テキスト
著者名：細田多穂 監、山崎裕司・川俣幹雄・丸岡弘 編
出版社：南江堂

■ 参考書

書名：ゴールド・マスター・テキスト 内部障害系理学療法学

著者名：柳澤健 編

出版社：メジカルビュー社

書名：動画でわかる呼吸リハビリテーション 第2版

著者名：高橋仁美・塩谷隆信・宮川哲夫

出版社：中山書店

書名：呼吸・心臓リハビリテーション ビジュアル実践リハ

著者名：高橋哲也・間瀬教史

出版社：羊土社

書名：理学療法テキスト 内部障害理学療法学 呼吸

著者名：石川朗・玉木 彰

出版社：中山書店

書名：DVD で学ぶ呼吸理学療法テクニック 呼吸と手技のタイミングがわかる動画91

著者名：玉木 彰

出版社：南江堂

書名：呼吸リハビリテーションマニュアル 運動療法

著者名：日本呼吸管理学会、日本呼吸器学会、日本理学療法士協会 編

出版社：日本呼吸管理学会、日本呼吸器学会、日本理学療法士協会

書名：呼吸機能検査ガイドライン、呼吸機能検査ガイドラインⅡ

著者名：日本呼吸器学会

出版社：メディカルレビュー社

書名：酸素療法ガイドライン

著者名：日本呼吸器学会、日本呼吸管理学会 編

出版社：メディカルレビュー社

■ 留意事項

授業では、個人情報に関わる資料を提示する場合があります。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。授業には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意し、実習にも積極的に参加すること。実習を行う際には大学指定のジャージや白衣（KC）など実技を行いやすい衣服を着用し、爪は短く切っておくこと。

授業科目	代謝障害理学療法治療学	担当者	野村 卓生		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

「代謝と運動」に関する生理学・生化学的な基本知識を整理し、代表的な代謝障害である糖尿病の病態およびその基本治療を学ぶ。長期にわたる糖代謝障害によって発症する糖尿病特有の合併症や足病変への理学療法、理学療法士の関わりについて講義し、実技実習を行う。

■ 目 標

自己血糖測定、糖尿病足病変のスクリーニング方法や糖尿病多発神経障害の簡易診断基準の実習もふまえ、病型、病態、病期に応じた理学療法について理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 「代謝と運動」
内部障害の範囲と特徴を理解する。運動時における代謝系の適応、代謝系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。
- 第2回 「代謝疾患総論」
糖尿病、肥満症、メタボリックシンドローム、脂質異常症等について、日本における患者数、疾患の概要と診断基準等の概略について学習する。
- 第3回 「糖尿病合併症」
低血糖に代表される急性合併症、糖尿病特有の慢性合併症（網膜症・腎症・神経障害）について学習する。
- 第4回 「糖尿病管理」
糖尿病の基本的治療法、とくに運動療法についてその概要を学習する。また、自己管理を支援するための患者教育の重要性を理解する。
- 第5回 「糖尿病理学療法1（導入編）」
一般的な糖尿病患者、および糖尿病合併症を有する患者への理学療法、理学療法士の関わりについて、その具体を演習形式で学習する。
- 第6回 「糖尿病理学療法2（実践編）」
実際に自己血糖測定を行い、理学療法を効果的かつ安全に進める上で必要な血液生化学的データの理解を深める。
- 第7回 「糖尿病理学療法3（応用編）」
振動覚検査、アキレス腱反射など糖尿病神経障害の簡易診断基準の一つともなる身体評価について演習形式で学習する。また、その結果を如何に患者教育に活用するかについて学習する。
- 第8回 「糖尿病理学療法4（総合演習）」
仮想症例を提示し、問題点の抽出、プログラムの作成から効果判定をどのように行うかまでの一連の理学療法介入の思考プロセスを経験する。

■ 評 価 方 法

期末試験 70%、提出課題（場合によっては小テスト） 30%

■ 教 科 書

書名：内部障害理学療法学テキスト 改訂第2版
著者名：細田多穂 監、山崎裕司・川俣幹雄・丸岡弘 編
出版社：南江堂

■ 参 考 書

- 書 名：考える理学療法 内部障害編 評価から治療手技の選択
著者名：丸山仁司・竹井 仁・黒澤和生 常編、石黒友康・高橋哲也 ゲスト編
出版社：文光堂
- 書 名：運動生化学ハンドブック
著者名：Michael E. Houston、山田 茂 監訳
出版社：NAP
- 書 名：科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン2012
著者名：日本糖尿病学会 編
出版社：南江堂
- 書 名：糖尿病療養指導ガイドブック2012
著者名：日本糖尿病療養指導士認定機構 編
出版社：メディカルレビュー社
- 書 名：インターナショナルコンセンサス 糖尿病足病変
著者名：糖尿病足病変に関する国際ワーキンググループ 編
出版社：医歯薬出版株式会社
- 書 名：小児・思春期糖尿病管理の手びき 改訂第3版 コンセンサスガイドライン
著者名：日本糖尿病学会・日本小児内分泌学会 編
出版社：南江堂
- 書 名：肥満症治療ガイドライン2006
著者名：日本肥満学会
出版社：肥満研究2006 Vol.12（臨時増刊号）
- 書 名：肥満症診断基準2011
著者名：日本肥満学会
出版社：肥満研究2011 Vol.17（臨時増刊号）

■ 留 意 事 項

授業では、個人情報に関わる資料を提示する場合がある。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。授業には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意し、実習にも積極的に参加すること。実習を行う際には大学指定のジャージや白衣（KC）など実技を行いやすい衣服を着用し、爪は短く切っておくこと。血糖測定の実習では、穿刺器具を使用するため取扱いに留意し、感染に関しては特に注意すること。

授業科目	中枢神経障害理学療法治療学	担当者	岩田 篤		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

中枢神経疾患の理学療法における脳神経科学の重要性を説き、根拠ある理学療法を展開するための基礎知識の習得とその方法論を学習する。

■ 目 標

中枢神経疾患による理学療法において、検査・測定結果から科学的根拠に基づいた臨床推論ができることを目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 中枢神経疾患理学療法の脳神経科学の重要性と脳神経科学の理学療法への応用
- 第2回 脳神経解剖と脳神経機能系
- 第3回 脳血管障害の病態と症候
- 第4回 脳血管障害の理学療法
- 第5回 パーキンソン病の病態と症候
- 第6回 パーキンソン病の理学療法
- 第7回 脊髄小脳変性症の病態と症候
- 第8回 脊髄小脳変性症の理学療法

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 教科書

- 書名：15レクチャーシリーズ 神経障害理学療法学Ⅰ
 著者名：石川 朗（責任編集）
 出版社：中山書店
-
- 書名：15レクチャーシリーズ 神経障害理学療法学Ⅱ
 著者名：石川 朗（責任編集）
 出版社：中山書店

■ 参考書

- 書名：脳卒中ビジュアルテキスト 第2版
 著者名：高木康行
 出版社：医学書院
-
- 書名：脳の機能解剖と画像診断
 著者名：真柳佳昭
 出版社：医学書院
-
- 書名：脳神経疾患ビジュアルブック
 著者名：落合慈之
 出版社：学研

■ 留意事項

講義の進度は非常に速いので、脳神経解剖学、脳神経生理学の復習をしておくことを希望する。

授業科目	老年期理学療法治療学	担当者	上田 陽之		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

慢性期病院（療養型病院）における高齢者の生活機能の向上に対するチームアプローチの重要性と高齢者のリハビリテーションにおける理学療法評価・治療を学習する。

■ 目 標

- ① 健常者（学生間）の身体機能（筋・骨格系を中心に）と姿勢・動作の操作法を演習しながら、高齢者の変形や拘縮、姿勢・動作の特徴を理解できるようにする。
- ② “食事”を中心に生活リズム、生活空間、人間関係等の条件を考慮しながら療養病棟での高齢者の生活支援について議論できるようにする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 異常筋緊張のメカニズム
- 第2回 演習（1）筋緊張とリラクゼーション
- 第3回 廃用症候群（特に変形、関節拘縮）の評価と治療
- 第4回 演習（2）変形、関節拘縮の介入法
- 第5回 姿勢・動作のコントロール
- 第6回 演習（3）姿勢・動作への介入法
- 第7回 環境調整（移動・コミュニケーションの手段）
- 第8回 生活リズムの維持・向上（離床に向けた取り組み）

■ 評 価 方 法

筆記試験100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	循環器障害理学療法治療学	担当者	大槻 桂右		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

循環器疾患患者は増加の一途を辿っている。特に動脈硬化症を背景とする心筋梗塞, 狭心症, 末梢循環不全, 心不全は国家試験出題数も多い。理学療法士はそれらに対する全般的な医学的知識とリハビリテーションの介入の方法論を学ばなければならない。最先端の臨床的知見を学ぶだけでなく, 循環器領域での理学療法士の役割を講義する。

■ 目 標

心臓リハビリテーションの在り方を学ぶ。
ペーパーペイシェントを通して心疾患の臨床推論の在り方を学ぶ。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心臓リハビリテーションの概説
- 第2回 急性心筋梗塞に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第3回 回復期心筋梗塞に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第4回 急性心不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第5回 慢性心不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第6回 不整脈を合併する症例に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第7回 末梢循環不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第8回 ペーパーペイシェントを用いて, 心疾患に対する臨床推論を学ぶ。

■ 評 価 方 法

筆記試験80% 出席点20% で評価する。

■ 教 科 書

書 名：内部障害理学療法学テキスト
著者名：細田多穂, 山崎裕司, 川俣幹雄, 丸岡弘
出版社：南江堂

■ 参 考 書

書 名：循環器理学療法の理論と技術
著者名：増田 卓, 松永 篤彦
出版社：メジカルビュー社

■ 留 意 事 項

講義中の私語は厳禁とする。講義中に注意を何度か受け, かつ改善が認められな場合は講義を妨害したとみなし, 対象学生に対して退室を指示することがある。真剣に取り組む姿勢を求める。

授業科目	神経障害理学療法治療学	担当者	井上 悟		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

神経筋疾患の内、神経難病と言われる一部の疾患の臨床講義（症例紹介含む）を行う。

■ 目 標

神経筋疾患の臨床での理学療法の実際について認識する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 神経筋疾患のPT 総論：オリエンテーション
- 第2回 パーキンソン病PDの理学療法
- 第3回 運動失調症：脊髄小脳変性症SCDの理学療法
- 第4回 多発性硬化症MSの理学療法
- 第5回 運動ニューロン疾患：筋萎縮性側索硬化症ALSの理学療法とケア
- 第6回 ニューロパチー：ギランバレー症候群GBSの理学療法
- 第7回 筋疾患1：進行性筋ジストロフィー症（脊椎手術例）の理学療法
- 第8回 筋疾患2：筋炎の理学療法

■ 評 価 方 法

出席・授業態度等30%、筆記試験70%

■ 教 科 書

書 名：臨床神経学（神経内科学：阿部先生）の講義資料 持参必須
著者名：阿部和夫

■ 参 考 書

- 書 名：標準理学療法学・作業療法学：神経内科学 第2版
著者名：川平和美
出版社：医学書院
- 書 名：clinical neuroscience
著者名：雑誌
出版社：中外医学社
- 書 名：「神経リハビリテーション」
著者名：岩崎祐三他訳
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

臨床講義のため、阿部先生の講義資料を忘れると、講義についていけない。注意を！

授業科目	リウマチ・有痛性障害理学療法治療学	担当者	佐藤 睦美		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

関節リウマチの病態と慢性痛の機序を学び、それらに対する根拠のある理学療法を学ぶ

■ 目 標

慢性関節リウマチの病態と慢性痛の機序を理解し、理学療法評価と治療プログラムを立案できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 ガイダンス
関節リウマチの病態と治療
- 第2回 関節リウマチに対する理学療法
- 第3回 関節リウマチに対する理学療法
- 第4回 関節リウマチに対する理学療法のまとめ
- 第5回 有痛性障害に対する理学療法： 慢性痛のメカニズム
- 第6回 有痛性障害に対する理学療法： CRPS
- 第7回 有痛性障害に対する理学療法： 評価と治療
- 第8回 有痛性障害に対する理学療法のまとめ

■ 評価方法

小テスト40%, 定期テスト60%

■ 教科書

書名：ペインリハビリテーション
著者名：松原貴子・沖田実・森岡周（編）
出版社：三輪書店

■ 参考書

- 書名：理学療法 MOOK 3 疼痛の理学療法 慢性痛の理解とエビデンス 第2版
著者名：鈴木重行（編）
出版社：三輪書店
- 書名：DVD で学ぶ運動器障害の理学療法テクニック
著者名：林 義孝（編）
出版社：南江堂
- 書名：理学療法士臨床判断フローチャート
著者名：奈良 勲（監修），松尾善美（編）
出版社：文光堂

■ 留意事項

授業科目	運動器・スポーツ障害理学療法治療学	担当者	佐藤 睦美		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動器障害, スポーツ傷害の病態を学び、理学療法評価・治療への展開を学ぶ

■ 目 標

運動器障害, スポーツ傷害の各疾患に応じた理学療法評価と治療を立案・実施する

■ 授 業 計 画

第1回 ガイダンス 骨折・脱臼の理学療法	第9回 膝関節障害の理学療法②
第2回 肩関節障害の理学療法①	第10回 膝関節障害の理学療法③
第3回 肩関節障害の理学療法②	第11回 足関節障害の理学療法
第4回 肘・手関節・手指障害の理学療法①	第12回 脊柱障害の理学療法①
第5回 肘・手関節・手指障害の理学療法②	第13回 脊柱障害の理学療法②
第6回 股関節障害の理学療法①	第14回 スポーツ障害の理学療法①
第7回 股関節障害の理学療法①	第15回 スポーツ障害の理学療法②
第8回 膝関節障害の理学療法①	

■ 評 価 方 法

小テスト40%, 課題20%, 筆記試験40%

■ 教 科 書

書 名：15レクチャーシリーズ 運動器障害理学療法学Ⅰ
 著者名：河村廣幸（責任編集）
 出版社：中山書店

書 名：15レクチャーシリーズ 運動器障害理学療法学Ⅱ
 著者名：河村廣幸（責任編集）
 出版社：中山書店

書 名：実践PTノート 第2版 運動器障害の理学療法
 著者名：小柳磨毅（編）
 出版社：三輪書店

■ 参考書

書名：標準理学療法学 専門分野 理学療法学 各論 第3版

著者名：吉尾雅春（編）

出版社：医学書院

書名：理学療法学マスターテキスト 4 整形外科系理学療法学

著者名：柳沢健（編）

出版社：メジカルビュー社

書名：スポーツ膝の臨床

著者名：史野根生

出版社：金原出版

書名：理学療法 MOOK 9 スポーツ傷害の理学療法 第2版

著者名：福井勉・小柳磨毅（編）

出版社：三輪書店

書名：ビジュアル実践リハ 整形外科リハビリテーション

著者名：相澤純也・中丸宏二（編）

出版社：羊土社

書名：整形外科疾患ビジュアルブック

著者名：落合慈之（監修），下出真法（編）

出版社：学研

■ 留意事項

実技のできる服装で出席すること

授業科目	健康増進理学療法学	担当者	佐藤 秀紀		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

高齢社会の現代においては、健全な社会構築のために疾病や障害予防のための健康増進が注目されている。この講義では、予防のための理学療法のあり方についてテーマとし、健康増進を目的とした理学療法における基本的な評価、運動療法の理論と実際について学ぶ。

■ 目 標

健康増進を目的とした理学療法における基本的な評価、運動療法の理論と実際について理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 健康概念の変遷と健康増進
- 第2回 脳血管疾患を有する人の健康増進 ①脳卒中の対策 リハビリテーションと再発予防
- 第3回 脳血管疾患を有する人の健康増進 ②パーキンソン病の対策 日常生活のケアとは？
- 第4回 運動器疾患を有する人の健康増進 ①首の痛み 首の痛みの対処法
- 第5回 運動器疾患を有する人の健康増進 ②肩の痛み 肩の痛みを長引かせない！
- 第6回 運動器疾患を有する人の健康増進 ③手のトラブル 早めに解消！手のトラブル
- 第7回 運動器疾患を有する人の健康増進 ④股関節の痛み 上手につきあう股関節の病気
- 第8回 運動器疾患を有する人の健康増進 ⑤腰の痛み ここまで進んだ腰痛対策
- 第9回 運動器疾患を有する人の健康増進 ⑥膝の痛みと踵の痛み
- 第10回 運動器疾患を有する人の健康増進 ⑦関節リウマチの対策 上手につきあい悪化を防ぐ暮らし方
- 第11回 脳性麻痺児のケア
- 第12回 筋ジストロフィーと二分脊椎児のケア
- 第13回 糖尿病・動脈硬化を有する人の健康増進 足が危ない！糖尿病のフットケア
- 第14回 呼吸器疾患を有する人の健康増進 肺年齢と COPD 生活を楽にする工夫
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

小テスト50%、学期末試験50%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	物理療法学	担当者	榎 千磨		
学科名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法の中での物理療法の位置づけと役割を理解してもらいます。
 更に、物理療法で用いられる物理的刺激がどのような生体反応を導出するのかを学びつつ、その結果のメリット及びリスクを理解してもらいます。
 その理解の上で、機器選択に思考が及ぶようになってもらいます。

■ 目 標

1. 理学療法全体の中での物理療法の位置づけを理解する。
2. 物理療法による生体への影響及びその反応を理解する。
3. 物理療法機器の原理・作用・適応・禁忌事項等の知識を総合的に修得する。
4. 適切に物理療法機器を選択できるようになる。
5. リスク管理の知識を深め、安全に物理療法機器が使用できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 歴史的背景。理学療法の中での物理療法の位置づけ。物理療法の分類。
 第2回 物理療法が生体に及ぼす生理学的作用
 第3回 炎症・痛みに対する物理療法
 第4回 温熱療法の概念（伝導、対流、放射、変換熱）、ホットパック、パラフィン
 第5回 寒冷療法（アイスマッサージ・アイシング、極低温療法）
 第6回 光線療法（赤外線、紫外線、低出力レーザー）
 第7回 電磁波療法（極超短波、超短波）
 第8回 超音波療法
 第9回 電気刺激療法（低周波、経皮的末梢神経電気刺激）
 第10回 電気刺激療法（機能的電気刺激法、治療的電気刺激法）
 第11回 その他の電気療法（電気生理学的検査、バイオフィードバックなど）
 第12回 牽引療法（頸椎、腰椎）、マッサージ
 第13回 水治療法（渦流浴、ハバードタンク、運動浴）
 第14回 その他（持続的他動運動、圧迫療法）
 第15回 リスク管理

■ 評 価 方 法

筆記試験70% 小テスト15% 出席状況15%（無断欠席・遅刻は減点）

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学 専門分野 物理療法学 第3版
 著者名：網本和編
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

第2回目から前回復習を兼ねた小テストを実施。第15回は当日講義分も実施（つまり小テスト2回実施）。

授業科目	物理療法学実習	担当者	榎 千磨		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

物理療法学実習では、実際に物理療法機器を操作し、生体の反応を体感してもらいます。それに際しては、出力や温度などの物理療法機器の設定、適応・禁忌などのリスク管理などを重点的に学習してもらいます。10班に分かれ、第3回目以降各物理療法機器をローテーションで実習してもらいます。第14回15回では症例検討を行い、各班毎で物理療法のプログラムを立て発表してもらいます。

■ 目 標

1. 物理療法機器操作に際し、リスク管理を行えるようになる。
2. 適切に物理療法機器を選択できるようになる。
3. 適切に物理療法機器を操作できるようになる。
4. 物理療法施行後の生体反応を見極めることができるようになる。
5. 物理療法と生体反応の関係性に考察が及ぶようになる。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション (①ホットパック、②パラフィン、③寒冷療法、④極超短波、⑤超音波)
- 第2回 オリエンテーション (⑥低周波、⑦干渉波、⑧牽引 [頸椎・腰椎]、⑨水治療法 [渦流浴]、⑩マッサージ)
- 第3回 実習 第1回目 実習前に指定された各班がローテーションで10の治療手段の実習を行う。翌週の实習開始前に各自レポートにまとめて提出する。2回目以後も同様とする。
- 第4回 実習 第2回目
- 第5回 実習 第3回目
- 第6回 実習 第4回目
- 第7回 実習 第5回目
- 第8回 実習 第6回目
- 第9回 実習 第7回目
- 第10回 実習 第8回目
- 第11回 実習 第9回目
- 第12回 実習 第10回目
- 第13回 実習総括
症例1の提示
- 第14回 症例1検討 (各班毎に発表)
症例2の提示
- 第15回 症例2検討 (各班毎に発表)

■ 評価方法

筆記試験20% 出席状況15%（無断欠席・遅刻は減点） レポート65%

■ 教科書

書名：配布する手引きを使用。

■ 参考書

書名：標準理学療法学 専門分野 物理療法学 第3版

著者名：網本和編

出版社：医学書院

■ 留意事項

1. 学生全員が験者、被験者を必ず体験すること。
2. リスク管理事項を絶対に遵守すること。
3. 実習第1回目から第10回目までの班実習では、10回の実習項目について全員がレポートを提出する。
4. 症例課題（1.2）では、発表を踏まえ更に文献収集・考察等をした後、全員がレポートを提出する。
5. 実習ガイド（手引書）をあらかじめ十分に熟読・予習してきて、実習開始後速やかに行動ができるようにする。

授業科目	義肢装具学	担当者	井上 悟		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を紹介する。

■ 目 標

臨床で用いる義肢装具の基本的知識を増やす。
臨床で使用される義肢装具の種類、特徴、機能が説明できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（授業計画の概要と成績判定方法の説明）
義肢学1 切断総論
第2回 義肢学2 義肢総論
第3回 義肢学3 下腿切断と義足
第4回 義肢学4 下腿義足1
第5回 義肢学5 下腿義足2
第6回 義肢学6 大腿切断と義足
第7回 義肢学7 大腿義足1
第8回 義肢学8 大腿義足2
第9回 義肢学9 大腿義足3
第10回 義肢学10 大腿義足4
第11回 装具学1 装具総論（下肢装具を中心に）
第12回 装具学2 靴と靴型装具（FO）
第13回 装具学3 短下肢装具（AFO）
第14回 装具学4 長下肢装具（KAFO）、膝装具（KO）
第15回 装具学5 骨盤帯付き長下肢装具（HKAF0）、股関節装具（HO）

■ 評 価 方 法

筆記試験 70%、授業態度 30%（遅刻・無断欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 教 科 書

書名：義肢装具学（第4版）
著者名：川村次郎・他編
出版社：医学書院、2009年

■ 参 考 書

- 書名：切断と義肢
著者名：澤村誠志
出版社：医歯薬出版、2007年
- 書名：装具学 第3版
著者名：日本義肢装具学会
出版社：医歯薬出版
- 書名：義肢装具のチェックポイント 第7版
著者名：日本リハビリテーション医学会
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	義肢装具学演習	担当者	井上 悟		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を紹介する。臨床で用いる義肢装具の基本的知識を増やす。

■ 目 標

対象者の障害レベルに応じた義肢装具の類別ができる。
各種障害に対する義肢装具の選択と適合判定ができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 義肢学演習1 股関節離断と股義足
- 第2回 義肢学演習2 膝離断と膝義足
- 第3回 義肢学演習3 サイム切断とサイム義足
- 第4回 義肢学演習4 足部切断と足部義足
- 第5回 義肢学演習5 切断者の理学療法1
- 第6回 義肢学演習6 切断者の理学療法2 (高木)
- 第7回 義肢学演習7 切断者の理学療法3 (高木)
- 第8回 義肢学演習8 最新義足のトピックス (西野)
- 第9回 装具学演習1 疾患、障害別装具1 脳卒中の装具 (橋田)
- 第10回 装具学演習2 疾患、障害別装具2 対麻痺の装具
- 第11回 装具学演習3 疾患、障害別装具3 小児疾患用装具
- 第12回 装具学演習4 疾患、障害別装具4 整形外科的治療用装具
- 第13回 装具学演習5 疾患、障害別装具5 頸随損傷、末梢神経損傷の装具
- 第14回 装具学演習6 疾患、障害別装具6 体幹・頸椎装具、側弯症装具
- 第15回 装具学演習7 疾患、障害別装具7 上肢装具、スプリントなど (西野)

■ 評 価 方 法

筆記試験 70%、授業態度 30% (遅刻・無断欠席は減点対象) で総合評価します。

■ 教 科 書

書 名：義肢装具学 (第4版)
著者名：川村次郎・他編
出版社：医学書院、2009年

■ 参 考 書

- 書 名：切断と義肢
著者名：澤村誠志
出版社：医歯薬出版、2007年
-
- 書 名：装具学 第3版
著者名：日本義肢装具学会
出版社：医歯薬出版
-
- 書 名：義肢装具のチェックポイント 第7版
著者名：日本リハビリテーション医学会
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	日常生活活動学	担当者	牧之瀬 一博		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日常生活活動学では、普段意識する事無く行っている日常生活が理学療法において重要な評価対象であることを学ぶ。の活動を専門的な視点で見る事を学ぶ。日常生活に関与する諸活動の概念、生活関連活動、運動学との関係、各種評価法などの理解を深める。主な疾患や病態の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について学習する。

■ 目 標

日常生活の活動を見る事の重要性を認識する。日常生活に関与する諸活動の概念、分析、評価及び練習についての知識を深める。代表的な自助具や福祉・生活支援機器についての知識を習得する。代表的疾患の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について修得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 日常生活活動（ADL）の概念と範囲
- 第2回 基本的 ADL と生活関連活動
- 第3回 基本的 ADL と生活の質
- 第4回 ADL と運動学
- 第5回 ADL 評価（代表的評価法）
- 第6回 ADL と周辺機器（自助具や歩行補助具など）
- 第7回 各論①片麻痺の ADL
- 第8回 各論②脊髄損傷の ADL
- 第9回 各論③脳性麻痺の ADL
- 第10回 各論④慢性関節リウマチの ADL
- 第11回 各論⑤人工股関節の ADL
- 第12回 各論⑥内科疾患（呼吸器疾患・循環器疾患）の ADL
- 第13回 各論⑦切断の ADL
- 第14回 各論⑧神経筋疾患・難病の ADL
- 第15回 各論⑨高齢者の ADL

■ 評 価 方 法

筆記試験（50%）、提出課題（20%）、小テスト（20%）、出席状況（10%、無断欠席や遅刻の有無、受講態度も含めて判断する）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

- 書 名：標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学（第4版）
 著者名：鶴見隆正（編集）
 出版社：医学書院
-
- 書 名：姿勢と動作 — ADL その基礎から応用まで—（第3版）
 著者名：斉藤宏他著
 出版社：メヂカルフレンド社

■ 参 考 書

書 名：新版 日常生活活動（ADL）—評価と支援の実際—

著者名：土屋弘吉等

出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

提出課題を課す.

事前に予告し、復習を兼ねた小テストを実施する.

授業科目	日常生活活動学実習	担当者	牧之瀬 一博		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

日常生活活動学では、普段意識する事無く行っている日常生活の活動を見る専門的な視点を養い実体験する。姿勢と動作の基礎的知識、起居・移動・移乗及び段差・階段・歩行に関わる自力動作と介助法を修得する。車いす操作法、及び車いすのキャスター上げを体得する。各論として、主な疾患者の特徴的動作を習得させる。クラスを2つの大班に分けて実習を行う。

■ 目 標

日常生活の活動を見る専門的な視点を養う。姿勢と動作の基礎的知識が理解できる。起居・移動・移乗動作に関わる自力動作と介助法が理解でき、かつ安全に実践できる。車いす操作、及び車いすキャスター上げができ、指導もできる。各論として、主な疾患者の特徴的動作が理解でき、対象者（障害）別の指導方法も理解できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 実習オリエンテーション
姿勢と動作の基礎知識（概念、身体力学、姿勢と身体構造、姿勢反射）
- 第2回 基本の姿勢、移動
- 第3回 日常生活活動における姿勢と動作
- 第4回 平地歩行、段差・階段昇降（自力、介助）
- 第5回 片麻痺と対麻痺における移動動作（自力、介助）
- 第6回 片麻痺者・対麻痺者の移乘法、及び介助法（自力、介助）
- 第7回 片麻痺者・対麻痺者の車いす操作法（自力）
- 第8回 車いす操作・キャスター上げ
- 第9回 各論①片麻痺者の特徴的動作
- 第10回 各論②脊髄損傷（四肢麻痺、対麻痺）者の特徴的動作
- 第11回 各論③関節リウマチ者、人工股関節者の特徴的動作
- 第12回 各論④内科疾患（呼吸器疾患・循環器疾患）のADL
- 第13回 各論⑤切断（下肢、上肢）者の特徴的動作、
- 第14回 各論⑥筋萎縮性疾患（筋ジストロフィー、筋萎縮性側索硬化症）の特徴的動作
神経筋疾患（脊髄小脳変性症、パーキンソン病、多発性硬化症）の特徴的動作
脳性麻痺（児、者）の特徴的動作、高齢者の特徴的動作
- 第15回 トランスファー実技

■ 評価方法

実技試験（40%）、筆記試験（30%）、提出課題（20%）、出席状況（10%無断欠席や遅刻の有無、実習態度も含めて判断する）の結果を総合的に評価する。

■ 教科書

書名：標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学（第4版）

著者名：鶴見隆正編

出版社：医学書院

書名：姿勢と動作 — ADL その基礎から応用まで—（第3版）

著者名：齊藤宏他著

出版社：メヂカルフレンド社

■ 参考書

書名：新版 日常生活活動（ADL）—評価と支援の実際—

著者名：土屋弘吉等

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

復習を行う事。特に、実技に関しては、習得するまで練習するしかない。
実技試験と筆記試験、課題提出を行う。

授業科目	地域理学療法学	担当者	岩田 篤		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

地域医療の成り立ち（歴史）を概観しつつ，そこでの理学療法士の役割や，種々（職種間，施設間）の連携の重要性を整理し，地域での暮らしを支えるに必要な基礎知識について学修する。

■ 目 標

地域医療における理学療法士の役割と方法論，またそれを支えるシステム（制度と社会資源）の重要性について理解することを目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 日本の医療の変遷と医療・福祉の抱える問題
- 第3回 地域リハビリテーションとは何か
- 第4回 地域理学療法とは何か
- 第5回 地域における連携のあり方
- 第6回 介護保険制度の概要
- 第7回 障害者自立支援法とその他地域における社会資源
- 第8回 介護保険制度と理学療法（訪問・通所・入所など）
- 第9回 生活環境の整備
- 第10回 在宅療養者の実際
- 第11回 地域理学療法の実際（ケアマネジメントの方法）
- 第12回 地域理学療法の実際（各論）
- 第13回 演習（在宅復帰例）
- 第14回 演習（施設入所例）
- 第15回 総括

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 教科書

授業ごとに資料を配布します

■ 参考書

- 書名：ビジュアルレクチャー 地域理学療法学
 著者名：浅川育世
 出版社：医歯薬出版
-
- 書名：標準理学療法学専門分野地域理学療法学
 著者名：牧田光代
 出版社：医学書院

■ 留意事項

制度は時代の変遷とともに見直され常に化するものである。特に社会保障関連はここ数年来のトピックスであり，ニュースで取り上げられることも少なくない。皆さんが今後直面する現実問題としてそれらに関心を持ち，積極的にディスカッションに参加することを切に望む。

授業科目	生活環境論	担当者	田中 仁		
学科名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションに関わる生活環境を、患者（利用者）を取り巻く生活地域に視点をおいて考える。

■ 目 標

現在日本における患者（利用者）の在宅環境（家屋、福祉用具等）を、医療保険、介護保険の現行制度を通して、リハビリテーションの視点で理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 地域リハビリテーションと生活環境
- 第2回 行政・制度的環境（社会保障制度について）
- 第3回 行政・制度的環境（医療保険制度について）
- 第4回 行政・制度的環境（介護保険制度について）
- 第5回 行政・制度的環境（介護保険制度について）
- 第6回 福祉・リハビリテーション関連機器（福祉用具について）
- 第7回 福祉・リハビリテーション関連機器（移動関連機器について）
- 第8回 福祉・リハビリテーション関連機器（移乗関連機器について）
- 第9回 福祉・リハビリテーション関連機器（起居関連機器について）
- 第10回 福祉・リハビリテーション関連機器（移乗・起居関連機器について・実技練習）
- 第11回 福祉・リハビリテーション関連機器（床ずれ防止関連用具について）
- 第12回 住宅改修の基礎知識（住宅改修に取り組む姿勢）
- 第13回 住宅改修の基礎知識（住宅改修の進め方）
- 第14回 住宅改修の基礎知識（介護保険における住宅改修等）
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

書 名：六訂 福祉用具専門相談員研修用テキスト
 著者名：社団法人 シルバーサービス振興会
 出版社：中央法規出版株式会社

■ 参 考 書

書 名：生活環境論 第6版 生活支援の視点と方法
 著者名：木村 哲彦 監修
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

授業科目	卒業研究論文	担当者	複数教員		
学科名	理学療法学専攻	学年	4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法に関する研究を通じて、研究手法や現象に対する考察の手順を学ぶ

■ 目 標

研究手法の基礎を理解し、自ら考察する力を養う。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 文献検索の方法：インターネットを利用した論文の検索方法について学ぶ
- 第3～8回 先行研究論文の抄読：各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える
- 第8～11回 研究計画書の作成：規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける
- 第12～22回 研究データを収集する（文献、資料、実験・測定）
- 第23～33回 収集した研究データを整理・解析する：結果をまとめグループ内で発表する
- 第34～40回 得られた結果について考察する：得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する
- 第41～48回 論文を作成する：規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける
- 第49～53回 研究報告会用のプレゼンテーション資料、配付資料を作成する
- 第53～58回 研究報告会：全体で報告会を実施し、他者の発表に対して積極的に質問をする。
- 第59～60回 卒業研究論文を完成させる：研究報告会での質疑応答や指摘をふまえて論文を修正する。

■ 評 価 方 法

出席状況（10%）、研究報告会での発表状況（30%）、卒業研究論文（60%）

■ 教 科 書

■ 参 考 書

- 書 名：入門はじめての統計解析
著者名：石村貞夫
出版社：東京図書

- 書 名：すぐわかる統計解析
著者名：石村貞夫
出版社：東京図書

- 書 名：すぐわかる統計処理の選び方
著者名：石村貞夫・石村光資郎
出版社：東京出版

- 書 名：学生・研究者のための 使える！PowerPoint スライドデザイン 伝わるプレゼン1つの原理と3つの技術
著者名：宮野公樹
出版社：化学同人

- 書 名：これから学会発表する若者のために - ポスターと口頭のプレゼン技術 -
著者名：酒井聡樹
出版社：共立出版

- 書 名：これから論文を書く若者のために
著者名：酒井聡樹
出版社：共立出版

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法概論実習	担当者	榑千磨・伊禮まり子		
学科名	理学療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

専任教員と共に国内医療施設で3日間の見学実習を行う。事前に1日を使いオリエンテーションと演習を行う。また、見学後1日を使用して、演習を実施する。

■ 目 標

現在の国内医療施設における理学療法の概観を理解する。また、障害について実際の対象者様の生活像を理解する。特に理学療法士の仕事を理解することと、対象者様や病院スタッフの方とスムーズにコミュニケーションを取れるようになることが具体的な目標である。

■ 授業計画

実習施設 協力医療機関

実習期間 3日間（前後に1日ずつ学内で演習を行う）

実習形態 協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、患者と直接に対応する。専任教員は学生の臨床現場を観察し、学生の臨床実習に臨む態度などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。

実習の進め方 理学療法概論で学んだ問診、情報収集、評価、運動療法、物理療法などを実際の臨床現場で体験し、理解を深める。実習の進め方は、臨床現場の見学と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教科書

書名：PT 臨床実習ルートマップ

著者名：柳澤健

出版社：メジカルビュー社

■ 参考書

■ 留意事項

臨床現場での学習であるため、事前準備を充分に行い、現場の規則を厳守し、事故がないように努めること。

授業科目	臨床実習Ⅲ	担当者	柳 千磨・伊禮 まり子		
学科名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で1週間の臨床実習を行う。

■ 目 標

対象者の障害について、実際の生活像と共にそれを阻害している機能的な問題の実像を、医療面接、PT見学、観察、触知、検査・測定などを通じて理解する。また、これまでに学習した評価技術の適応にあたって、臨床適応の際の課題について整理する。

■ 授 業 計 画

実習施設 協力医療機関

実習期間 1週間

実習形態 協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、これまでに修得した検査・測定技術を駆使し、対象者様の障害像に迫る。専任教員は学生の臨床実習現場を観察し、学生の学習課題などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。

実習の進め方 理学療法評価学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定、評価をなるべく多く体験する。また、解剖学、生理学、運動学、臨床医学等の知識を基に一人の対象者様に対して適切な機能障害の検査測定項目を選択し的確に実施する。実習の進め方は、臨床現場実習と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評 価 方 法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教 科 書

書 名：PT 臨床実習ルートマップ

著者名：柳澤健

出版社：メジカルビュー社

書 名：症候障害学序説 理学療法の臨床思考過程モデル

著者名：内山 靖

出版社：文光堂

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

臨床実習Ⅲは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	臨床実習Ⅳ	担当者	岩田 篤・柳 千磨		
学科名	理学療法専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で1週間の臨床実習を行う。

■ 目 標

臨床実習指導者の指導の下、理学療法評価プロセスの全体を経験する。具体的には、生活上の問題点を捉えた上で、理学療法評価から機能障害と能力障害との結びつきを明らかにし、問題点の抽出、治療の方向性を理解することが目標である。

■ 授 業 計 画

実習施設 協力医療機関

実習期間 1週間

実習形態 協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、これまでに修得した検査・測定技術を駆使し、対象者様の障害像に迫る。専任教員は学生の臨床実習現場を観察し、学生の学習課題などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。

実習の進め方 臨床医学、理学療法治療学、日常生活活動学の知識を基に評価項目を選択し、理学療法評価学で学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定・評価を実施して機能障害の評価を行う。評価結果を解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法治療学、日常生活活動学などの知識を基に解釈を行い、機能障害と能力障害の結びつきを理解する。そして、問題点を抽出して目標設定を行う。実習の進め方は、実習現場実習と専任教員のフォローを必要に応じて織り交ぜて実施する。

■ 評 価 方 法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教 科 書

書 名：症候障害学序説 理学療法の臨床思考過程モデル

著者名：内山 靖

出版社：文光堂

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

臨床実習Ⅳは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習 I	担当者	藪中 良彦・他		
学科名	理学療法学専攻	学年	3年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で2週間の臨床実習を行う。

■ 目 標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案までのプロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラム立案が行えるようになる。

■ 授 業 計 画

実習施設 近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院

実習期間 2週間

実習形態 臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択・実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を行い、治療プログラムを立案する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。

実習の進め方 解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評 価 方 法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH 枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教 科 書

書 名：PT 臨床実習ルートマップ

著者名：柳澤健

出版社：メジカルビュー社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習 I の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅱ	担当者	藪中 良彦・他		
学科名	理学療法専攻	学年	4年	総単位数	8単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で8週間の臨床実習を行うと共に、途中で1週間の学内演習を行う。

■ 目 標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案、プログラム実施のまでの一連の理学療法プロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定、具体的治療プログラム立案、適切なプログラム実施が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設 近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院

実習期間 8週間＋1週間の学内演習

実習形態 臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択・実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を設定し、治療プログラム立案し、治療プログラム実施する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。また、1週間の学内演習では、4週間の実習のまとめと残り4週間の実習のための準備を専任教員の指導の下実施する。

実習の進め方 解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案し実施する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する

■ 評価方法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH 枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教科書

書名：PT 臨床実習ルートマップ

著者名：柳澤健

出版社：メジカルビュー社

■ 参考書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅱの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅲ	担当者	藪中 良彦・他		
学科名	理学療法専攻	学年	4年	総単位数	8単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で8週間の臨床実習を行うと共に、途中で1週間の学内演習を行う。

■ 目 標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム実施のまでの一連の理学療法プロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定、具体的治療プログラム立案、適切なプログラム実施、治療効果判定に基づく治療プログラムの変更が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設 近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院

実習期間 8週間＋1週間の学内演習

実習形態 臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択・実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を設定し、治療プログラム立案し、治療プログラム実施する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。また、1週間の学内演習では、4週間の実習のまとめと残り4週間の実習のための準備を専任教員の指導の下実施する。

実習の進め方 解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案し実施する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 教科書

書名：PT臨床実習ルートマップ

著者名：柳澤健

出版社：メジカルビュー社

■ 参考書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅲの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	作業療法概論	担当者	平尾 一幸		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションにおいて、作業療法は対象者・児の心身機能の回復を目指すだけでなく、活動性の回復・拡大を通して社会参加の機会を提供する働きかけである。作業療法の基礎となる理論と臨床の実際について学習し、自らの資質を高めることに役立たせる。

■ 目 標

- 1) 作業療法士の活動について知る
- 2) 作業療法の歴史と理論的背景を理解する
- 3) 身体障害、精神障害、老年期障害、発達障害の各領域における医療保健福祉の作業療法活動の実際を学ぶ

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法士の活動内容、職域の紹介
- 第2回 作業療法とは：(社)日本作業療法士協会の定義、関連法規
- 第3回 作業療法の歴史の変遷（道徳療法～作業療法の確立）
- 第4回 作業療法の歴史の変遷（移導療法～作業療法の法制化）
- 第5回 作業療法の現状
- 第6回 国際障害分類（ICF）、チームアプローチ、EBM の概念
- 第7回 作業療法の過程（評価～治療・訓練・支援プログラム立案）
- 第8回 作業療法の実際（身体障害領域の医療）
- 第9回 作業療法の実際（身体障害領域の福祉）
- 第10回 作業療法の実際（精神障害領域の医療）
- 第11回 作業療法の実際（精神障害領域の保健福祉）
- 第12回 作業療法の実際（発達障害領域）
- 第13回 作業療法の実際（老年期障害領域）
- 第14回 作業療法部門の管理運営
- 第15回 作業療法の研究活動

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポートおよび発表 40%、定期試験 60%
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回に付き、事前届出あり：-2点、事前届出なし：-10点）

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 作業療法概論
 著者名：編集：岩崎テル子
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

作業療法士の活動内容を正しく理解し、専門職としての役割と責任を知ってほしい。

授業科目	基礎作業療法学 I	担当者	足立 一		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業分析の方法を講義し、様々な作業分析の演習を行う

■ 目 標

作業活動を構造的に捉え、分析することができること

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
作業とは何か？
作業の分類
- 第2回 工程（行動レベル）分析の演習・方法
- 第3回 目的試行的行為（動作レベル）分析の演習・方法
- 第4回 環境要因の分析
- 第5回 作業分析演習（オリエンテーション）
- 第6回 作業分析演習
- 第7回 作業分析演習
- 第8回 作業分析演習
- 第9回 作業遂行の包括的理解 I
カナダ作業遂行モデル
- 第10回 作業遂行の包括的理解 II
人間作業モデル
- 第11回 作業遂行の包括的理解・演習
- 第12回 創作活動の特性と道具①（陶芸）
- 第13回 創作活動の特性と道具②（木工）
- 第14回 創作活動の特性と道具③（革細工）
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

レポート：50%
小テスト：25% 学習態度：25%（出席状況15%・レポート提出期限10%）

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 専門分野 基礎作業学
著者名：小林夏子 福田恵美子 編集
出版社：医学書院

書 名：つくる・あそぶを治療にいかす 作業活動実習マニュアル
著者名：古川宏 監修
出版社：医歯薬出版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	基礎作業療法学Ⅱ	担当者	平尾 一幸		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

ICFを参考にすれば、心身機能の回復には活動の活性化と社会参加の促進が重要な影響をもつとされる。人間の生活において、作業活動は中心的な意味をもつ。作業活動の科学的理解のため、作業活動分析を中心としたとらえ方を身につける。

■ 目 標

- 1) ライフサイクルと活動について知る
- 2) 作業活動分析の理論的背景を理解する
- 3) 医療・保健・福祉の各領域で応用されている作業療法活動の実際を学ぶ

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業を応用したリハビリテーション活動の内容の紹介
- 第2回 作業活動を科学的にとらえる
- 第3回 作業活動分析の意義
- 第4回 作業活動遂行ということ
- 第5回 作業遂行の理論（生体力学的観点から）
- 第6回 評価演習（作業活動の観察）
- 第7回 作業遂行の理論（精神機能的観点から）
- 第8回 評価演習（対象者の面接）
- 第9回 作業遂行の理論（認知－行動的観点から）
- 第10回 評価演習（検査法の活用）
- 第11回 作業遂行の理論（発達の観点から）
- 第12回 作業遂行の理論（社会学的観点から）
- 第13回 活動の活性化と社会参加：エンパワメント
- 第14回 活動の活性化と社会参加：環境整備
- 第15回 作業活動の研究活動

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポートおよび発表 40%，定期試験 60%
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回につき、事前届出あり：-2点、事前届出なし：-10点）

■ 教 科 書

書名：標準作業療法学 基礎作業学
 著者名：編集：小林夏子、福田美恵子
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

作業療法士の活動内容を正しく理解し、専門職としての役割と責任を知ってほしい。

授業科目	基礎作業療法学Ⅲ	担当者	足立 一		
学科名	作業療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

様々な作業分析の演習を中心に行う
各作業の分析方法や治療的意味、段階付け等について講義を行う

■ 目 標

作業活動を多角的に捉え、分析し、治療的に応用できること

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
工程（行動レベル）・目的試行的行為（動作レベル）分析の演習・方法
- 第2回 運動（身体機能・構造）レベル分析の演習・方法
- 第3回 認知（精神機能）レベル分析の演習・方法
- 第4回 作業分析演習Ⅰ（オリエンテーション）
- 第5回 作業分析演習Ⅰ
- 第6回 作業分析演習Ⅰ
- 第7回 作業分析演習Ⅰ
- 第8回 ニーズからの課題分析の演習・方法
- 第9回 課題分析演習
- 第10回 課題分析演習
- 第11回 治療的応用の演習・方法
- 第12回 治療的応用（身体障害）
- 第13回 治療的応用（精神障害）
- 第14回 治療的応用（知的障害）
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

レポート：70%（形式・内容） 学習態度：30%（出席状況15%・レポート提出期限15%）

■ 教科書

書名：標準作業療法学 専門分野 基礎作業学
著者名：小林夏子 福田恵美子 編集
出版社：医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	基礎作業療法学Ⅳ	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業活動の枠組みを活用した作業活動の提供方法について学ぶ。また、作業を提供する為に必要な準備、提供方法の理解を深める。実際の活動体験（手工芸、芸術活動、スポーツ等）を通して作業活動を対象者に教授する際のポイントを学ぶ。

■ 目 標

作業活動の枠組みを利用した作業活動の提供方法を述べる事が出来る。作業を提供する為に必要な準備ができる。作業の特徴を理解し、対象者に合わせて作業活動を選択し、指導することができる。

■ 授 業 計 画

地域生活をしている知的障害をもつ方のサッカー大会参加までの支援をすることで、対象者に合わせた作業分析、実際の作業の提供方法（段階付け、アダプテーション）を理解し、実施できるようになる。

- 第1回 知的障がい者サッカーについての概説と支援の実際
- 第2回 サッカーの作業分析（サッカーの特徴、練習方法、ルール、コーチングなど）
- 第3回 対象者の観察、個別のサッカー練習の支援①
- 第4回 前回の活動の振り返り、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援②
- 第5回 前回の活動の振り返り、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援③
- 第6回 前回の活動の振り返り、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援④
- 第7回 サッカー練習の構造化、個人の観察評価に基づく段階づけ・アダプテーションの検討①
- 第8回 サッカー練習の構造化、個人の観察評価に基づく段階づけ・アダプテーションの検討②
- 第9回 サッカー練習の運営補助、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援⑤
- 第10回 前回の活動の振り返り、サッカー練習の運営補助、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援⑥
- 第11回 サッカー練習の構造化、個人の観察評価に基づく段階づけ・アダプテーションの検討③
- 第12回 サッカー練習の運営補助、個別のサッカー練習の支援⑦
- 第13回 前回の活動の振り返り、サッカー練習の運営補助、対象者の観察、個別のサッカー練習の支援⑧
- 第14回 サッカー練習の構造化、個人の観察評価に基づく段階づけ・アダプテーションの検討④
- 第15回 サッカー練習全体の作業分析と運営のポイントのまとめ

■ 評 価 方 法

実習形式の授業のため参加が原則です。参加や取り組みに対して配点しますので、欠席の場合はこの部分の点がありません。事前連絡がありかつ届け出がある場合は遅刻・早退-1点、欠席-3点を減点します。また無届けの場合、遅刻・早退-3点、欠席-5点を減点します。やむを得ない事情で欠席・遅刻・早退される場合は考慮します。授業への参加・取り組み方20%、提出物30%、試験レポート50%で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で判断します。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 基礎作業学第2版（2年生の作業療法学Ⅲと同じ教科書です）
 著者名：小林夏子他
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介します

■ 留 意 事 項

授業の日程が変則的になります。また、授業の進み具合等により予定が変更になる場合もあります。事前に連絡しますので注意して下さい。

授業科目	作業療法評価学Ⅰ(概論)	担当者	平尾 一幸		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法過程において、対象者・児の評価は重要である。心身の構造・機能のみでなく、活動や(社会)参加の制約についても理解する。また、個人因子のみでなく生活全般を取り巻く環境についても把握しておく必要がある。この講義では、作業療法の基礎となる評価について学び、自らの知識・技術を高める。

■ 目 標

- 1) 作業療法の評価過程を理解する
- 2) 評価方法について知識を整理し、技術を身につける
- 3) 身体障害、精神障害、老年期障害、発達障害の各領域における評価について学ぶ

■ 授 業 計 画

- 第1回 評価とは：目的、対象、種類
- 第2回 評価過程
- 第3回 観察法
- 第4回 演習：観察法
- 第5回 面接法
- 第6回 演習：面接法
- 第7回 検査法
- 第8回 演習：検査法(身体機能)
- 第9回 演習：検査法(精神機能)
- 第10回 演習：検査法(高次脳機能)
- 第11回 演習：検査法(発達の側面)
- 第12回 演習：検査法(環境的側面)
- 第13回 情報の整理、統合と解釈
- 第14回 記録・報告
- 第15回 情報の管理

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポートおよび発表 40%、定期試験 60%
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象(一回に付き、事前届出あり：-2点、事前届出なし：-10点)

■ 教 科 書

書名：標準作業療法学 作業療法評価学
 著者名：編集：岩崎テル子 他
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

書名：誰でもわかる動作分析
 著者名：小島正義
 出版社：南江堂、2011

■ 留 意 事 項

作業療法活動にとって、対象者・児の評価は基本となる。過程と方法を正しく理解し、適切な知識と技術を身につけてほしい。

授業科目	作業療法評価学Ⅱ (測定と評価)	担当者	清水大輔・島田康雄・弦牧美歩		
学科名	作業療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法評価場面で用いる各種検査・測定にはどのようなものがあるかを知り、その方法を理解する。

■ 目 標

- ①作業療法場面で用いる検査・測定を知る。
- ②作業療法場面で用いる検査・測定を正しい方法で行う。
- ③作業療法場面で用いる検査・測定を正確に実施する。

■ 授 業 計 画

第1回	バイタル測定 (弦牧)	第16回	筋の随意性の見方 (島田)
第2回	バイタル測定 (弦牧)	第17回	筋の随意性の見方 (島田)
第3回	手足の太さや各種測定 (弦牧)	第18回	筋の随意性の見方 (島田)
第4回	手足の太さや各種測定 (弦牧)	第19回	12脳神経の見方 (島田)
第5回	全身の骨を触る (弦牧)	第20回	12脳神経の見方 (島田)
第6回	全身の骨を触る (弦牧)	第21回	感覚障害の見方 (島田)
第7回	関節の動きの測定 (弦牧)	第22回	感覚障害の見方 (島田)
第8回	関節の動きの測定 (弦牧)	第23回	高次脳機能障害の見方 (清水)
第9回	筋力測定の方法 (清水)	第24回	高次脳機能障害の見方 (清水)
第10回	筋力測定の方法 (清水)	第25回	高次脳機能障害の見方 (清水)
第11回	筋力測定の方法 (清水)	第26回	高次脳機能障害の見方 (清水)
第12回	筋力測定の方法 (清水)	第27回	ADL 評価について (島田)
第13回	反射の見方 (弦牧)	第28回	ADL 評価について (島田)
第14回	反射の見方 (弦牧)	第29回	バランスの見方 (清水)
第15回	筋の随意性の見方 (島田)	第30回	バランスの見方 (清水)

■ 評 価 方 法

実技試験・筆記試験にて評価する。配点は実技試験30%、筆記試験70%とするが、いずれの試験も60%以上ないと合格としない。実技試験・筆記試験ともに再試験は実施する。また、遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は-10点、事前連絡のある遅刻・欠席は-5点とする。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学—専門分野 作業療法評価学
 著者名：編集：岩崎テル子他
 出版社：医学書院

書 名：ベッドサイドの神経の診かた
 著者名：田崎義昭
 出版社：南山堂

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	作業療法評価学Ⅲ（評価プロセス）	担当者	辻 郁・橋本 卓也 足立 一・清水 大輔		
学科名	作業療法学専攻	学年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

提示された事例の情報を十分読み込み理解して整理することで、作業療法評価の方法と考え方を学ぶものである。

■ 目 標

提示された事例の

1. 記述内容が理解でき、専門用語が系統的に知識として蓄積できる
2. 情報を生活機能（或いは障害）の階層に分類整理できる
3. 情報の収集法（面接・観察・検査測定など）とその実施方法がわかる
4. 全体像が分かる（情報を統合し解釈できる）
5. 作業療法ニーズが抽出でき、その理由を説明できる
6. 作業療法計画（長期目標・短期目標・具体的なプログラム・判定指標など）が立案できる

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
障害の階層的理解および作業療法評価（講義）
- 第2回 見学実習事例分析（演習により学習とレポート作成）
- 第3回 見学実習事例分析2
- 第4回 見学実習事例分析3
- 第5回 精神障害事例の分析及び統合と解釈（演習）
- 第6回 精神障害事例の分析及び統合と解釈2
- 第7回 精神障害事例の分析及び統合と解釈3
- 第8回 精神障害事例の分析及び統合と解釈4
- 第9回 精神障害事例の分析及び統合と解釈5
- 第10回 精神障害事例の分析及び統合と解釈6
- 第11回 中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈（演習）
- 第12回 中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈2
- 第13回 中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈3
- 第14回 中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈4
- 第15回 中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈5
- 第16回 中枢身体機能障害事例の分析及び統合と解釈6
- 第17回 整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈（演習）
- 第18回 整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈2
- 第19回 整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈3
- 第20回 整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈4
- 第21回 整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈5
- 第22回 整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈6
- 第23回 発達障害事例の分析及び統合と解釈（演習）
- 第24回 発達障害事例の分析及び統合と解釈2
- 第25回 発達障害事例の分析及び統合と解釈3
- 第26回 発達障害事例の分析及び統合と解釈4
- 第27回 発達障害事例の分析及び統合と解釈5
- 第28回 発達障害事例の分析及び統合と解釈6
- 第29回 評価プロセスのまとめ
- 第30回 評価プロセスのまとめ2

■ 評価方法

レポートで評価する

欠席，遅刻，早退は減点対象とする（事前届出なし－10点，届出あり－5点）

■ 教科書

書名： 標準作業療法学 作業療法評価学

著者名： 岩崎テル子 編集

出版社： 医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

他者に説明できるまで，調べて熟考すること 分からないままにしない

授業科目	身体障害治療学 I	担当者	清水 大輔		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体障害に対する作業療法において、基本的な知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を学ぶ。

■ 目 標

1. 基本的な作業療法の考え方がわかる。
2. 疾患に共通した手技ができる。
3. 各疾患ごとの治療の考え方がわかる

■ 授 業 計 画

- 第1回 身体機能作業療法学の基礎 (清水)
- 第2回 身体機能作業療法学の作業療法原理 (清水)
- 第3回 様々な治療手技 (清水)
- 第4回 様々な治療手技 (清水)
- 第5回 身体機能作業療法実践の枠組み (清水)
- 第6回 身体機能作業療法実践の枠組み (清水)
- 第7回 末梢神経系の作業療法 (清水)
- 第8回 末梢神経系の作業療法 (清水)
- 第9回 脊髄損傷の作業療法 (清水)
- 第10回 脊髄損傷の作業療法 (清水)
- 第11回 切断の作業療法 (清水)
- 第12回 切断の作業療法 (清水)
- 第13回 熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法 (清水)
- 第14回 熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法 (清水)
- 第15回 熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法 (清水)

■ 評 価 方 法

実技試験・筆記試験にて評価する。配点は実技試験30%、筆記試験70%とするが、いずれの試験も60%以上ないと合格としない。実技試験・筆記試験ともに再試験は実施する。また、遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は-10点、事前連絡のある遅刻・欠席は-5点とする。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 専門分野 身体機能作業療法学
 著者名：岩崎テル子
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

書 名：標準作業療法学—専門分野 作業療法評価学
 著者名：編集：岩崎テル子他
 出版社：医学書院

.....

書 名：ベッドサイドの神経の診かた
 著者名：田崎義昭
 出版社：南山堂

■ 留 意 事 項

授業科目	身体障害治療学Ⅱ	担当者	島田康雄・弦牧美歩		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体障害に対する作業療法において、基本的な知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を学ぶ。

■ 目 標

1. 基本的な作業療法の考え方がわかる。
2. 疾患に共通した手技ができる。
3. 各疾患ごとの治療の考え方がわかる

■ 授 業 計 画

- 第1回 脳血管障害の作業療法（弦牧）
- 第2回 脳血管障害の作業療法（弦牧）
- 第3回 脳血管障害の作業療法（弦牧）
- 第4回 脳血管障害の作業療法（弦牧）
- 第5回 脳血管障害の作業療法（弦牧）
- 第6回 脳血管障害の作業療法（弦牧）
- 第7回 脳血管障害の作業療法（弦牧）
- 第8回 神経変性疾患の作業療法（島田）
- 第9回 神経変性疾患の作業療法（島田）
- 第10回 慢性関節リウマチの作業療法（弦牧）
- 第11回 慢性関節リウマチの作業療法（島田）
- 第12回 慢性関節リウマチの作業療法（島田）
- 第13回 慢性関節リウマチの作業療法（島田）
- 第14回 慢性関節リウマチの作業療法（島田）
- 第15回 慢性関節リウマチの作業療法（島田）

■ 評 価 方 法

実技試験・筆記試験にて評価する。配点は実技試験30%、筆記試験70%とするが、いずれの試験も60%以上ないと合格としない。実技試験・筆記試験ともに再試験は実施する。また、遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は-10点、事前連絡のある遅刻・欠席は-5点とする。

■ 教 科 書

書名：標準作業療法学 専門分野 身体機能作業療法学
 著者名：岩崎テル子
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

書名：標準作業療法学—専門分野 作業療法評価学
 著者名：編集：岩崎テル子他
 出版社：医学書院

書名：ベッドサイドの神経の診かた
 著者名：田崎義昭
 出版社：南山堂

■ 留 意 事 項

授業科目	身体障害治療学Ⅲ	担当者	清水 大輔		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体障害作業療法において実践に必要な治療手技を習得する。評価から治療計画を立てて、必要に応じて再評価・再計画する方法を学ぶ。

■ 目 標

1. 作業療法における疾患ごとの手技を実践できる
2. 評価から治療プログラムを作成し、実践できる
3. 各疾患ごとの治療の考え方がわかる

■ 授 業 計 画

第1回 骨疾患の作業療法 (清水)	第9回 ターミナルケアの作業療法 (清水)
第2回 骨疾患 (清水)	第10回 ターミナルケアの作業療法 (清水)
第3回 骨疾患 (清水)	第11回 作業療法実践の枠組み (清水)
第4回 骨疾患 (清水)	第12回 作業療法実践の枠組み (清水)
第5回 骨疾患 (清水)	第13回 作業療法実践の枠組み (清水)
第6回 骨疾患 (清水)	第14回 作業療法実践の枠組み (清水)
第7回 神経・筋疾患の作業療法 (清水)	第15回 まとめ (清水)
第8回 神経・筋疾患の作業療法 (清水)	

■ 評 価 方 法

実技試験・筆記試験にて評価する。配点は実技試験30%、筆記試験70%とするが、いずれの試験も60%以上ないと合格としない。実技試験・筆記試験ともに再試験は実施する。また、遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は-10点、事前連絡のある遅刻・欠席は-5点とする。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 専門分野 身体機能作業療法学
 著者名：岩崎テル子
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

書 名：標準作業療法学—専門分野 作業療法評価学
 著者名：編集：岩崎テル子他
 出版社：医学書院

.....

書 名：ベッドサイドの神経の診かた
 著者名：田崎義昭
 出版社：南山堂

■ 留 意 事 項

--

授業科目	精神障害治療学 I	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

精神医学 I・II および精神科リハビリテーション学で学んだことを基本にして、精神障害の治療、リハビリテーションとして作業療法を実施する際の理論・技法について学ぶ。また最近の精神科リハビリテーションの基本的概念である「bio-psycho-social」な捉え方を深め、作業療法を進めるための理論的背景について学ぶ。講義、グループディスカッション、演習、小テストなどの方法を用い学習する。

■ 目 標

- ・精神医療の変遷と作業療法について現在の取組を含め述べるができる
- ・障害に対する「考え方」のモデルの種類と概要を説明することができる
- ・精神障害に対する作業療法の基本的な視点と説明することができる
- ・作業療法の基本的実践論について説明することができる
- ・疾患、障害別作業療法の実際について述べるができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 精神医療の歴史と精神障害をもつ方の参加の制約（精神保健福祉法）
- 第2回 障害に対する考え方のモデルの種類と概要 「bio-psycho-social」な捉え方
- 第3回 脳の機能と作業 発症仮説
- 第4回 認知行動療法 心理教育
- 第5回 ライフサイクルと生活課題について 精神障害をもつ方の現状（障害者総合支援法）
- 第6回 作業療法の治療構造と構成要素
- 第7回 集団作業療法と個人作業療法 作業療法実践の場
- 第8回 作業療法実践のプロセス
- 第9回 評価の方法①
- 第10回 評価の方法②
- 第11回 回復状態に応じた生活支援
- 第12回 統合失調症①
- 第13回 統合失調症②
- 第14回 統合失調症③
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

小テスト30%、提出物10%、試験60%で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で評価します。また、無届けの場合はどのような事情であっても、遅刻・早退-1点、欠席-3点を減点します。届け出があり、やむを得ない事情の場合は考慮します。

■ 教 科 書

- 書 名：作業療法全書改定第3版 第5巻 作業治療学2 精神障害
 著者名：社団法人 日本作業療法士協会 監修
 出版社：協同医書出版社
-
- 書 名：国際生活機能分類 ICF- 国際障害分類改訂版 -
 著者名：世界保健機構（WHO）
 出版社：中央法規

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介します

■ 留 意 事 項

授業の進み具合等により予定が変更になる場合もあります。事前に連絡しますので注意して下さい。

授業科目	精神障害治療学Ⅱ	担当者	吉田 文		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

精神障害治療学Ⅰと同様に、精神科作業療法の評価及び治療、リハビリテーション訓練で使われる諸技能の獲得を目指す。特に、最近臨床で広く取り入れられている心理社会教育プログラムについて理解を深める。

■ 目 標

- ・疾患、障害別作業療法の実際について説明することができる
- ・地域生活支援の実際について説明することができる
- ・司法精神医療における作業療法の概要を述べるすることができる
- ・精神障害作業療法の実践マネジメント、特にリスクマネジメントについて述べるすることができる
- ・精神系作業療法に関連する理論・モデル・技法について述べるすることができる

■ 授 業 計 画

第1回 気分障害①	第9回 アルコール・薬物依存
第2回 気分障害②	第10回 地域生活支援 家族支援
第3回 神経症性障害	第11回 訪問作業療法 ACT
第4回 摂食障害	第12回 就労支援
第5回 パーソナリティ障害	第13回 司法精神医療における作業療法
第6回 児童・思春期の精神障害	第14回 作業療法におけるリスクマネジメント
第7回 器質性精神障害	第15回 理論・モデル・技法 まとめ
第8回 てんかん	

■ 評 価 方 法

小テスト20%、提出物20%、試験60%で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で評価します。また、無届けの場合はどのような事情であっても、遅刻・早退-1点、欠席-3点を減点します。届け出があり、やむを得ない事情の場合は考慮します。

■ 教 科 書

書 名：作業療法全書改定第3版 第5巻 作業治療学2精神障害
 著者名：社団法人 日本作業療法士協会 監修
 出版社：協同医書出版社

書 名：国際生活機能分類 ICF- 国際障害分類改訂版 -
 著者名：世界保健機構 (WHO)
 出版社：中央法規

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介します

■ 留 意 事 項

授業の進み具合等により予定が変更になる場合もあります。事前に連絡しますので注意して下さい。

授業科目	発達障害治療学 I	担当者	小林 哲理		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

発達障害に対する作業療法についての基礎知識と治療理論を説明する。
 作業療法の役割を、施設、地域、家庭など環境に対応させつつ紹介する。
 作業療法の評価と目的について、子どもの生活における遊びや作業課題全般への関わりをもつ視点で学習する。感覚、知覚、認知、行動の発達と障害との相互関係を考慮した治療計画の立て方を演習する。

■ 目 標

発達障害における生活の困難さを理解し、子どもの潜在能力を引き出す作業療法の役割を理解し、他者に説明できる。子どもに必要な遊びや作業が可能になるために必要な評価を説明し、その一部を実施することができる。モデル事例で評価から得られた情報を統合解釈し、治療計画し、他者に説明できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 発達障害治療学 総論
- 第2回 子どもの生活と ICF
- 第3回 発達障害の作業療法に適用する治療理論
- 第4回 作業療法士の役割と実施形態
- 第5回 評価と治療・援助の実践課程① 評価の目的と方法
- 第6回 評価と治療・援助の実践課程② 評価の選択と実施上の留意点
- 第7回 評価と治療・援助の実践課程③ 評価結果の統合と解釈
- 第8回 評価と治療・援助の実践課程④ 説明責任と同意のプロセス
- 第9回 評価と治療・援助の実践課程⑤ 治療・援助方法 発達促進・機能獲得
- 第10回 評価と治療・援助の実践課程⑥ 治療・援助方法 代償・適応
- 第11回 評価と治療・援助の実践課程⑦ 治療・援助方法 環境調整
- 第12回 評価と治療・援助の実践課程⑧ 記録と効果判定
- 第13回 発達過程の基礎知識と治療への応用 ①心身機能の発達
- 第14回 発達過程の基礎知識と治療への応用 ②活動と参加の発達
- 第15回 地域で求められる発達支援と制度の理解

■ 評 価 方 法

試験50% 提出課題30% 演習と授業中の態度20%

■ 教 科 書

作業療法学全書 改訂第3版 6 作業治療学 発達障害 田村良子編集 社団法人日本作業療法士協会
 監修 協同医書出版社

■ 参 考 書

脳性麻痺児の家庭療育 第3版 梶浦一郎監訳、医歯薬出版、
 こどものリハビリテーション医学第2版 陣内一保編集、医学書院 他

■ 留 意 事 項

授業の中で演習を実施する場合があります。動きやすい服装で参加してください。

授業科目	発達障害治療学Ⅱ	担当者	小林 哲理		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

前期で学んだ作業療法の役割、評価と治療計画の作成方法をふまえて、疾患障害年齢別に作業療法における援助技法を学習する。環境設定、活動の選択と段階付け、実際の治療における援助技法、チームアプローチの基本について演習する。

■ 目 標

障害がある子どもの疾患別、年齢別、作業療法の実際について、モデル事例を通して理解する。遊びや作業を可能にする援助技法の基本を習得する。また、簡単な自助具や、家庭や学校生活で実践できるマネジメントプログラムの作成ができ、チームでのアプローチを理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 疾患・障害別作業療法の実際
子どもとして理解すること
- 第2回 脳性麻痺
両麻痺
- 第3回 脳性麻痺
片麻痺
- 第4回 脳性麻痺
アテトーゼ
- 第5回 脳性麻痺
失調
- 第6回 感染性疾患、頭部外傷など
- 第7回 重症心身障害 四肢麻痺
- 第8回 筋ジストロフィー症
- 第9回 骨系統疾患
- 第10回 学習障害
- 第11回 注意欠陥多動性障害
- 第12回 広汎性発達障害（自閉性障害）
- 第13回 知的障害
- 第14回 視覚障害・聴覚障害
- 第15回 演習とまとめ

■ 評 価 方 法

試験50% 提出課題30% 演習と授業中の態度20%

■ 教 科 書

作業療法学全書 改訂第3版 6 作業治療学 発達障害 田村良子編集 社団法人日本作業療法士協会
監修 協同医書出版社

■ 参 考 書

脳性麻痺児の家庭療育 第3版 梶浦一郎監訳、医歯薬出版
こどものリハビリテーション医学第2版 陣内一保編集、医学書院 他

■ 留 意 事 項

授業の中で演習を実施する場合があります。動きやすい服装で参加してください。

授業科目	老年期障害治療学 I	担当者	井口 知也		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

高齢者の加齢による身体的、心理的、社会的な変化や老年期障害に対する評価、治療に関する基礎知識を学ぶ。老年期特有の障害に対する作業療法アプローチの概要やマネジメントを教授する。

■ 目 標

- 1) 高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について理解を深める。
- 2) 高齢者の心身機能、その特性について理解を深める。
- 3) 老年期障害の生活・障害構造、社会資源を理解し、それらに対する具体的援助を考える。

■ 授業計画

- 第1回 高齢社会に伴う諸問題
- 第2回 高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について 1
- 第3回 高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について 2
- 第4回 高齢期の特徴 1
- 第5回 高齢期の特徴 2
- 第6回 介護保険制度
- 第7回 老年期作業療法の実践（基本的枠組み）
- 第8回 老年期作業療法の実践（特定高齢者、一般高齢者について）
- 第9回 老年期障害のマネジメント 1
- 第10回 老年期障害のマネジメント 2
- 第11回 老年期疾患別作業療法（認知症）①
- 第12回 老年期疾患別作業療法（認知症）②
- 第13回 老年期疾患別作業療法（整形疾患）
- 第14回 老年期疾患別作業療法（中枢神経疾患）
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポートおよび発表 40%、定期試験 60%するが、いずれも60%以上ないと合格としない。
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（無断遅刻・無断欠席は-10点、事前連絡のある遅刻・欠席は-5点とする）

■ 教科書

書名：作業療法学全書第7巻 老年期
 著者名：村田 和香 編集
 出版社：協同医書出版社

■ 参 考 書

書 名：老年期障害領域の作業療法

著者名：山田 孝 編集

出版社：中央法規

書 名：作業療法学全書第13巻 地域作業療法学

著者名：太田 睦美 編集

出版社：協同医書出版社

書 名：認知症の作業療法

著者名：小川 敬之, 竹田 徳則 編集

出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

個々の文脈にある人間と生活という視点に立ち、作業の意味をしっかりと捉えること。その上で、高齢者にとっての作業とは何かを考え、生活を支援する者としての作業療法士の役割の意味を吟味してほしい。

授業科目	老年期障害治療学Ⅱ	担当者	井口 知也		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

高齢者の特性に合わせた評価の方法，高齢者に対して使用頻度の高い生活評価，身体機能評価，認知機能評価，心理機能評価の実施方法などについて演習を実施する。評価から得られた情報をもとに全体像を把握する方法を学び，個々の文脈に沿った意味ある作業を提供し実践できる手だてを教授する。

■ 目 標

老年期での作業療法実践に必要な技術の習得を目指す。

■ 授業計画

- 第1回 老年期障害治療学Ⅰの振り返りと老年期障害治療学Ⅱのオリエンテーション
- 第2回 老年期作業療法の実際（プロセス）
- 第3回 老年期作業療法の実際（検査測定）
- 第4回 老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）①
- 第5回 老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）②
- 第6回 入所系サービスにおける作業療法
- 第7回 施設系サービスにおける作業療法
- 第8回 通所，訪問系における作業療法
- 第9回 認知症高齢者に対する事例検討1
- 第10回 認知症高齢者に対する事例検討2
- 第11回 認知症高齢者に対する事例検討3
- 第12回 中枢神経疾患に対する事例検討1
- 第13回 中枢神経疾患に対する事例検討2
- 第14回 中枢神経疾患に対する事例検討3
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポートおよび発表 40%，定期試験 60%
 なお，欠席，遅刻早退は減点対象（一回に付き，事前届出あり：-2点，事前届出なし：-10点）

■ 教科書

書名：作業療法学全書第7巻 老年期
 著者名：村田 和香 編集
 出版社：協同医書出版社

■ 参考書

- 書名：老年期障害領域の作業療法
 著者名：山田 孝 編集
 出版社：中央法規
- 書名：作業療法学全書第13巻 地域作業療法学
 著者名：太田 睦美 編集
 出版社：協同医書出版社
- 書名：認知症の作業療法
 著者名：小川 敬之，竹田 徳則 編集
 出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

個々の文脈にある人間と生活という視点に立ち，作業の意味をしっかりと捉えること。その上で，高齢者にとっての作業とは何かを考え，生活を支援する者としての作業療法士の役割の意味を吟味してほしい。

授業科目	作業療法治療学実習 I	担当者	足立 一		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

教育課程で習得した種々の評価技法を実際の対象者に実施し、身体的・心理的・社会的状況を系統立てて報告する

■ 目 標

- ①対象者に合わせた評価が適切に行えること
- ②情報を整理し、統合することができること
- ③対象者の全体像をレポートにまとめ、報告ができること

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
評価の復習
- 第2回 評価の復習
- 第3回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）の情報公開・評価計画の立案
- 第4回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施①
- 第5回 実習後フィードバック①
- 第6回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施②
- 第7回 実習後フィードバック②
- 第8回 対象者Ⅱ（知的障害者）の情報公開・評価計画の立案
- 第9回 対象者Ⅱ（知的障害者）評価実施①
- 第10回 実習後フィードバック①
- 第11回 対象者Ⅱ（知的障害者）評価実施②
- 第12回 実習後フィードバック②
- 第13回 事例まとめ
- 第14回 事例報告会Ⅰ
- 第15回 事例報告会Ⅱ

■ 評 価 方 法

レポート：50% 報告：30% 実習態度：20%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	作業療法治療学実習Ⅱ	担当者	辻 郁		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

教育課程で習得した種々の評価方法および治療技法を、実際の対象者に実施し、ICFの観点から系統立てて、報告する

■ 目 標

1. 作業療法治療学実習Ⅰで習得した知識・技術をもとに、臨床場面で対象者のニーズに合わせた作業療法案が立案できる
2. 立案した作業療法計画を実践できる
3. 実践結果をフィードバック出来る
4. 上記の実践を報告できる

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
障害特性の学習、情報収集案作成
- 第2回 障害特性の学習、情報収集案作成
- 第3回 情報の分析と統合
- 第4回 情報の分析と統合
- 第5回 作業療法プログラム立案
- 第6回 作業療法プログラム修正・立案
- 第7回 実習フィードバック
- 第8回 事例報告書作成
- 第9回 障害特性の学習、情報収集案作成
- 第10回 情報の分析と統合
- 第11回 作業療法プログラム立案
- 第12回 作業療法プログラム修正・立案
- 第13回 実習フィードバック・事例報告書作成
- 第14回 事例報告
- 第15回 事例報告

■ 評価方法

レポート：50%，報告：30%，取り組み態度：20%（欠席，遅刻早退も評価される）

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	作業療法技術論 I	担当者	平尾 一幸		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

人間の生活において、作業活動は中心的な意味をもつ。対象者・児の心身機能の回復には活動の活性化と社会参加の促進が重要である。作業活動を有用な治療手段として使うために、作業を科学的に分析し、かつ適切に指導する知識・技術を身につける。

■ 目 標

- 1) 様々な作業活動の特性、構造と機能を理解する
- 2) 基本的な作業活動の治療的応用ができる
- 3) 対象者・児に合わせた作業活動の実際を学ぶ

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業活動と生活
- 第2回 演習：自分にとっての作業活動を考える
- 第3回 作業活動には一定の構造と機能がある
- 第4回 演習：例示作業の構造と機能を考える
- 第9回 作業活動の種類
- 第10回 実技演習：創作的作業①
- 第11回 実技演習：構成的作業②
- 第12回 実技演習：構成的作業③
- 第12回 実技演習：創作的作業①
- 第13回 実技演習：創作的作業②
- 第14回 実技演習：創作的作業③
- 第12回 作業活動の治療的応用（身体機能面）
- 第13回 作業活動の治療的応用（精神機能面）
- 第14回 作業活動の治療的応用（ライフサイクルにあわせて）
- 第15回 作業活動の治療的応用まとめ

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポートおよび発表 40%、定期試験 60%
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回に付き、事前届出あり：-2点、事前届出なし：-10点）

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

作業療法士の活動内容を正しく理解し、専門職としての役割と責任を知ってほしい。

授業科目	作業療法技術論Ⅱ	担当者	井口 知也		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、作業療法の支援に必要な面接や観察による情報収集を学び、作業療法評価が実践できる手だてを教授する。また、面接によりクライアントにとっての意味のある作業を明らかにすることや観察により人の日常生活における行動や作業を観察する方法を学び、適切な専門用語を用いて記録・報告する。

■ 目 標

- 1) クライアントにとっての意味のある作業を明らかにする面接手段を身につける。
- 2) 人の日常生活における行動や作業を観察する手段を身につける。
- 3) 面接と観察から得られた情報を適切な専門用語を用いて記録・報告することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法技術論Ⅱのオリエンテーション
- 第2回 作業療法の面接 (COPM)
- 第3回 作業療法の面接 (COPM)
- 第4回 作業遂行の評価 (AMPS)
- 第5回 作業遂行の評価 (AMPS)
- 第6回 作業遂行の評価 (AMPS)
- 第7回 面接と観察の実践①
- 第8回 面接と観察の実践②
- 第9回 面接と観察の実践③
- 第10回 面接と観察の実践④
- 第11回 面接と観察の実践⑤
- 第12回 実践の振り返りと記録・報告方法
- 第13回 実践のレポート作成①
- 第14回 実践のレポート作成②
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

以下の素材と割合で総合的に評価する

レポート 40%, 定期試験 60%するが、いずれも60%以上ないと合格としない。

なお、欠席、遅刻早退は減点対象（無断遅刻・無断欠席は-10点、事前連絡のある遅刻・欠席は-5点とする）

■ 教 科 書

書 名：作業療法がわかる COPM・AMPS スターティングガイド
 著者名：吉川 ひろみ
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	作業療法技術論Ⅲ	担当者	山田 隆人		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、作業療法支援を検討することを目的としている。面接や観察等の作業療法評価を実施し、得られた情報から対象者にとって意味のある作業を明らかにする。さらに、得られた情報から作業遂行上の課題を明らかにする。

■ 目 標

- 1) 対象者にとって意味のある作業を明らかにする面接・観察手段を身につける
- 2) 面接・観察から得られた情報を適切な専門用語を用いて記録できる
- 3) 収集した情報をICFに基づいて整理し、作業遂行上の課題を明らかにする
- 4) 日常生活の遂行における課題を整理できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法での面接 (COPM)
- 第2回 作業療法での面接 (COPM)
- 第3回 作業療法での観察 (AMPS)
- 第4回 作業療法での観察 (AMPS)
- 第5回 作業療法での観察 (AMPS)
- 第6回 日常生活活動の概念
- 第7回 日常生活活動の評価
- 第8回 日常生活活動・起居・移動
- 第9回 日常生活活動・排泄
- 第10回 日常生活活動・食事
- 第11回 日常生活活動・更衣
- 第12回 日常生活活動・入浴
- 第13回 行動分析
- 第14回 行動分析2
- 第15回 行動分析3

■ 評 価 方 法

平常授業での課題3割、定期試験5割、出席状況2割で判定する

■ 教 科 書

書 名：作業療法がわかる COPM・AMPS スターティングガイド
 著者名：吉川ひろみ
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床ゼミナールⅠ	担当者	平尾 一幸		
学科名	作業療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションに関する基本的な概念や制度について理解する。また、リハビリテーション領域で使われる基本的な用語を学ぶ

■ 目 標

- 1) 基礎的なリハビリテーションに関する概念や医療・保健・福祉の制度を理解し整理する
- 2) 臨床で使われるリハビリテーション関連用語を理解し、覚える
- 3) 演習を通して、記録、報告の際に適切な用語が使える

■ 授業計画

- 第1回 健康とは？ リハビリテーション用語の学習①
 第2回 障害とは？ リハビリテーション用語の学習②
 第3回 運動器障害（中枢系） リハビリテーション用語の学習③
 第4回 運動器障害（末梢系） リハビリテーション用語の学習④
 第5回 運動器障害（切断等） リハビリテーション用語の学習⑤
 第6回 精神障害（感情障害） リハビリテーション用語の学習⑥
 第7回 精神障害（統合失調症） リハビリテーション用語の学習⑦
 第8回 精神障害（パニック障害等） リハビリテーション用語の学習⑧
 第9回 発達障害（自閉症等） リハビリテーション用語の学習⑨
 第10回 発達障害（CP等） リハビリテーション用語の学習⑩
 第11回 医療制度 リハビリテーション用語の学⑪
 第12回 保健・行政 リハビリテーション用語の学習⑫
 第13回 福祉制度（介護保険） リハビリテーション用語の学習⑬
 第14回 福祉制度（総合福祉法） 演習：用語を使ったレポート作成
 第15回 リハビリテーションとICF 演習：用語を使ったレポート作成

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 小テスト、レポートおよび発表 60%，定期試験 40%
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回につき、事前届出あり：-2点、事前届出なし：-10点）

■ 教科書

書名：リハビリテーション用語解説 ポケットブック
 著者名：梅田悦生、梅田絃子
 出版社：診断と治療社

■ 参考書

■ 留意事項

作業療法士の活動内容を正しく理解し、専門職としての役割と責任を知ってほしい。

授業科目	臨床ゼミナールⅡ	担当者	吉田 文		
学科名	作業療法学専攻	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

これまでに学んだ作業療法評価学、臨床見学実習等の内容について、臨床例に結びつけながら理解を深める。主には症例報告または障がい当事者との地域生活支援体験を取り上げ、提示される作業療法の実際を深く理解するために、体験を振り返り情報を十分読み込み、グループ学習、ディスカッション、ロールプレイ等の演習を通じた学習を行う。

■ 目 標

論文または障がい当事者との地域生活支援体験から作業療法評価に必要な情報を収集しまとめることができる。地域生活を送る障がい当事者の実際の生活を理解し、必要な作業療法支援を考える事が出来る。学習した内容をレポートにまとめ、的確に他者に伝える事が出来る。

■ 授業計画

基礎作業療法学Ⅳと連動し、地域で生活する知的障がいの方の余暇活動・イベント参加（サッカー大会参加）を通して、地域生活の中で個人の作業の意味と活動制限・参加制約を知り、その評価方法と作業療法支援について考える。

- 第1回 知的障がいについて、知的障がいがある方の生活について
- 第2回 記録の書き方について復習
- 第3回 知的障がい者サッカー練習の観察および記録①
- 第4回 知的障がい者サッカー練習の観察および記録②
- 第5回 知的障がい者サッカー練習の観察および記録③
- 第6回 知的障がい者サッカー練習の観察および記録④
- 第7回 記録から対象者の障害を考察する①
- 第8回 記録から対象者・スタッフに情報収集することを検討する①
- 第9回 知的障がい者サッカー練習の観察および記録⑤
- 第10回 知的障がい者サッカー練習の観察および記録⑥
- 第11回 記録から対象者の障害を考察する② 対象者・スタッフに情報収集することを検討する②
- 第12回 知的障がい者サッカー練習の観察および記録⑦
- 第13回 知的障がい者サッカー練習の観察および記録⑧
- 第14回 記録から対象者の障害を考察する③
- 第15回 記録から対象者の障害を考察する④

■ 評価方法

実習形式の授業のため参加が原則です。参加や取り組みに対して配点しますので、欠席の場合はこの部分の点がありません。事前連絡がありかつ届け出がある場合は遅刻・早退-1点、欠席-3点を減点します。また無届けの場合、遅刻・早退-3点、欠席-5点を減点します。やむを得ない事情で欠席・遅刻・早退される場合は考慮します。授業への参加・取り組み20%、提出物30%、試験レポート50%で総合的に評価します。再試験においては、試験のみの点数で判断します。

■ 教科書

書名：国際生活機能分類 ICF- 国際障害分類改訂版 -
 著者名：世界保健機構（WHO）
 出版社：中央法規

■ 参考書

授業中に適宜紹介します

■ 留意事項

授業の日程が変則的になります。また、授業の進み具合等により予定が変更になる場合もあります。事前に連絡しますので注意して下さい。

授業科目	臨床ゼミナールⅢ	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

専門基礎科目及び作業療法評価学、作業療法治療学等専門科目で学んだことを基盤とする。人の生活機能（障害）を構造的に捉えることを習得するため、事例報告、ライブケースからの情報収集を行い、ICFに沿って事例分析及び統合を行い、その結果を報告する。

■ 目 標

1. 事例を読み込んでICFに沿って分析と統合を行い、報告する
2. 作業療法治療学実習Ⅰのライブケースから得た情報をICFに沿って統合し、報告する

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
ICF 確認テスト、事例紹介、エッセイ紹介、分析事例の決定
- 第2回 ICFについて
事例①の分析
- 第3回 事例①の分析
レポート提出
- 第4回 ライブケースⅠの分析
- 第5回 ライブケースⅠに関連する病理・解剖・生理に関する学習
- 第6回 ライブケースⅠの分析
- 第7回 ライブケースⅠ 事例報告書作成
- 第8回 ライブケースⅡの分析
- 第9回 ライブケースⅡの分析
- 第10回 ライブケースⅡに関連する病理・解剖・生理に関する学習
- 第11回 ライブケースⅡの分析
- 第12回 ライブケースⅡ 事例報告書作成
- 第13回 ライブケースⅠ、Ⅱ 病理・解剖・生理に関する学習
- 第14回 ライブケースⅠ、Ⅱ 事例報告書作成
- 第15回 ライブケースⅠ、Ⅱ 事例報告書作成

■ 評 価 方 法

ポートフォリオ：30% レポート：40% 報告とディスカッション：30%
欠席、遅刻・早退は減点の対象（一回につき、事前届出なし：-10点、事前届出あり：-2点）

■ 教 科 書

書 名：国際生活機能分類 ―国際障害分類改訂版―
著者名：世界保健機関（WHO）
出版社：中央法規

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

これまでの学習内容が実践への橋渡しとなるよう、自ら積極的に取り組むこと
自ら取り組むことで、学習の楽しさや作業療法の面白さ、大切さが実感できることを期待する※1 評価方法について

授業科目	臨床ゼミナールⅣ	担当者	平尾 一幸		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法の基本的な評価、プログラム立案、治療実施について具体的なモデルケースを通して学び、臨床実習に向けて準備する

■ 目 標

- 1) 臨床実習に必要な基本的知識・技術を復習し整理する
- 2) 臨床に必要な評価過程を理解し、適切な方法が選択・実施できる使われる
- 3) 実習で、記録、報告の際に適切な用語が使える

■ 授業計画

- 第1回 臨床実習の位置づけ
- 第2回 臨床実習で学習する内容と目標
- 第3回 臨床実習の進め方（身体障害系）
- 第4回 臨床実習の進め方（精神障害系）
- 第5回 臨床実習の進め方（老年期障害系）
- 第6回 ケーススタディの書き方（身体障害系①）
- 第7回 ケーススタディの書き方（身体障害系②）
- 第8回 ケーススタディの書き方（精神障害系①）
- 第9回 ケーススタディの書き方（精神障害系②）
- 第10回 ケーススタディの書き方（老年期障害系）
- 第11回 演習：用語を使ったレポート作成①
- 第12回 演習：用語を使ったレポート作成②
- 第13回 演習：用語を使ったレポート作成③
- 第14回 演習：用語を使ったレポート作成④
- 第15回 演習：用語を使ったレポート作成⑤

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 グループ討議取り組み 20%、発表点 20%、レポート 60%
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回につき、事前届出あり：-2点、事前届出なし：-10点）

■ 教科書

書名：標準作業療法学 作業療法臨床実習とケーススタディ
 著者名：編集 市川和子
 出版社：医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

臨床実習に向けて、作業療法モデルケースをしっかりと学び、適切な用語・表現でレポートが書けるようになってほしい

授業科目	在宅ケア論	担当者	山田 隆人		
学科名	作業療法学専攻	学年	4年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法支援は、対象となる方々が居住する地域やその住民へ働きかける場合がある。本講義では、障がいを持ち在宅で暮らすことを支援することに着目する。障害を持ち暮らす方々の事例を基に評価および支援方法を検討する。加えて、学んだ内容をプレゼンテーションを行う。

■ 目 標

- ①障がいを持ち在宅で暮らすことの評価する視点を持つ
- ②障がいを持ち在宅で暮らす方々の支援方法を検討できる
- ③学んだ内容をまとめ、わかりやすいプレゼンテーションを行うことができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 在宅で暮らしを支援する自立支援法・介護保険法の制度を学ぶ
- 第2回 現場で活躍しているケアマネジャーの実践の話聞き、ケアマネジメントを理解する
- 第3回 事例Aを題材に、グループ毎にケアマネジメントの概略を理解する
- 第4回 事例Aを題材に、グループ毎にアセスメント内容を確認し、ICFの分類に応じて整理する
- 第5回 事例Aを題材に、グループ毎に在宅生活を送る上での課題を整理する
- 第6回 事例Aを題材に、グループ毎に在宅生活を送る上での課題を解決して行くための手段を検討する
- 第7回 事例Bを題材に、個人でマネジメントを行う上で必要な情報を整理する
- 第8回 事例Bを題材に、個人で得られた情報を基に、在宅生活を送る上での情報をICFに基づいて整理する
- 第9回 事例Bを題材に、個人で得られた情報を基に、在宅生活を送る上での課題を挙げ、その因果関係を整理する
- 第10回 事例Bを題材に、在宅生活を送る上での課題を解決しする為の方法を検討し、支援計画を立案する
- 第11回 事例Bを題材に、在宅生活を送る上での課題を解決しする為の方法を検討し、支援計画を立案する2
- 第12回 計画した支援計画のプレゼンテーション
- 第13回 トピックス1：介助犬利用者の生活の実際・介助犬利用者を講師にお招きします
- 第14回 トピックス2：介助犬トレーナーの仕事と作業療法との関係・介助犬トレーナーを講師にお招きします
- 第15回 トピックス3：介助犬について学んだ内容をまとめて発表します

■ 評 価 方 法

■ 教 科 書

■ 参 考 書

書名：改訂 新・居宅サービス計画ガイドライン
 著者名：在宅版ケアプラン作成方法検討委員会
 出版社：社会福祉法人 全国社会福祉協議会

■ 留 意 事 項

授業科目	地域作業療法学Ⅰ	担当者	橋本 卓也		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

さまざまなニーズをもつ障害児・者や高齢者等が地域社会の中で“いきいき”と、そして質の高い生活を送ることができるために作業療法士は何を提供することができるのか？彼（彼女）らの豊かな生活を支えるために必要な作業療法の機能・役割について学ぶ。また、ライフステージにおける生活の変化と、それらに対応した法制度等とを関連づけながら地域作業療法についての考察を深める。

■ 目 標

- ①地域作業療法の理念や目的を理解する
- ②ライフステージ及び障害等に起因する生活の変化に応じた地域作業療法の実践を理解する
- ③ライフステージの変化や障害児・者の希求する生活に応じた関連法制度を理解する
- ④地域作業療法展開過程における他職種・他機関との連携について理解する

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
地域リハビリテーションおよび地域作業療法について（歴史・理念および目的）
- 第2回 地域で生活することの意味（作業療法の視点から捉えた『地域』とは、『生活』とは）
個と環境の相互作用における生活の変化について
- 第3回 ライフステージごとの生活特性と健康・生活ニーズ（Ⅰ）
- 第4回 ライフステージごとの生活特性と健康・生活ニーズ（Ⅱ）
- 第5回 地域において作業療法の対象となる人たち及びその人たちに対する支援の視点
（発達期：就学前）
- 第6回 地域において作業療法の対象となる人たち及びその人たちに対する支援の視点
（発達期：就学後～青年期）
- 第7回 地域において作業療法の対象となる人たち及びその人たちに対する支援の視点
（成人期）
- 第8回 地域において作業療法の対象となる人たち及びその人たちに対する支援の視点
（成人期：就労支援について）
- 第9回 地域において作業療法の対象となる人たち及びその人たちに対する支援の視点
（老年期）
- 第10回 地域において作業療法の対象となる人たち及びその人たちに対する支援の視点
（ターミナル期）
- 第11回 地域作業療法における評価の視点（Ⅰ）
- 第12回 地域作業療法における評価の視点（Ⅱ）
- 第13回 地域作業療法を支える法制度・施策（Ⅰ）
- 第14回 地域作業療法を支える法制度・施策（Ⅱ）
- 第15回 地域作業療法における連携とチームアプローチについて

■ 評 価 方 法

定期試験 60%
レポート 40% その他、出欠状況・授業中の態度等を加味し総合的に評価する

■ 教 科 書

--

■ 参 考 書

書 名：地域作業療法学（作業療法学全書 第13巻）

著者名：太田睦美 編著

出版社：協同医書出版社

書 名：地域作業療法学（標準作業療法学 専門分野）

著者名：小川恵子 編集

出版社：医学書院

書 名：作業療法が関わる医療保険・介護保険・自立支援制度の手引き

著者名：日本作業療法士協会

出版社：日本作業療法士協会

■ 留 意 事 項

授業への積極的な参加を望む

授業科目	地域作業療法学Ⅱ	担当者	橋本 卓也		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

人々の生活の環境因子としての地域概況から医療・保健・福祉等に関する情報を把握し、作業療法の視点から地域の健康・生活ニーズを推測するとともに、その解決方法を考察する

■ 目 標

- ①既存のデータや現地調査等から地域の人々の健康・生活ニーズを推測できる
- ②導きだされた健康・生活ニーズに対して作業療法の視点から解決に向けた計画が立案できる
- ③地域作業療法（狭義および広義）の全体像が理解できる

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
既存のデータ等から地域の医療・保健・福祉等に関する情報収集の視点を整理する
- 第2回 既存のデータや現地調査等から地域の医療・保健・福祉等に関する情報を収集する（1）
- 第3回 既存のデータや現地調査等から地域の医療・保健・福祉等に関する情報を収集する（2）
- 第4回 情報の整理と統合（報告会資料準備含む）
- 第5回 情報収集に関する報告会
- 第6回 地域の健康・生活ニーズアセスメント及びニーズ解決に向けた計画立案の留意点
- 第7回 収集した情報から健康・生活ニーズを抽出する
- 第8回 地域の健康・生活ニーズ解決に向けた地域作業療法実践（事例紹介）
- 第9回 健康・生活ニーズ及びニーズ解決に向けた計画案の作成
- 第10回 健康・生活ニーズ及びニーズ解決に向けた計画案の報告（1）
- 第11回 健康・生活ニーズ及びニーズ解決に向けた計画案の報告（2）
- 第12回 事例検討会（グループワーク）（1）
- 第13回 事例検討会（グループワーク）（2）
- 第14回 事例検討会（グループワーク）（3）
- 第15回 地域作業療法学のまとめ（キーワードで確認する地域作業療法）

■ 評価方法

定期試験 50%
レポート 50% その他、発表態度・授業に対する姿勢等を加味し総合的に評価する

■ 教科書

■ 参考書

書名：地域に根ざした作業療法
著者名：Marjorie E.Scaffa（編著） 山田孝（監訳）
出版社：協同医書出版社

書名：障害者白書（平成24年版）
著者名：内閣府
出版社：佐伯印刷

書名：高齢社会白書（平成24年版）
著者名：内閣府
出版社：印刷通販

■ 留意事項

授業への積極的な参加を望む

授業科目	地域作業療法学実習	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

地域社会で暮らす障害者との交流を通して、彼らの生活を理解することに努め、地域社会での作業療法士の役割を探ることを目的に、①地域の福祉施設に出向き、施設の協力の下、施設プログラムに参加し、利用者との交流を経験する。②大学内でその経験を統合し、報告する。

■ 目 標

①施設のプログラムに参加し、複数の利用者との交流できる ②利用者について得られた情報を整理して記録できる ③情報を統合して全体像を掴める ④ニーズに応じた作業療法プログラムを企画運営できる ⑤一連の実習経験を統合し、報告できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
施設情報の収集
- 第2回 実習① プログラムへの参加, 利用者との交流, 情報収集
- 第3回 実習① プログラムへの参加, 利用者との交流, 情報収集
- 第4回 実習② プログラムへの参加, 利用者との交流, 情報収集-2
- 第5回 実習② プログラムへの参加, 利用者との交流, 情報収集-2
- 第6回 作業療法プログラムの立案
- 第7回 実習③ プログラムへの参加, 利用者との交流, プログラム案提示
- 第8回 実習③ プログラムへの参加, 利用者との交流, プログラム案提示
- 第9回 実習③ プログラムへの参加, 利用者との交流, プログラム案提示
- 第10回 実習④ プログラムの運営, 利用者との交流
- 第11回 実習④ プログラムの運営, 利用者との交流
- 第12回 実習④ プログラムの運営, 利用者との交流
- 第13回 記録, まとめ
- 第14回 フィードバック, 報告準備
- 第15回 実習報告

■ 評 価 方 法

①実習施設での取り組み態度 (30%), ②記録内容 (40%), ③報告内容 (30%)
提出物の提出遅れ, 欠席, 遅刻早退は減点事項である

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

施設のプログラム運営の妨げにならないように注意すること, 積極的な態度で取り組むこと, 作業療法プログラムは意図を持った自由な発想で企画すること

授業科目	日常生活活動学	担当者	山田 隆人		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、ICFにおける活動および参加への支援を検討するための情報収集および収集した情報から作業療法支援の方向性を検討する過程を学ぶ。具体的には、日常生活を遂行する上での動作を分析すること、得られた情報から支援する方法論を学ぶ。生理・生態学的支援に関しては、他の治療学にて実施する。本講義では、環境による支援方法の理解を深める。

■ 目 標

- 1) 動作分析により、作業を遂行する上での課題を明らかにできる
- 2) 作業遂行上の問題を整理し、支援の方針を明らかにできる
- 3) 環境による支援方法を検討できる

■ 授 業 計 画

第1回 ADLの評価の視点	第9回 支援の方向性と支援方法
第2回 姿勢の分析	第10回 環境による支援方法・福祉用具1
第3回 生活動作の分析	第11回 環境による支援方法・福祉用具2
第4回 生活動作の分析2	第12回 環境による支援方法・居住環境1
第5回 生活動作の分析3	第13回 環境による支援方法・居住環境2
第6回 事例紹介A	第14回 環境による支援方法・社会制度1
第7回 事例検討1	第15回 環境による支援方法・社会制度2
第8回 事例検討2	

■ 評 価 方 法

出席状況2割、講義における成果物7割

■ 教 科 書

書名：作業療法技術学3 日常生活活動
 著者名：日本作業療法士協会 監修
 出版社：協同医書出版

書名：“作業”の捉え方と評価・支援技術
 著者名：社団法人 日本作業療法士協会 監修
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

書名：COPM・AMPS スターティングガイド
 著者名：吉川ひろみ
 出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

--

授業科目	卒業研究論文	担当者	複数教員		
学科名	作業療法学専攻	学年	4年	総単位数	3単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法領域における具体的なテーマを設定し、研究計画を立て、それに沿って必要な情報や資料を収集し、整理し、結果を導き出す。研究の基本的手法を学ぶ。その集大成を卒業論文として完成させる。研究の結果を報告する。

■ 目 標

作業療法における問題を科学的根拠に基づいて解決する姿勢と能力を高める
論文を完成させる

■ 授 業 計 画

ゼミ単位で進行する
 オリエンテーション
 研究テーマの決定 / 先行研究論文の抄読
 研究計画書の作成
 研究データの収集
 収集したデータの整理・解析
 結果についての考察
 卒業研究論文の作成
 報告用資料の作成
 研究報告会

■ 評 価 方 法

卒業研究論文 50%
 報告内容・発表状況 20%
 ゼミでの討論・進行態度 30%

■ 教 科 書

--

■ 参 考 書

--

■ 留 意 事 項

--

授業科目	臨床見学実習	担当者	山田隆人・井口知也		
学科名	作業療法学専攻	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など
2. 実習期間：1施設で5日間の見学実習
3. 実習形態：学生は1～3名で臨床実習指導者の指導体制のもと見学実習を行う
4. 実習前学習と実習後のまとめと報告会を行う

■ 目 標

1. 作業療法の実施状況を観察し，記録できる
2. リハビリテーションの流れとその中の作業療法（士）の役割を理解する
3. 作業療法士を目指す学生として適切な取り組みができる

■ 授業計画

- ・ 事前学習課題
- ・ 事前学習課題へのフィードバック
- ・ 実習前技能演習1 臨床見学実習に必要な技能の練習を行う
- ・ 実習前技能演習2 臨床見学実習に必要な技能の練習を行う
- ・ 臨床見学実習 実習施設において，5日間の臨床見学実習を行う
- ・ 臨床見学実習のまとめ 実習施設において学んできたことを整理し，理解を深める
- ・ 臨床見学実習報告会 臨床見学実習で学んだことやフィードバックの内容をまとめて報告する

■ 評価方法

実習への取り組み態度：30%，学内の事前・事後学習への取り組み態度：40%，提出物と報告内容：30%

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

本科目は11月より開始し，見学実習は2月に予定している
 実習は対象者と実習施設のご好意により行われるため，感謝を礼儀を忘れないこと
 実習施設における実習期間のうち，5分の4以上の出席が必要であるため，健康に留意すること
 本科目全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として本実習は中止とする

授業科目	評価学実習	担当者	作業療法学専攻教員		
学科名	作業療法学専攻	学年	3年	総単位数	3単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 実習施設 : 一般病院, リハビリテーション病院, 介護老人保健施設など
2. 実習期間 : 臨床現場での実習は3週間
3. 実習形態 : 臨床実習指導者1人と学生1~2名体制
4. 専任教員による実習施設訪問 : 3週間の実習期間中に少なくとも1回は巡回訪問し, 実習指導者, 学生との三者でより良い実習に向けた協議の時間を持つ

■ 目 標

病院や施設などにおいて, 作業療法士の指導のもとで作業療法評価を実践する
 作業療法評価計画を立案し, 面接, 観察, 必要な検査測定などから情報を得る
 情報を正確に記録する
 得られた情報を統合し, 障害構造を明らかにする
 作業療法目標を設定し, 作業療法プログラムを立案する
 学内で, 上記の実践をさらに統合し, 報告会を通じて情報を共有する

■ 授業計画

- ・事前学習課題
- ・事前学習課題へのフィードバック
- ・実習前技能演習1 臨床見学実習に必要な技能の練習を行う
- ・実習前技能演習2 臨床見学実習に必要な技能の練習を行う
- ・臨床見学実習 実習施設において, 5日間の臨床見学実習を行う
- ・臨床見学実習のまとめ 実習施設において学んできたことを整理し, 理解を深める
- ・臨床見学実習報告会 臨床見学実習で学んだことやフィードバックの内容をまとめて報告する

■ 評価方法

実習への取り組み態度: 50%, 学内の事前・事後学習への取り組み態度: 25%, 提出物と報告内容: 25%

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

本科目は11月より開始し, 見学実習は2月に予定している
 実習は対象者と実習施設のご好意により行われるため, 感謝を礼儀を忘れないこと
 実習施設における実習期間のうち, 5分の4以上の出席が必要であるため, 健康に留意すること
 本科目全体を通して, 身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合, また, 無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として本実習は中止とする

授業科目	総合臨床実習 I	担当者	作業療法学専攻教員		
学科名	作業療法学専攻	学年	4年	総単位数	9単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

近畿圏を中心とした一般病院、リハビリテーション施設へ9週間の実習を行う。本学における各実習担当教員により、実習3週間ごとに本学にて1週間計3回の学内指導と実習前半と後半の計2回の巡回訪問指導を行う。

■ 目 標

教育課程で習得した知識と技術を、臨床実習指導者の指導の下で、作業療法臨床場面において活用し、対象者（児）のニーズにあわせた治療・訓練・練習・援助ができること。

■ 授 業 計 画

- ・オリエンテーション 事前学習（学内）
- ・実習開始 施設見学 担当事例紹介
- ・担当事例初期評価
- ・担当事例初期評価レポート作成（学内）
- ・担当事例初期評価レポート作成（学内）
担当事例治療計画検討・開始
- ・担当事例中間報告
- ・担当事例最終評価
- ・担当事例治療経過のまとめ（学内）
- ・担当事例治療経過のまとめ（学内）
- ・担当事例最終評価
- ・ケース会議での担当事例治療報告
- ・担当事例報告書作成（学内）
- ・担当事例報告書作成（学内）
- ・実践報告・ディスカッション（学内）

■ 評 価 方 法

学外評価と学内評価の合計点で判定する

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	総合臨床実習Ⅱ	担当者	作業療法学専攻教員		
学科名	作業療法学専攻	学年	4年	総単位数	9単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

近畿圏を中心とした一般病院、リハビリテーション施設へ9週間の実習を行う。本学における各実習担当教員により、実習3週間ごとに本学にて1週間計3回の学内指導と実習前半と後半の計2回の巡回訪問指導を行う。

■ 目 標

教育課程で習得した知識と技術を、臨床実習指導者の指導の下で、作業療法臨床場面において活用し、対象者（児）のニーズにあわせた治療・訓練・練習・援助ができること。

■ 授 業 計 画

- ・オリエンテーション 事前学習（学内）
- ・実習開始 施設見学 担当事例紹介
- ・担当事例初期評価
- ・担当事例初期評価レポート作成（学内）
- ・担当事例初期評価レポート作成（学内）
担当事例治療計画検討・開始
- ・担当事例中間報告
- ・担当事例最終評価
- ・担当事例治療経過のまとめ（学内）
- ・担当事例治療経過のまとめ（学内）
- ・担当事例最終評価
- ・ケース会議での担当事例治療報告
- ・担当事例報告書作成（学内）
- ・担当事例報告書作成（学内）
- ・実践報告・ディスカッション（学内）

■ 評 価 方 法

学外評価と学内評価の合計点で判定する

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	医学総論	担当者	板倉徹・板倉登志子 松井理直・山本永人 ほか		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な医学的知識について学ぶ。

■ 目 標

言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 専門基礎分野 解剖学・生理学・病理学 (板倉徹)
- 第2回 専門基礎分野 臨床神経学・新家系医学 (板倉徹)
- 第3回 専門基礎分野 音響学 (松井理直)
- 第4回 専門基礎分野 音響学 (松井理直)
- 第5回 専門基礎分野 音声学 (松井理直)
- 第6回 専門基礎分野 音声学 (松井理直)
- 第7回 専門基礎分野 言語学 (松井理直)
- 第8回 専門基礎分野 言語学 (松井理直)
- 第9回 専門基礎分野 学習認知心理学 (講師非公表)
- 第10回 専門基礎分野 学習認知心理学 (講師非公表)
- 第11回 専門基礎分野 社会福祉制度 (山本永人)
- 第12回 専門基礎分野 障害者のサービス (山本永人)
- 第13回 専門分野 失語・高次脳機能障害 (板倉登志子)
- 第14回 専門分野 失語・高次脳機能障害 (板倉登志子)
- 第15回 専門分野 失語・高次脳機能障害 (吉機俊雄)

■ 評 価 方 法

試験100% (200点満点の試験を2回実施、問題は五者択一形式)

■ 教 科 書

書名：言語聴覚士テキスト
 著者名：廣瀬肇 監修
 出版社：医歯薬出版

■ 参 考 書

書名：言語聴覚士のための基礎知識 (シリーズ各本)
 著者名：医学書院

 書名：標準言語聴覚障害学 (シリーズ各本)
 著者名：医学書院

 書名：言語聴覚療法シリーズ改訂版 (シリーズ各本)
 著者名：建帛社

■ 留 意 事 項

授業科目	解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

頭・頸部の解剖学的な構造を学び、言語聴覚領域の学習の礎とする。

■ 目 標

■ 授 業 計 画

- 第1回 神経系 I
 1. 神経系の構成 2. 中枢神経系とは 3. 脊髄 4. 延髄と橋 5. 中脳
 6. 小脳
- 第2回 神経系 II
 1. 間脳（視床と視床下部） 2. 大脳（大脳皮質、大脳基底核、大脳白質）
- 第3回 脳神経
 1. 脳神経の概略 2. 脳神経（三叉神経、顔面神経、内耳神経、舌咽神経、迷走神経、舌下神経）
- 第4回 脳室系と脳の血管
 1. 脳室 2. 髄膜（硬膜、クモ膜、軟膜） 3. 脳脊髄液
 4. 脳の血管（内頸動脈とその枝、椎骨動脈とその枝、ウイリス動脈輪、硬膜静脈洞）
- 第5回 顔面と口腔の解剖
 1. 口蓋 2. 口腔底 3. 舌と味蕾 4. 舌の発生 5. 咀嚼筋
 6. 嚥下に働く筋
- 第6回 喉頭の解剖と
 1. 舌骨と喉頭の軟骨 2. 声帯靭帯と声帯ヒダ 3. 声門 4. 喉頭の筋
 5. 喉頭の神経
- 第7回 平衡・聴覚器の解剖
 1. 外耳・中耳・内耳の構造 2. 聴覚と平衡覚の伝導路と反射路
- 第8回 三層性胚盤および鰓弓と総復習
 1. 三層性胚盤 2. 鰓弓 3. 鰓弓由来の筋とその支配神経

■ 評価方法

定期試験 100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	生理学	担当者	宮井 潔		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

生理学は人体機能のしくみを知る基礎的な学問であるが、かなり範囲が広く深いので、各項目ごとにできるだけ基本的な考え方や重点事項を解説する

■ 目 標

各分野において、それぞれ基礎となる解剖学と、臨床医学特に内科学との関連づけを理解するように努める

■ 授 業 計 画

- 第1回 細胞と内部環境
- 第2回 血液・生体防御
- 第3回 循環系
小テストと解説
- 第4回 呼吸機能
- 第5回 消化と吸収
- 第6回 胃臓と排泄
- 第7回 酸・塩基手衡
- 第8回 内分泌・代謝

■ 評 価 方 法

筆記試験95% 筆記小テスト5%

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法・作業療法専門分野 生理学
 著者名：石澤光郎、富永淳
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

書 名：スタンダード生理学
 著者名：二宮石雄、安藤啓司、彼末一之、木川寛二
 出版社：文光堂

■ 留 意 事 項

講義では重点のみ（主としてキーワードの説明）述べるので、それをもとに教科書などでしっかり自習してほしい

授業科目	病理学	担当者	橋本 和明		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

疾患の原因は内因と外因に大別される。内因として遺伝+免疫などがあり、外因として種々の要因がある。その結果、人体は下記1～8の変化を示す。これらの各項目について講義を行う。

■ 目 標

病気の成り立ちや仕組みを追求する病理学を学ぶことによって、患者の持つ種々の障害の本質の理解を深め、障害とそれに対する治療・リハビリテーションの考察・理解がより深く行えるようになることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 退行性病変
- 第2回 進行性病変
- 第3回 奇形を含む先天異常
- 第4回 炎症アレルギー
- 第5回 循環障害
- 第6回 腫瘍
- 第7回 腫瘍
- 第8回 外傷性変化等

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学・作業療法学基礎分野 病理学 第3版
 著者名：梶原 博毅／横井 豊治 編集
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	内科学 (老年医学含む)	担当者	宮井 潔		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

まず健常人の解剖・生理・生化学の基礎知識を簡単に復讐してそれを把握した上で、内科学の総論・各論の全領域にわたる基礎的な重要項目について臨床現場での経験も交えて講義する。

■ 目 標

内科学は臨床医学の基礎であるが、その範囲は余りにも広く、内容も深いため短期間でそのすべてをマスターするのは大変むずかしい。そこで基礎的な内科学の考え方、必要最小限の知識、専門用語などを理解するよう努める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 内科学総論－病因論（遺伝・感染・腫瘍・代謝異常等）
診断学・検査学
- 第2回 内科学総論－治療医学、予防医学
- 第3回 内科学各論－血液疾患
- 第4回 内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
- 第5回 内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
小テスト及び解説
- 第6回 内科学各論－感染症
- 第7回 内科学各論－内分泌疾患
- 第8回 内科学各論－代謝疾患
- 第9回 内科学各論－循環器疾患
- 第10回 内科学各論－呼吸器疾患
- 第11回 内科学各論－胃・泌尿器疾患
- 第12回 内科学各論－消化管疾患
- 第13回 内科学各論－肝・胆・膵疾患
- 第14回 内科学各論－中毒・環境要因による疾患
- 第15回 老年医学

■ 評 価 方 法

筆記試験95% 筆記小テスト5%

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法・作業療法専門分野 内科学
著者名：大成浄志
出版社：医学書院

■ 参 考 書

書 名：新臨床内科学

著者名：高久史磨・尾形悦郎

出版社：医学書院

書 名：標準理学療法・作業療法専門分野 老年医学

著者名：大内尉義

出版社：医学書院

書 名：NEW 臨床検査診断学

著者名：宮井潔

出版社：南江堂

■ 留 意 事 項

講義では要点（基本的な考え方・各事項の用語説明などいわば“さわり”）だけを述べることになるので、それをもとに教科書などでしっかり自習してほしい

授業科目	小児科学	担当者	非公表		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

子供は、成長発達の途上にあり形態的にも生理的にも大人と違った特徴を持っていることを理解することが大事。小児病学はよくみられる疾患、見逃せない疾患を中心にし、又予防接種、母子保健、心身症について述べる。

■ 目 標

小児の成長・発達・小児病学・小児保健等の理解を通して、小児の特徴病態をよく把握すること

■ 授 業 計 画

- 第1回 小児の形態的 機能的特性
小児の循環 呼吸 消化器機能 etc の発達と特徴
- 第2回 予防接種 母子保健 小児検診について
- 第3回 先天代謝異常 染色体異常 先天奇形 及び 新生児疾患
- 第4回 小児の気になる主診、症状（発熱 体格 皮フ 呼吸 消化器 神経病状など）
- 第5回 呼吸器疾患 上気道炎、肺炎、クループ等
- 第6回 消化器疾患 消化器感染症、消化器潰瘍、器質的疾患 等
- 第7回 循環器疾患 先天性心疾患 不整脈 川崎病 等
- 第8回 発疹性疾患 細菌感染症 etc、小児の特有の感染症について
- 第9回 アレルギー免疫疾患 気管支喘息、アトピー性皮フ炎、食物アレルギー
- 第10回 神経疾患 けいれん、てんかん、脳炎、髄膜炎 etc
- 第11回 代謝内分泌疾患について 成長ホルモン分泌不全症、糖尿病、肥満 etc
- 第12回 腎・泌尿器疾患について 胃炎、ネフローゼ、尿器感染症、膀胱尿管逆流 等
- 第13回 血液疾患、悪性腫瘍、筋疾患について
- 第14回 心身症 心理的疾患について
- 第15回 小児診療の特徴 事故・救急 等

■ 評 価 方 法

筆記試験 70%
小テスト15%
出席受講態度（三段階で評価）15%

■ 教 科 書

書 名：最新育児小児病学
著者名：黒田恭弘
出版社：南江堂

書 名：小児・思春期診断 最新マニュアル
著者名：五十嵐 隆
出版社：日本医師会

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	精神医学	担当者	小畔 美弥子		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

主な精神疾患について症状・診断・治療を学ぶ

■ 目 標

精神医学に興味を持ち，基本知識を身につける

■ 授 業 計 画

- 第1回 精神医学とは・症候学
- 第2回 器質性精神障害
- 第3回 統合失調症
- 第4回 気分障害
- 第5回 パーソナリティー障害
- 第6回 神経症性障害
- 第7回 治療
- 第8回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験80%，出席・受講態度20%

■ 教 科 書

書名：text 精神医学
 著者名：加藤進昌 神庭重信
 出版社：南山堂

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	リハビリテーション医学	担当者	澤井里香子・今井公一・辻 都		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚療法に必要なリハ医学の基礎知識及び臨床場面で重要となる事柄を、心理的問題も含めて講義する。(澤井)
 理学療法と作業療法について、講義形式で歴史と理論的背景及び種々の展開例から実践の枠組みと実際を学ぶ(今井・辻)

■ 目 標

言語聴覚療法に必要な医学的基礎知識及び代表的な疾患についての患者個人の全体像を把むために、臨床上必要な知識を身につける。(澤井)
 理学療法、作業療法の枠組みを概観できること、及び理学療法、作業療法の実践例を知ることでの専門性を理解すること。(今井・辻)

■ 授 業 計 画

- 第1回 リハビリテーション医学の概念と障害学 (澤井)
- 第2回 廃用症候群・過用/誤用症候
中枢性神経麻痺の回復 (澤井)
- 第3回 脳卒中のリハビリ (澤井)
運動学習
- 第4回 目標設定レベルの階層性 留守居能力 (澤井)
ケアマネージメント パーキンソン病のリハビリ
- 第5回 神経疾患のリハビリ (ALS, SCD) (澤井)
ターミナルケア
呼吸リハ
- 第6回 心理的問題について (障害受容、チームワークなど) (澤井)
- 第7回 授業全体の総合的演習 (澤井)
- 第8回 授業全体の総合的演習 (澤井)
- 第9回 理学療法 (士) を理解するために (今井)
- 第10回 理学療法評価と治療 (動作という視点を中心に) (今井)
- 第11回 理学療法の実際 (1) (今井)
- 第12回 理学療法の実際 (2) (今井)
- 第13回 作業療法の歴史 (辻)
作業療法の“作業”の意味
実践の枠組み・理論的背景
- 第14回 発達過程における作業療法の実際 (辻)
- 第15回 精神障害者に対する作業療法の実際 (辻)
- 第16回 身体障害者に対する作業療法の実際 (辻)

■ 評 価 方 法

筆記試験 100%

■ 教 科 書

--

■ 参考書

(澤井)

書名：図説 パーキンソン病の理解とリハビリテーション

著者名：山永 裕明、野尻 晋一

出版社：三輪書店

書名：動画で学ぶ脳卒中のリハビリテーション

著者名：園田 茂

出版社：医学書院

書名：臨床リハ

出版社：医歯薬出版

書名：リハビリテーション医療心理学キーワード

著者名：才藤 栄一、渡辺 俊之、保坂 隆

出版社：エヌ&エヌ パブリッシング

■ 留意事項

授業科目	耳鼻咽喉科学	担当者	岩井詔子・藤木暢也 ほか		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

耳鼻咽喉科疾患の病態と治療について講義を行う。

■ 目 標

耳鼻咽喉科疾患について、言語聴覚士に必要な知識を身につけることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 聴覚・平衡感覚器の機能解剖（岩井）
- 第2回 聴覚・平衡感覚器の機能解剖（岩井）
- 第3回 鼻腔・咽頭腔の機能解剖（岩井）
- 第4回 聴覚障害の原因（岩井）
- 第5回 聴覚障害の原因（岩井）
- 第6回 小児耳鼻科臨床（岩井）
- 第7回 まとめ（岩井）
- 第8回 鼻・咽喉頭疾患の病態と治療（藤木）
- 第9回 外耳疾患の病態と治療（講師非公表）
- 第10回 中耳疾患の病態と治療（講師非公表）
- 第11回 内耳疾患の病態と治療（講師非公表）
- 第12回 聴力改善術（講師非公表）
- 第13回 前庭・平衡系の構造と機能（講師非公表）
- 第14回 めまい疾患（講師非公表）
- 第15回 まとめ（講師非公表）

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

出版社：医学書院

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山 稔

出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床神経学	担当者	小倉 光博		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

スライドを中心に、臨床的に頻度の高い神経疾患をわかりやすく解説する。あわせて、神経解剖、神経生理、神経症候学、神経放射線診断についても解説する。

■ 目 標

神経解剖、神経生理などの基本的知識をもとに、臨床でよく経験する神経疾患の病態、診断、治療を理解すること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 神経解剖・神経生理
- 第2回 神経解剖・神経生理
- 第3回 脳血管障害
- 第4回 脳血管障害
- 第5回 脳腫瘍
- 第6回 脳腫瘍
- 第7回 頭部外傷
- 第8回 頭部外傷
- 第9回 小児頭部外傷・先天奇形
- 第10回 神経血管症候群
- 第11回 パーキンソン病
- 第12回 認知症
- 第13回 頭痛
- 第14回 神経変性疾患・感染症
- 第15回 神経画像診断

■ 評 価 方 法

筆記試験100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

書名：絵でみる脳と神経 第3版
 著者名：馬場元毅
 出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	形成外科学	担当者	大倉 正也		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な顎顔面外科学

■ 目 標

基礎知識の習得と理解

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論（嚙下を含む）
- 第2回 口唇口蓋裂
- 第3回 口腔腫瘍
- 第4回 顎変形症
- 第5回 顎顔面の再建
- 第6回 唾液の機能と唾液腺
- 第7回 試験対策
- 第8回 試験対策

■ 評 価 方 法

筆記試験（80%）、出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	臨床歯科医学	担当者	高尾 香名		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床歯科医学全般に関する基礎知識を提供する。特に口腔外科学（口唇口蓋裂を含む）については各論にも触れる内容とする。

■ 目 標

臨床歯科医学全般に関する基礎的な知識を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 口腔解剖学
- 第2回 う蝕について
- 第3回 歯周病について
- 第4回 補綴, 歯科矯正治療について
- 第5回 口腔外科学1
- 第6回 口腔外科学2
- 第7回 口腔外科学3
- 第8回 口腔外科学4

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	口腔外科学	担当者	中嶋 正博		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

口腔の構造・機能と口腔に現れる疾患について講義を行う。

■ 目 標

言語聴覚士として必要な口腔の構造・機能と口腔に現れる疾患について理解する

■ 授 業 計 画

- 第1回 口腔の発生、口腔の構造と機能
- 第2回 顎顔面、口腔領域の奇形、変形
- 第3回 顎関節疾患、唾液線疾患
- 第4回 口腔領域の神経疾患、外傷
- 第5回 口腔粘膜疾患、口腔領域の嚢胞性疾患、炎症
- 第6回 口腔領域の腫瘍性疾患および腫瘍類似疾患
- 第7回 顎顔面・口腔領域の再建と機能回復
- 第8回 中枢性疾患による口腔機能障害、加齢による口腔機能障害

■ 評 価 方 法

出席と試験で評価する

■ 教 科 書

書名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
 著者名：道健一編
 出版社：医歯薬出版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	呼吸発声系医学 (呼吸発声発語系の構造、機能、病態)	担当者	本多 知行・楯谷 一郎		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

嚥下障害分野：リハビリテーション医師の立場から嚥下障害への取り組みについて講義する。
 音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。

■ 目 標

嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」というQOLの向上を目的として言語聴覚士が支援できる技術・考え方を習得する。
 音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。

■ 授業計画

- 第1回 嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理 (本多)
- 第2回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練 (本多)
- 第3回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練 (本多)
- 第4回 嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項 (本多)
- 第5回 偽 (仮) 性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ (本多)
球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
- 第6回 変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ (本多)
- 第7回 嚥下障害の重症度分類と最近の話題 (本多)
- 第8回 喉頭の解剖 (楯谷)
- 第9回 発声の生理機構 (楯谷)
- 第10回 喉頭検査法 (楯谷)
- 第11回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変 (楯谷)
- 第12回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変 (楯谷)
- 第13回 喉頭疾患の診断と治療：非器質的病変 (楯谷)
- 第14回 音響分析・音声検査法 (楯谷)
- 第15回 まとめ (楯谷)

■ 評価方法

試験100%です。

■ 教科書

■ 参考書

- 書名：「摂食・嚥下リハビリテーション」第2版
 著者名：金子芳洋・千野直一監修
 出版社：医歯薬出版
-
- 書名：嚥下障害の臨床 (第2版)
 著者名：日本嚥下障害臨床研究会監修
 出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

下記の通り実施します。
 嚥下障害分野担当 本多知行 7コマ
 音声障害分野担当 楯谷一郎 8コマ

授業科目	聴覚系医学 (聴覚系の構造、機能、病態)	担当者	金丸 眞一 ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 目 標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 耳科学の概説と聴覚系の構造① (外耳・中耳・内耳)
- 第2回 聴覚系の機能① (外耳・中耳)
- 第3回 聴覚系の機能② (内耳)
- 第4回 聴覚系の機能③ (聴神経と視聴中枢経路)
- 第5回 聴覚系の機能④ (聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚)
- 第6回 聴覚検査と耳疾患
- 第7回 聴覚器官の病態① (外耳・中耳疾患①)
- 第8回 聴覚器官の病態② (外耳・中耳疾患②)
- 第9回 鼓室形成手術
- 第10回 聴覚器官の病態③ (内耳疾患①)
- 第11回 聴覚器官の病態④ (内耳疾患②)
- 第12回 内耳再生医学
- 第13回 聴覚器官の病態⑤ (後迷路・中枢性難聴疾患)
- 第14回 聴覚と音声・言語・音楽
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための聴覚障害学

著者名：喜多村健 編著

出版社：医歯薬出版

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

出版社：医学書院

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	神経系医学	担当者	板倉 徹・西林 宏起		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

中枢神経系の機能解剖（脳神経外科疾患を含む）、神経放射線画像について講義を行う。

■ 目 標

日常臨床で遭遇する患者の神経症状、高次脳機能障害を理解する。また、画像所見から患者の症状を推察するための画像読影力もつける。

■ 授業計画

- 第1回 頭蓋骨、硬膜、くも膜、軟膜、脳実質の解剖 CT、MRIの画像読影（西林）
- 第2回 脳脊髄液系、脳血管の解剖（西林）
- 第3回 大脳皮質の機能：運動感覚野、言語関連野、視覚系、聴覚系（西林）
- 第4回 皮質脊髄路、皮質核路、体性感覚など（西林）
- 第5回 間脳（視床・視床下部）（西林）
- 第6回 大脳基底核、脳幹（西林）
- 第7回 脳神経、脊髄（西林）
- 第8回 脳血管系①（板倉）
- 第9回 脳血管系②（板倉）
- 第10回 脳脊髄液系（板倉）
- 第11回 画像診断 CT①（板倉）
- 第12回 画像診断 CT②（板倉）
- 第13回 画像診断 MRI（板倉）
- 第14回 画像診断 その他の画像診断（板倉）
- 第15回 まとめ（板倉）

■ 評価方法

筆記試験（100%）

■ 教科書

■ 参考書

西林
 書名：絵でみる脳と神経
 著者名：馬場元毅
 出版社：医学書院

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	臨床心理学 I (理論と分類)	担当者	藤井 章乃		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学の基本である人格理論、発達理論を中心に学習する。

■ 目 標

人間理解として、自己理解、他者理解を深め、理想的な人間関係について考える。

■ 授 業 計 画

- 第1回 カウンセリングマインドについて
- 第2回 演習
- 第3回 臨床心理学の概要
- 第4回 人格理論 フロイトの精神分析理論 ①
- 第5回 人格理論 フロイトの精神分析理論 ②
- 第6回 人格理論 ユングの分析的心理学 ①
- 第7回 人格理論 ユングの分析的心理学 ②
- 第8回 人格理論 ロジャーズの自己理論
- 第9回 発達理論 マーラーの分離個体化理論 ウィニコットの対象関係論
- 第10回 発達理論 エリクソンの心理・社会的発達理論
- 第11回 発達・人格理論 その他①
- 第12回 発達・人格理論 その他②
- 第13回 発達について
- 第14回 精神障害について ①
- 第15回 精神障害について ②

■ 評 価 方 法

評価方法 筆記試験80% 提出課題20%

■ 教 科 書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参 考 書

書 名：こころの扉を拓く ～心理臨床覚書
 著者名：真田忠美
 出版社：西日本法規出版

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床心理学Ⅱ (査定と心理療法)	担当者	藤井 章乃		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

心理アセスメント、心理療法を中心に、自己分析を通して自己理解を深め、援助技術を具体的に学ぶ。

■ 目 標

臨床心理学の援助の方法を理論と実習によって学ぶことにより、実践において役立てることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心理アセスメント - 情報の収集と整理
- 第2回 心理アセスメント - 質問紙法
- 第3回 心理アセスメント - 質問紙法 演習
- 第4回 心理アセスメント - 投影法
- 第5回 心理アセスメント - 投影法 演習
- 第6回 心理療法 - クライアント中心療法 ①
- 第7回 心理療法 - クライアント中心療法 ②
- 第8回 心理療法 - 精神分析療法
- 第9回 心理療法 - ユングの分析的心理療法
- 第10回 心理療法 - 遊戯療法
- 第11回 心理療法 - 芸術療法
- 第12回 心理療法 - 行動療法
- 第13回 心理療法 - 認知行動療法
- 第14回 心理療法 - その他
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験80% 提出課題20%

■ 教 科 書

書名：「心とかかわる臨床心理」
 著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫著
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	生涯発達心理学 I (乳幼児期)	担当者	工藤 芳幸		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

生涯発達心理学とは、生まれてから死ぬまでの人の一生において、環境（人や物、社会）との相互作用を通じた時系列的な変化を扱う学問領域である。いわば生老病死、生成と喪失の心理学である。今後、臨床的な発達アセスメントにもつなげていく為に、新版K式発達検査2001などの検査も参照し、運動、認知、情緒、社会性、遊び、知的機能、注意、記憶、そして自己の発達について学ぶ。言語発達障害系科目の学習との関係を考慮しながら講義を進める。第2回目の講義までに岡本夏木「幼児期」（岩波新書）を通読しておいて欲しい。

■ 目 標

乳幼児期の発達の流れを大まかに掴むことと、各領域でポイントになる項目の理解を目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション：胎生期・新生児期～小学校に上がる頃までの発達と成長を俯瞰する。また受講に当たっての留意事項、学習形式について話したい。
- 第2回 乳児期前半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）、演習を通して、乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
- 第3回 乳児期後半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）、演習を通して、乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
- 第4回 幼児期前半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）、演習を通して、乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
- 第5回 幼児期後半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）、演習を通して、乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
- 第6回 乳幼児期の復習。乳幼児期の小テストを実施する。講義中にフィードバックを行なう。
- 第7回 アタッチメントと社会性の発達：Bowlbyのアタッチメント理論を中心に、母子関係における愛着行動、人見知りのメカニズムなどについて解説する。
- 第8回 認知の発達：乳幼児の認知の発生について理論的体系を築いたスイスの心理学者・ピアジェについて取り上げる。第5回までの講義とリンクさせながら、基本的な考え方について解説する。
- 第9回 情緒の発達：大人には喜怒哀楽といった感情が確かに「ある」ことが当然と思われるかも知れない。感情もまた、乳児期からの発達過程において学習される。気分・感情・情動・情緒といった言葉で表される状態の初期発達を学ぶ。
- 第10回 遊びの発達：遊びは総合力である。子どもは手持ちの力を発揮して多様に遊ぶ。遊びを媒介にして、認知や言語、社会性や感情制御といった力を身につけていく。ここでは遊びというものの発達段階とその多様性について考えてみたい。
- 第11回 言語の発達：新版K式発達検査2001などの検査項目も参照しながら、言語発達におけるメルクマールについて解説し、評価の視点について解説する。
- 第12回 小テスト。講義前半で第1回から第11回までの項目について、年齢と各領域の発達をクロスさせる記述問題を実施する。後半でフィードバックを実施する予定である。
- 第13回 注意・記憶の発達：注意（attention）機能、記憶の発達について取り上げる。人や物、事象に対し、適度に注意を向け、記憶（記録）し、保持した上で、必要に応じて想起する力の発達過程を解説する。
- 第14回 知能：知能測定の歴史的背景を概観する。また、現在、小児領域で使われている知能・認知検査について解説する。取り挙げる検査はWISC - III (IV)、田中ビネー知能検査、K-ABCを予定している。
- 第15回 自己の発達：大人である私たちにとって自分が自分であることは自明のことと認識されている。では乳児や幼児はどのようなのだろうか？講義の最終回は、自己（self）について取り上げ、考えてみたい。

■ 評価方法

筆記試験70%、小テスト20%、リアクションペーパー 10%

■ 教科書

書名：よくわかる乳幼児心理学

著者名：内田伸子 編

出版社：ミネルヴァ書房

書名：幼児期

著者名：岩波新書

出版社：岡本夏木

■ 参考書

書名：新版 K 式発達検査法〈2001年版〉発達のアセスメントと支援

著者名：松下裕・郷間英世（編）

出版社：ナカニシヤ出版

書名：発達相談と援助—新版 K 式発達検査2001を用いた心理臨床

著者名：川畑 隆・衣斐 哲臣・大島 剛・笹川 宏樹・伏見 真理子・菅野 道英・宮井 研治・梁川 恵（著）

出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

適宜、ハンドアウトを配布します。ファイリング

授業科目	生涯発達心理学Ⅱ（幼児期～老年期）	担当者	森田喜治・阪本裕子・小野栄 ほか		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

森田：幼児期から中年期までの心理的発達と各時期の課題と問題との治療について
 阪本・小野ほか：老年期のエイジングとパーソナリティー、認知症の問題、死への対応について解説する。
 老年期のエイジングとパーソナリティーについて理解を深めて頂き、「失語症」を持つ人にSTが如何に対応すべきかを学んで頂きたい。

■ 目 標

対人関係学の立場から情緒の発達の理解と課題及び、病理とその治療についての理解を深め、人間の心の成長、対人関係の成長及び葛藤についての理解を深める。
 各発達段階の課題や病理について理解し、適切なアプローチについて考えることができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 対人関係学の立場からの乳幼児における母子関係、対人関係についての解説
- 第2回 ライフサイクルにおける幼児期の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する
- 第3回 ライフサイクルにおける幼児期の問題行動と治療について解説する
- 第4回 ライフサイクルにおける児童期の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する
- 第5回 ライフサイクルにおける児童期の問題行動と治療について解説する
- 第6回 ライフサイクルにおける青年期前期（思春期）の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する
- 第7回 ライフサイクルにおける青年期前期（思春期）の問題行動と治療について解説する
- 第8回 成人期、中年期の課題と問題、その家族との人間関係について治療を含めた観点から解説する
- 第9回 ビデオ鑑賞（「NHK・にんげんドキュメント」にて放映された「お父さん歌ってよ！」を通して失語症患者とその家族の方の心理状態を理解して頂きたい。）（小野）
- 第10回 老年期のエイジングとパーソナリティー（小野）
- 第11回 “お年寄りの問題あれこれ”と“老人に接する時の心得”（小野）
- 第12回 老年期の知的機能－認知症について（阪本）
- 第13回 老年期の知的機能－認知症のケアについて（阪本）
- 第14回 死への対応1（講師非公表）
- 第15回 死への対応2（講師非公表）

■ 評 価 方 法

森田：出席 70% レポート 30%
 小野・阪本ほか：レポート100%

■ 教 科 書

特に指定しません

■ 参 考 書

特に指定しません・講義内で適宜紹介していきます

■ 留 意 事 項

--

授業科目	学習・認知心理学Ⅰ（感覚・知覚・学習・記憶）	担当者	芦高 勇氣		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学びます。前期は感覚・知覚・学習・記憶についてお話しします。

■ 目 標

人間がどのように外の世界をとらえているのか（感覚・知覚）、またどのように新しい行動や知識を獲得していくのか（学習・記憶）を理解することを目標とします。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心理学とは何か？
- 第2回 感覚の分化と統合Ⅰ（感覚・知覚）
- 第3回 感覚の分化と統合Ⅱ（感覚・知覚）
- 第4回 視知覚Ⅰ（感覚・知覚）
- 第5回 視知覚Ⅱ（感覚・知覚）
- 第6回 古典的条件付け（学習）
- 第7回 オペラント条件付け（学習）
- 第8回 強化スケジュール（学習）
- 第9回 技能学習（学習）
- 第10回 社会的学習（学習）
- 第11回 記憶の過程（記憶）
- 第12回 短期記憶（記憶）
- 第13回 長期記憶（記憶）
- 第14回 記憶の神経過程（記憶）
- 第15回 前期のまとめ

■ 評 価 方 法

出席状況・試験の結果を総合的に評価する。（試験100％）

■ 教 科 書

■ 参 考 書

- 書名：心理学（第4版）
 著者名：鹿取 廣人，杉本 敏夫，鳥居 修晃
 出版社：東京大学出版会
-
- 書名：認知コントロール 認知心理学の基礎研究から教育・臨床の応用をめざして
 著者名：嶋田 博行，芦高 勇氣
 出版社：培風館

■ 留 意 事 項

授業科目	学習・認知心理学Ⅱ (思考・言語)	担当者	芦高 勇氣		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学びます。後期は、より高次の認知過程を必要とする思考・言語についてお話しします。

■ 目 標

学習・認知心理学において扱われる人間の問題解決の仕方や知識の構造（思考）、また言語を獲得するにあたり必要な認知発達（言語）に関して理解することを目標とします。

■ 授 業 計 画

- 第1回 前期のおさらい
- 第2回 問題解決（思考）
- 第3回 問題解決と認知発達（思考）
- 第4回 知識（思考）
- 第5回 推論と発見（思考）
- 第6回 言語獲得（言語）
- 第7回 非言語コミュニケーション（言語）
- 第8回 前期・後期のまとめ

■ 評 価 方 法

出席状況・試験の結果を総合的に評価する。（試験100%）

■ 教 科 書

■ 参 考 書

- 書 名：心理学（第4版）
 著者名：鹿取 廣人, 杉本 敏夫, 鳥居 修晃
 出版社：東京大学出版会
-
- 書 名：認知コントロール 認知心理学の基礎研究から教育・臨床の応用をめざして
 著者名：嶋田 博行, 芦高 勇氣
 出版社：培風館

■ 留 意 事 項

授業科目	心理測定法	担当者	松井 理直		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

精神物理学的手法・各種心理テスト法・統計学の基本概念

■ 目 標

聴力テスト・心理テストの基盤となる心理測定法の各種概念について理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 心理テストの特徴とテストの信頼性・再現性。
- 第2回 精神物理学の測定法（1）－感覚の測定と閾値
- 第3回 精神物理学の測定法（2）－調整法
- 第4回 精神物理学の測定法（3）－極限法
- 第5回 精神物理学の測定法（4）－適応法
- 第6回 精神物理学の測定法（5）－恒常法・ME法
- 第7回 評定法・SD法について
- 第8回 尺度構成 — 対比較法
- 第9回 Weberの法則
- 第10回 Weber-Fechnerの法則
- 第11回 Stevensのベキ法則
- 第12回 信号検出理論について
- 第13回 統計学の基礎—仮説と有意水準
- 第14回 統計学の計算方法
- 第15回 多次元尺度構成法

■ 評 価 方 法

テスト70%、ミニテストを含む平常点30%

■ 教 科 書

書名：教材心理学
 著者名：難波精一郎ほか
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介する。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	言語学 I (音声学・形態論)	担当者	松井 理直		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

ことばの音声面についての理解を深める。

■ 目 標

言語聴覚士の仕事に必要な「ことば」に関する理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 言語学入門—「ことば」とはどのようなものか。
- 第2回 記号というシステムの特徴。
- 第3回 音声学入門—調音器官について
- 第4回 子音の分類
- 第5回 母音の分類
- 第6回 IPA 記号について
- 第7回 日本語の母音の特徴
- 第8回 日本語の子音音素と異音(1)
- 第9回 日本語の子音音素と異音(2)
- 第10回 日本語の子音音素と異音(3)
- 第11回 特殊音素—撥音について
- 第12回 特殊音素—促音について
- 第13回 モーラと音節構造
- 第14回 東京方言のアクセント
- 第15回 アクセントとイントネーション

■ 評 価 方 法

テスト70%, ミニテストを含む平常点30%

■ 教 科 書

プリントを配布

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介する。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	言語学Ⅱ (文法・意味・社会言語学)	担当者	松井 理直		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

ことばの意味・文法に関わる性質を深く理解する。

■ 目 標

言語聴覚士の仕事に必要な「ことば」に関する理解を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 音声と文字
- 第2回 日本語の語彙層について
- 第3回 文字と語彙層の関係
- 第4回 日本語の形態音韻論について
- 第5回 形態素の考え方
- 第6回 形態素の種類
- 第7回 動詞形態素とその後続形
- 第8回 テンスとアスペクト
- 第9回 ヴォイス・ムード・モダリティ
- 第10回 日本語の助詞について
- 第11回 生成文法の考え方
- 第12回 構造としての文法
- 第13回 意味と論理
- 第14回 語用論について
- 第15回 言語と社会

■ 評 価 方 法

テスト70%, ミニテストを含む平常点30%

■ 教 科 書

プリントを配布

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介する。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	音声学 1	担当者	松井 理直		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語の音素と異音の関係を理解する。

■ 目 標

日本語の発音について、詳細な点まではっきりと理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 STにとって音声学で学ばなければならないこと。
- 第2回 調音器官の説明。
- 第3回 IPAの子音チャートについて。
- 第4回 有声音と無声音。
- 第5回 調音方法（1）—破裂音と摩擦音
- 第6回 調音方法（2）—はじき音と接近音
- 第7回 調音位置の詳細について。
- 第8回 母音の発音。
- 第9回 日本語の発音—五十音を巡って。
- 第10回 いわゆる四つ仮名について。
- 第11回 ハ行発音について。
- 第12回 特殊拍（1）—撥音について。
- 第13回 特殊拍（2）—促音と長音。
- 第14回 IPAの補助記号と構音障害の表記法。
- 第15回 音声学の復習。

■ 評 価 方 法

テスト70%、ミニテストを含む平常点30%

■ 教 科 書

書 名：日本語音声学入門
 著者名：斉藤純男
 出版社：三省堂

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介する。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	音声学2	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語の音節構造・アクセント・イントネーションの関係を理解する。

■ 目 標

言語聴覚士の仕事に必要な音声の知識の完成を目指す。

■ 授 業 計 画

- 第1回 アクセントとは何か。
- 第2回 東京方言のアクセントシステム。
- 第3回 アクセント核と音韻論の基礎。
- 第4回 関西方言と鹿児島方言のシステム。
- 第5回 東京方言のイントネーションについて。
- 第6回 ダウンステップとデクリネーション。
- 第7回 音素と異音。
- 第8回 調音結合と二重調音の違い。
- 第9回 韻律構造について。
- 第10回 モーラと音節を巡る韻律理論。
- 第11回 日本語のリズムと語形成。
- 第12回 日本語の語彙層と音声体系。
- 第13回 音響学からみた音声学（1）
- 第14回 音響学からみた音声学（2）
- 第15回 音声学の総復習。

■ 評 価 方 法

テスト70%、ミニテストを含む平常点30%

■ 教 科 書

書 名：日本語音声学入門
 著者名：齊藤純男
 出版社：三省堂

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介する。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	音響学 I (一般音響学)	担当者	松井 理直		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士として知っておくべき「音」の性質について理解する。

■ 目 標

音声の客観的な診断に役立つ基本的な知識を習得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 音とは何か—疎密波と音の伝播。
- 第2回 音の伝播の仕組みと音速。
- 第3回 周波数の概念。
- 第4回 周波数と周期の関係。
- 第5回 周波数と波長の関係。
- 第6回 指数と対数の計算について。
- 第7回 周波数レベルとメル尺度。
- 第8回 音の強さと音圧。
- 第9回 強さと音圧の関係について。
- 第10回 パワーレベルの計算方法。
- 第11回 様々なタイプのデジベル値。
- 第12回 デジベルに関する理解を深める。
- 第13回 等ラウドネス曲線について。
- 第14回 フォンとソン。
- 第15回 前期の総復習。

■ 評 価 方 法

テスト70%, ミニテストを含む平常点30%

■ 教 科 書

プリントを配布する。

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介する。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	音響学Ⅱ (音響音声学・聴覚心理学)	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士として知っておくべき「音」の性質について理解する。

■ 目 標

実際に音声の客観的な分析ができるようになることが目標である。

■ 授 業 計 画

- 第1回 複合音の特性。
- 第2回 倍音と基本周波数。
- 第3回 失われた基音と場所説・時間説。
- 第4回 スペクトルについて。
- 第5回 短時間スペクトルの特性。
- 第6回 声帯のスペクトルの特徴。
- 第7回 共鳴とは何か。
- 第8回 共鳴管（1）一閉管の特徴。
- 第9回 共鳴管（2）一開管の特徴。
- 第10回 フォルマントと調音位置。
- 第11回 子音の調音方法と音響特性。
- 第12回 サウンドスペクトログラムの読み方。
- 第13回 音声の音響的特徴のまとめ。
- 第14回 デジタル信号処理。
- 第15回 音響学の総復習。

■ 評 価 方 法

テスト70%、ミニテストを含む平常点30%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

授業中に適宜紹介する。

■ 留 意 事 項

分からないことがあれば、必ずその場で質問してください。疑問点を残さないようにしましょう。

授業科目	言語発達学	担当者	齋藤 典昭		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

子どもたちの発達の中でも言語の領域の発達について学びます。
範囲は0歳から学齢までです。

■ 目 標

1. 言語発達障害を理解するために、正常な言語発達についての基礎知識を獲得する。
2. その知識を用いて子どもたちを観察し、ことばの発達について概要を評価できる。

■ 授業計画

- 第1回 言語発達の概要
- 第2回 前言語期の言語発達 その1 コミュニケーションの発達
- 第3回 前言語期の言語発達 その2 コミュニケーションの発達
- 第4回 前言語期の言語発達 その3 聞き分けることの発達
- 第5回 前言語期の言語発達 その4 聞き分けることの発達
- 第6回 前言語期の言語発達 その5 言語音を産生することの発達
- 第7回 前言語期の言語発達 その6 感覚運動的知能の発達
- 第8回 前言語期の発達について 復習
- 第9回 語彙獲得の発達
- 第10回 語意味獲得の発達 その1 制約という仮説
- 第11回 語意味獲得の発達 その2 社会相互作用アプローチという仮説
- 第12回 文法獲得の発達 統語と形態の発達
- 第13回 語用論的側面からみた言語発達 その1 会話の発達
- 第14回 語用論的側面からみた言語発達 その2 語りの発達
- 第15回 読み書きの発達

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 教科書

書名：言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学
著者名：今泉敏ほか
出版社：医学書院

■ 参考書

書名：子どもとことば
著者名：岡本夏木
出版社：岩波書店 新書

書名：ことばと発達
著者名：岡本夏木
出版社：岩波書店 新書

書名：ことばの発達の謎を解く
著者名：今井むつみ
出版社：ちくまプリマー新書

■ 留意事項

授業科目	リハビリテーション概論	担当者	ST 教員		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚障害の方にご来校いただき対話会を行う。

■ 目 標

リハビリテーションの考え方について知る。

言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深め、コミュニケーションに関する自己の課題を知る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 リハビリテーションとは (吉機)
リハビリテーションの考え方とその概要
- 第2回 対話会の実施にあたって (大西)
対話会の意義と取り組むべき課題について
- 第3回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第4回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第5回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第6回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第7回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第8回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
対話会を振り返って－コミュニケーションの課題－

■ 評 価 方 法

レポート100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	社会保障制度	担当者	山本 永人		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

わが国の社会保障制度の概略や福祉サービスの歴史、理念を解説する。できるだけ、事例を伴い、わかりやすく解説するようにこころがけたい。

■ 目 標

わが国の社会保障制度のあり方を理解する中で、なぜそのような制度が生まれてきたのか、そして必要とされるのかを、単に知識的な認識のみならず、その柱になる考え方や価値についても考察をすすめる。そのなかで、単に技術に偏ることなく、福祉的な視座をもつセラピストの養成に寄与する。

■ 授業計画

- 第1回 社会福祉の定義とその専門性
- 第2回 社会福祉の基本的な理念
- 第3回 ICF の考え方を理解する
- 第4回 わが国の社会福祉の歩み
- 第5回 社会保障制度の基本的な枠組み
- 第6回 社会保険制度（1）医療保険
- 第7回 社会保険制度（2）年金保険
- 第8回 社会保険制度（3）労働保険
- 第9回 高齢者福祉と介護保険①
- 第10回 高齢者福祉と介護保険②
- 第11回 公的扶助制度
- 第12回 障害者の福祉サービス①
- 第13回 障害者の福祉サービス②
- 第14回 児童の福祉サービス
- 第15回 社会福祉の援助技術

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 教科書

書名：よくわかる社会福祉（第9版）
 著者名：山縣文治・岡田忠克 編
 出版社：ミネルヴァ書房

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	医療福祉教育・関係法規	担当者	山本永人・柏木敏宏・柴田浩志		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に関連する法規、言語聴覚士法の成り立ち、聴覚障害者福祉に関する講義を行う。

■ 目 標

- ・言語聴覚士が活躍するために基本的に抑えておくべき、法律的な知識を構築することを目標とする。
- ・言語聴覚士法制定までの道のりや聴覚障害者福祉の歴史と現状について知る。

■ 授業計画

- 第1回 言語聴覚士に関する法規①（山本）
- 第2回 言語聴覚士に関する法規②（山本）
- 第3回 成年後見制度と知的障害者の虐待（山本）
- 第4回 わが国の障害者教育（山本）
- 第5回 聴覚障害者福祉の歴史と現状（柴田）
- 第6回 聴覚障害者を巡る状況 福祉分野の取り組みと課題（柴田）
- 第7回 言語聴覚士法の歴史（柏木）
- 第8回 言語聴覚士に求めること（柏木）

■ 評価方法

試験100%

■ 教科書

適宜、プリントを配布します。

■ 参考書

■ 留意事項

できるだけ、楽しく明るく授業を行います。積極的な参加をお願いします。とくに欠席しないようしてください。

授業科目	言語聴覚障害学概論	担当者	ST 教員ほか		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ 神経系、発声発語器官、頭頸部解剖学への導入
- ・ 言語聴覚療法の各領域の臨床について現任者が講義を行う。
- ・ I 期実習ガイダンス

■ 目 標

- ・ 神経系や発声発語器官、頭頸部の概要を理解する。
- ・ さまざまな臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知る。
- ・ 実習に先だち、言語聴覚士として必要な各領域の知識や技術の基礎的事項を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 言語聴覚障害とは (吉機)
- 第2回 神経系の解剖学 (吉機)
- 第3回 発声発語器官の解剖学 (前田)
- 第4回 頭頸部の解剖学 (前田)
- 第5回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る 1-
- 第6回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る 2-
- 第7回 言語聴覚士の役割とは ディスカッション
- 第8回 言語聴覚士の役割とは ディスカッション
- 第9回 言語聴覚士の役割とは ディスカッションと課題学習
- 第10回 言語聴覚士の役割とは ディスカッションと課題学習
- 第11回 言語聴覚士の現場の声をきく会から学んだこと 発表
- 第12回 I 期実習ガイダンス 実習とは
- 第13回 I 期実習ガイダンス 実習日誌の書き方
- 第14回 I 期実習ガイダンス 実習日誌の書き方
- 第15回 I 期実習ガイダンス 諸注意

■ 評価方法

出席状況 100%

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚障害診断学 1	担当者	齋藤 典昭・工藤 芳幸		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

人工内耳装用の子どもさんに協力してもらい、一緒に遊び、その後で子どもさんの課題と関わる学生の課題について検討します。

■ 目 標

1. 子どもの多様性について識る。
2. 子どもとの関わり方を学ぶ。
3. 遊びを通じて評価する能力を獲得する。

■ 授 業 計 画

第1回 設定第1回
 第2回 設定第1回
 第3回 設定第1回
 第4回 設定第2回
 第5回 設定第2回
 第6回 設定第2回
 第7回 設定第3回
 第8回 設定第3回
 第9回 設定第3回
 第10回 設定第4回
 第11回 設定第4回
 第12回 設定第4回
 第13回 設定第5回
 第14回 設定第5回
 第15回 設定第5回

■ 評 価 方 法

提出物による評価（100%）

■ 教 科 書

■ 参 考 書

書 名：「インリアルアプローチ」
 著者名：竹田・里見
 出版社：日本文化科学社

 書 名：「ことばをはぐくむ」
 著者名：中川信子
 出版社：ぶどう社

 書 名：「ママとまママ」
 著者名：川野通夫 ほか
 出版社：アカデミア出版会

■ 留 意 事 項

6班作り，各回の設定を担当していただきます。各班は2回ずつ子どもさんと接する機会があります。

授業科目	言語聴覚障害診断学2	担当者	前田留美子・大塚佳代子 名徳倫明・金子みどりほか		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を演習を交えて学ぶ

■ 目 標

臨床上に必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる

■ 授業計画

- 第1回 カニキュレの構造・役割・種類と取り扱いについて（前田留美子）
- 第2回 摂食・嚥下障害と気管カニキュレについて（大塚佳代子）
- 第3回 摂食・嚥下障害とカニキュレ抜去の訓練について（大塚佳代子）
- 第4回 薬の基礎知識①用法・用量など（名徳倫明）
- 第5回 薬の基礎知識②副作用・相互作用など（名徳倫明）
- 第6回 薬の薬理作用（摂食・嚥下に影響する薬剤）（名徳倫明）
- 第7回 輸液の基礎と栄養（名徳倫明）
- 第8回 NST について
- 第9回 院内での NST の取り組みについて
- 第10回 嚥下食の紹介
- 第11回 認知症を伴う方の食事介助①（金子みどり）
- 第12回 認知症を伴う方の食事介助②（金子みどり）
- 第13回 口腔ケアの実技演習（金子みどり）
- 第14回 摂食・嚥下障害のリハビリテーションにおいて病棟ナースがSTに期待すること①
- 第15回 摂食・嚥下障害のリハビリテーションにおいて病棟ナースがSTに期待すること②

■ 評価方法

出席50%、受講態度50%

■ 教科書

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚障害診断学	担当者	福永真哉・高木卓司 森田婦美子・ST 教員		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた評価法について解説する。
2. 評価実習及び嚥下障害引率実習のためのガイダンス（評価実習に必要な知識や技術に関する講義）

■ 目 標

1. ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた適切な評価法である標準ディサースリア検査を適切に実施できるようにする。
2. 言語聴覚障害及び嚥下障害の評価に必要な知識や技術を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した評価について（福永）
- 第2回 発話の聴覚的評価（福永）
- 第3回 呼吸機能の評価（福永）
- 第4回 発声機能の評価（福永）
- 第5回 鼻咽腔閉鎖機能の評価（福永）
- 第6回 口腔構音機能の評価（舌・口唇）（福永）
- 第7回 口腔構音機能の評価（交互反復運動、筋力）（福永）
- 第8回 症例報告書の作成とまとめ（福永）
- 第9回 評価実習ガイダンス（森田） カルテの見方
- 第10回 評価実習ガイダンス（ST 教員） レポートの書き方
- 第11回 評価実習ガイダンス（ST 教員） 小児臨床講義
- 第12回 評価実習ガイダンス（ST 教員） 成人臨床講義
- 第13回 嚥下障害の評価と方針決定①（高木）
日本のリハビリの現状をスライドで紹介（過度な安静がどれだけ悪影響を及ぼすか）
- 第14回 嚥下障害の評価と方針決定②（高木）
絶食状態にある患者（架空）の方針決定についてのグループディスカッションとその解説
考え方の助けとなる書籍と内容の一部を紹介
- 第15回 摂食・嚥下場面の観察（病院の見学実習）

■ 評価方法

定期試験100%

■ 教科書

福永
書名：標準ディサースリア検査
著者名：西尾正輝
出版社：インテルナ出版

■ 参考書

■ 留意事項

講義では教科書のみならず、プリント等も多く使用して行う。

授業科目	失語症 I (基礎)	担当者	大西 環		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症とはどのような言語障害であるか、基礎的な内容を中心に講義を行う。

■ 目 標

失語症の言語症状やタイプ分類等、失語症の基礎を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 失語症とは
定義とその障害の特徴
臨床の流れ
- 第2回 失語症の言語症状 流暢性発話と非流暢性発話
- 第3回 失語症の言語症状 認知神経心理学的モデルについて
- 第4回 失語症の言語症状 発話症状 (各症状と用語の解説)
- 第5回 失語症の言語症状 発話症状 (各症状と用語の解説)
- 第6回 失語症の言語症状 聴覚的理解障害 (各症状と用語の解説)
- 第7回 失語症の言語症状 読み書きの障害 (各症状と用語の解説)
- 第8回 失語症のタイプ分類 古典分類の各タイプについて解説
- 第9回 失語症のタイプ分類 古典分類の各タイプについて解説
- 第10回 失語症のタイプ分類 皮質下性失語、交叉性失語、小児失語 ほか
- 第11回 純粹失読と失読失書
- 第12回 症状の観察の仕方
- 第13回 症状の観察の仕方
- 第14回 復習
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害
 著者名：竹内愛子、河内十郎 編著
 出版社：協同医書出版社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	失語症Ⅱ（評価）	担当者	吉機 俊雄		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症評価の流れを解説する。失語症の各検査技法を解説し、その演習を行う。各検査の使用目的を解説し、結果の解釈について演習を行う。SLTA 実技試験。

■ 目 標

スクリーニングが実施できる。SLTA が実施でき、その結果を分析できる。各失語症検査の内容を理解し、対象者に対して適切に選択できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 失語症分類の必要性 古典分類とシュール分類他との対比
- 第2回 流暢性とは何かを考え、伝導失語と発語失行の特徴の類似点と相違について検討
- 第3回 症例 VTR を提示し、そこから得られる観察事項を記述
レポート作成
- 第4回 前回の症例の残存する能力に着目し、現時点で出来る ADL を検討
- 第5回 スクリーニングの意義と方法 意識障害の診かた 問診の方法
- 第6回 問診場面の VTR を提示し、そこから何が得られ、どの情報が不足しているかを検討
- 第7回 スクリーニングの演習 デモンストレーション後に患者シナリオに沿って学生同士で練習
- 第8回 スクリーニングの演習 デモンストレーション後に患者シナリオに沿って学生同士で練習
- 第9回 スクリーニングの記録の仕方 スクリーニング報告書の書き方
- 第10回 失語症に関する検査の説明
コントロールテストとディープテスト 標準化されたテストとされていないテスト
- 第11回 標準失語症検査（SLTA） 説明と演習 1 症例の検査場面 VTR を提示し、実施手順を解説しながら反応を記載
- 第12回 標準失語症検査補助検査（SLTA-ST） 説明と演習
- 第13回 実用コミュニケーション能力検査（CADL 検査） 説明と演習
- 第14回 重度失語症検査・トークン検査・構文検査試案Ⅱ A・失語症語彙検査 モーラ分解・抽出検査
- 第15回 ディープ検査の必要性和作成方法

■ 評 価 方 法

記述試験（再試は1回実施）と標準失語症検査実技試験（再試は4回まで実施）の点数を合算し、百分率で表した点数で評価する。記述試験と実技試験の両方に合格しなければ単位認定の対象としない。

■ 教 科 書

書 名：標準失語症検査マニュアル 改訂第2版
 著者名：日本高次脳機能障害学会
 出版社：新興医学出版社

■ 参 考 書

書 名：言語聴覚士のための失語症訓練ガイダンス
 著者名：日本言語療法士協会編集
 出版社：医学書院

書 名：演習で学ぶ言語聴覚療法評価入門
 著者名：山田弘幸
 出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

検査手順・結果解釈をしっかりと身につけて下さい。

授業科目	失語症Ⅱ（評価）追加演習	担当者	吉機 俊雄		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	
		開講時期	後期	選択・必修	

■ 内 容

標準失語症検査（SLTA）の実施と分析について、追加演習を行う。

■ 目 標

SLTA を実施・分析できるようになる。

■ 授 業 計 画

第1回	標準失語症検査（SLTA）	説明と演習1	症例の検査場面 VTR を提示し、実施手順を解説しながら反応を記載
第2回	標準失語症検査（SLTA）	説明と演習2	症例の検査場面 VTR を提示し、実施手順を解説しながら反応を記載
第3回	標準失語症検査（SLTA）	説明と演習3	症例の検査場面 VTR を提示し、実施手順を解説しながら反応を記載
第4回	標準失語症検査（SLTA）	説明と演習4	別症例の検査場面 VTR を提示し、反応を記載
第5回	標準失語症検査（SLTA）	説明と演習5	別症例の検査場面 VTR を提示し、反応を記載
第6回	標準失語症検査（SLTA）	説明と演習6	別症例の検査場面 VTR を提示し、反応を記載
第7回	標準失語症検査（SLTA）	説明と演習7	別症例の検査場面 VTR を提示し、反応を記載
第8回	標準失語症検査（SLTA）	説明と演習8	別症例の検査場面 VTR を提示し、反応を記載

■ 評 価 方 法

■ 教 科 書

書 名：標準失語症検査マニュアル 改訂第2版
 著者名：日本高次脳機能障害学会
 出版社：新興医学出版社

■ 参 考 書

書 名：言語聴覚士のための失語症訓練ガイダンス
 著者名：日本言語療法士協会編集
 出版社：医学書院

 書 名：演習で学ぶ言語聴覚療法評価入門
 著者名：山田弘幸
 出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

検査手順・結果解釈をしっかりと身につけて下さい。

授業科目	失語症Ⅲ (訓練)	担当者	林 正弘		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症を改善させる訓練法の習得、さらに失語症の障害構造の仮説を設定し、その考察に基づいた対処や訓練の選択方法を学習します。

■ 目 標

単なる知識ではなく、実際にアプローチをするための評価から、訓練プランの立案までを学習します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 臨床の中での失語
- 第2回 失語症臨床の目標
- 第3回 評価の目的と着眼点
- 第4回 失語症訓練の歴史とエビデンス
- 第5回 訓練法1 伝統的的刺激法
- 第6回 訓練プランの構築方法
- 第7回 ビデオ症例1
- 第8回 訓練法2 遮断除去法
- 第9回 ビデオ症例2
- 第10回 失語にまつわる諸問題 ビデオ症例3
- 第11回 発話障害 (発語失行)
- 第12回 訓練法3 機能再編成法
- 第13回 ビデオ症例4
- 第14回 訓練法4 実用的代償法
- 第15回 訓練計画と訓練手続き

■ 評 価 方 法

定期試験100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	失語症Ⅱ	担当者	吉機 俊雄・大西 環		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

①失語症者の機能障害・能力障害・心理・社会参加、QOL について考え、支援のポイントを学ぶ。②臨床講義で失語症者のスクリーニング・評価・訓練計画立案・訓練までを行い、グループで検討する。適宜次の内容を指導する（失語症回復の理論と介入の実際 回復時期に合わせた援助 ゴール設定とプログラム立案 訓練の実施 評価報告書の作成）。

■ 目 標

失語症者のスクリーニング・評価・訓練計画立案・訓練までの一連の流れに沿ったアプローチが指導を受けながら実施できる。

■ 授 業 計 画

第1回	臨床講義1回目	セッションの準備
第2回	臨床講義1回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第3回	臨床講義1回目	グループでのレポート作成
第4回	臨床講義2回目	セッションの準備
第5回	臨床講義2回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第6回	臨床講義2回目	グループでのレポート作成
第7回	臨床講義3回目	セッションの準備
第8回	臨床講義3回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第9回	臨床講義3回目	グループでのレポート作成
第10回	臨床講義4回目	セッションの準備
第11回	臨床講義4回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第12回	臨床講義4回目	グループでのレポート作成
第13回	臨床講義5回目	セッションの準備
第14回	臨床講義5回目	成人失語症者が来校し、セッション後のフィードバックにも参加していただく。
第15回	臨床講義5回目	グループでのレポート作成

■ 評 価 方 法

出席50% レポート50%

■ 教 科 書

書 名：失語症者の実用コミュニケーション臨床ガイド

著者名：竹内愛子編集

出版社：協同医書出版社

■ 参 考 書

書 名：失語症臨床ガイド 症状別－理論と42症例による訓練・治療の実際

著者名：竹内愛子編集

出版社：協同医書出版

書 名：言語聴覚士のための失語症訓練ガイダンス

著者名：日本言語療法士協会編集

出版社：医学書院

書 名：言語聴覚士のため失語症学

著者名：波多野和夫 他

出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

授業科目	高次脳機能障害 I (概論)	担当者	森岡 悦子		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、中枢神経系の解剖機能を理解し、高次脳機能障害の症状についての基本的知識を習得する。また簡単な評価結果から、障害のメカニズムを理解する。

■ 目 標

高次脳機能障害の基礎的知識を習得し、簡単な評価結果から障害メカニズムに基づいて障害を理解できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 高次脳機能障害の概要
高次脳機能に関わる領域と大脳の情報処理
- 第2回 記憶の障害 (1) 記憶の基本概念と分類
- 第3回 記憶の障害 (2) 記憶障害の種類と症状
- 第4回 記憶の障害 (3) 記憶障害の領域と症状との関係
- 第5回 行為の障害 (1) 失行の基本概念と症状および評価
- 第6回 行為の障害 (2) 習熟運動の解放現象、その他の行為障害
- 第7回 高次脳機能障害の評価と結果分析 (1)
- 第8回 高次脳機能障害の評価と結果分析 (2)

■ 評 価 方 法

定期試験80%、小テストと提出課題20%

■ 教 科 書

書名：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学
著者名：藤田郁代 監修
出版社：医学書院

■ 参 考 書

書名：高次脳機能障害
著者名：石合純夫著
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

--

授業科目	高次脳機能障害Ⅱ（評価）	担当者	森岡 悦子		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

高次脳機能障害について、評価結果から症状を分析し障害機序を考察する。また、脳画像のみかたについて学ぶ。

■ 目 標

高次脳機能障害の評価・鑑別方法を習得し、評価結果を分析し症状を障害機序に沿って考察できるようになる。またCT画像、MRI画像から、出現する高次脳機能障害を予測できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 視覚認知の障害 視覚認知障害（画像と物体失認・相貌失認）の症状とメカニズム
- 第2回 聴覚認知の障害 聴覚皮質と聴覚認知障害、聴覚失認の基本概念
- 第3回 視知覚機能の評価と結果分析（1）
- 第4回 視知覚機能の評価と結果分析（2）
- 第5回 視空間障害（1） 半側空間無視の基本概念と症状
- 第6回 視空間障害（2） 地誌的見当識障害・バリント症候群・構成障害
- 第7回 視空間障害の評価と結果分析（1）
- 第8回 視空間障害の評価と結果分析（2）
- 第9回 身体意識・病態認知の障害 ゲルストマン症候群と病態失認
- 第10回 遂行機能 基本概念と評価方法
- 第11回 脳梁離断 左半球優位症状と右半球優位症状、脳梁の機能局在
- 第12回 脳外傷 脳外傷の基本概念と症状、コミュニケーション障害
- 第13回 画像診断学（1） 脳画像検査の種類と特徴 水平断における主な脳溝と脳回の同定
- 第14回 画像診断学（2） 水平断、冠状断、矢状断における主要領域の同定
- 第15回 画像診断学（3） 画像からの高次脳機能障害の診断予測

■ 評 価 方 法

定期試験80%、小テストと提出課題20%

■ 教 科 書

書名：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学
 著者名：藤田郁代 監修
 出版社：医学書院

書名：「高次脳機能障害マエストロシリーズ②画像の見かた使い方」
 著者名：三村將、ほか著
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

書名：高次脳機能障害
 著者名：石合純夫著
 出版社：医歯薬出版株式会社

書名：「高次脳機能障害ポケットマニュアル」
 著者名：原寛美 監修
 出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	言語発達障害 I (援助法-基礎)	担当者	齋藤典昭・工藤芳幸		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

対人援助職として仕事を進めていく上で必要な基礎技術（コミュニケーションスキル、観察技術、観察した事柄を記述する技術など）について学ぶ。

■ 目 標

1. 臨床実習 I で適切な接遇ができる
2. 臨床実習 I で困難なく日誌を作成できる

■ 授 業 計 画

第1回	上手なコミュニケーションについて学ぶ	その1	挨拶, 非言語的技術, 言語的技術
第2回	上手なコミュニケーションについて学ぶ	その2	傾聴, 共感, 返信
第3回	上手なコミュニケーションについて学ぶ	その3	心理的防衛機制, コーピングスタイル, リフレーミング
第4回	上手なコミュニケーションについて学ぶ	その4	転移, 患者さんの理解度をアップするスキル
第5回	上手なコミュニケーションについて学ぶ	その5	危機的状態の患者心理を理解する
第6回	上手なコミュニケーションについて学ぶ	その6	面接の逐語録を読んで考える
第7回	上手なコミュニケーションについて学ぶ	その6	面接の逐語録を読んで考える
第8回	観察記録の文章作成法 (講義・演習)		
第9回	観察記録の視点 (保育所見学実習に向けて)・文章作成法演習		
第10回	観察記録のまとめ方 1 (保育所見学実習の記録を用いた演習・記録を再検討する)		
第11回	観察記録のまとめ方 2 (保育所見学実習の記録を用いた演習・リライトする)		
第12回	複数の事象の関係をまとめる・実践に向けた記録法 (講義・演習)		
第13回	ロールプレイ・VTR 視聴を用いた観察記録演習 1 (ライブで記録を取る)		
第14回	ロールプレイ・VTR 視聴を用いた観察記録演習 2 (リライトする)		
第15回	ロールプレイ・VTR 視聴を用いた観察記録園主 3 (ライブで記録を取り、整理する)		

■ 評 価 方 法

上手なコミュニケーションについては、知識を問う筆記試験50%、記録法については提出物30%、筆記試験20%

■ 教 科 書

書 名：24の臨床シーンでわかるコミュニケーションの上手な方法
 著者名：保坂 隆 監修, 町田いづみ著
 出版社：照林社

■ 参 考 書

書 名：逐語で学ぶ21の技法 対人援助のための相談面接技術
 著者名：岩間伸之
 出版社：中央法規

書 名：子ども理解のメソッドロジー 実践者のための「質的实践研究」ガイドブック
 著者名：中坪史典
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 留 意 事 項

後半の記録法については、適宜ハンドアウトを配布する。

授業科目	言語発達障害Ⅱ（概論）	担当者	吉田 紀子・齋藤 典昭		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語発達障害の基礎的な概念と、各障害の特性を学ぶ。
 保育への参加をとおして子どもについての知識を広げ、記録を作成する。

■ 目 標

さまざまな言語発達障害の概念と特性を理解する。
 各々の言語発達障害について概要を説明することができる。
 子どもの遊びや様子を観察して記録することができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 小児の発達と言語発達障害（吉田）
- 第2回 精神遅滞（知的障害）（吉田）
- 第3回 広汎性発達障害①（吉田）
- 第4回 広汎性発達障害②（吉田）
- 第5回 注意欠陥／多動性障害①（吉田）
- 第6回 注意欠陥／多動性障害②（吉田）
- 第7回 学習障害、発達性読み書き障害（吉田）
- 第8回 学習障害、発達性読み書き障害（吉田）
- 第9回 特異的言語発達障害（吉田）
- 第10回 言語発達障害のまとめ（吉田）
- 第11回 保育所見学学習 観察記録提出（齋藤）
- 第12回 姿勢・運動の発達と脳性麻痺（齋藤）
- 第13回 脳性麻痺 概念（齋藤）
- 第14回 脳性麻痺 生活上の困難性（齋藤）
- 第15回 拡大・代替コミュニケーション（AAC） 概要（齋藤）

■ 評 価 方 法

筆記試験 100%

■ 教 科 書

齋藤 書 名：絵でわかる言語障害
 著者名：毛束真知子
 出版社：学研

吉田 書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学
 著者名：藤田郁代 監修
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

齋藤 書 名：よくわかる発達障害第2版
著者名：小野次朗, 上野一彦, 藤田継道ほか
出版社：ミネルヴァ書房

齋藤 書 名：作業療法士が行う IT 活用支援
著者名：宮永敬市ほか
出版社：医歯薬出版

齋藤 書 名：ダウン症の子どもが生き生きと育つ ことばとコミュニケーション
著者名：リビー・クミン 著 梅村浄 訳
出版社：メディカ出版

■ 留 意 事 項

保育所見学学習での記録は、言語発達障害 I の授業とリンクしています。

授業科目	言語発達障害Ⅲ (評価法-基礎)	担当者	山本 良平		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

新版 K 式発達検査2001を基礎に、前半は乳幼児の評価について「姿勢-運動領域」「認知-適応領域」「言語-社会領域」の各項目を詳細に学ぶ。後半は VTR 他の資料を使い演習を行う。

■ 目 標

検査の実施手続きを習得する、
 発達年齢、発達指数の計算ができる。
 プロフィールの作成ができる。

■ 授業計画

第1回	新版 K 式発達検査2001	姿勢-運動領域	その1
第2回	新版 K 式発達検査2001	姿勢-運動領域	その2
第3回	新版 K 式発達検査2001	姿勢-運動領域	その3
第4回	新版 K 式発達検査2001	認知-適応領域	その1
第5回	新版 K 式発達検査2001	認知-適応領域	その2
第6回	新版 K 式発達検査2001	認知-適応領域	その3
第7回	新版 K 式発達検査2001	言語-社会領域	その1
第8回	新版 K 式発達検査2001	言語-社会領域	その2
第9回	新版 K 式発達検査2001	言語-社会領域	その3
第10回	テキストデータによる検査用紙への記入方法と発達年齢・指数計算・プロフィール作成		
第11回	テキストデータによる検査結果解釈・所見作成		
第12回	VTR を用いた検査用紙への記入と発達年齢・指数計算・プロフィール作成		
第13回	VTR を用いた検査結果による所見作成・解釈・フィードバック		
第14回	学生同士でのロールプレイによる検査実施練習 その1 (実施法)		
第15回	学生同士でのロールプレイによる検査実施練習 その2 (実施法)		

■ 評価方法

課題評価100%：検査のテキストデータをもとにして、プロフィール及び所見を作成する

■ 教科書

書 名：新版 K 式発達検査2001検査マニュアル

出版社：京都国際社会福祉センター

書 名：写真でみる乳幼児健診の神経学的チェック法

著者名：前川喜平，小枝達也

出版社：南山堂

書 名：心理学実習 応用編 知能・発達検査実習

著者名：高石浩一，大島剛，川畑隆

出版社：培風館

■ 参 考 書

書 名：子どもの発達と診断 1～5

著者名：田中昌人, 田中杉恵

出版社：大月書店

書 名：240動画でわかる 赤ちゃんの発達地図

著者名：木原秀樹

出版社：メディカ出版

■ 留 意 事 項

授業科目	言語発達障害Ⅳ（評価法－各論）	担当者	工藤芳幸・齋藤典昭・國吉京子		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

前半は言語検査として「国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査」、発達検査として「乳幼児精神発達検査（質問紙法）」、スクリーニング検査として「ことばのテスト絵本」について学ぶ。後半は言語発達障害－Ⅲで学んだ内容を踏まえ、理解を更に深めて実技を行う。第8回～11回、第12回～15回は、それぞれ4コマ連続の実技・グループワーク形式で、実際にお子さんに新版K式発達検査2001を実施してもらい、所見作成までを行なう。

■ 目 標

新版K式発達検査2001を実施することができる
所見を作成することができる

■ 授 業 計 画

第1回	国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査	考え方と理論（齋藤）
第2回	国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査	考え方と理論, 学生同士で演習（音声記号獲得以降）（齋藤）
第3回	国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査	学生同士で演習（音声記号獲得以降・獲得以前）（齋藤）
第4回	国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査	ロールプレイ（齋藤）
第5回	国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査	記録方法, 検査のまとめ, 評価のまとめ（齋藤）
第6回	ことばのテスト絵本（國吉）	
第7回	乳幼児精神発達検査（國吉）	
第8回	新版K式発達検査2001検査実技（齋藤・工藤）	
第9回	新版K式発達検査2001プロフィール作成（齋藤・工藤）	
第10回	所見作成（齋藤・工藤）	
第11回	所見作成（齋藤・工藤）	
第12回	新版K式発達検査2001検査実技（齋藤・工藤）	
第13回	新版K式発達検査2001プロフィール作成（齋藤・工藤）	
第14回	所見作成（齋藤・工藤）	
第15回	所見作成（齋藤・工藤）	

■ 評 価 方 法

提出課題 100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

書名：発達相談と援助 新版K式発達検査2001を用いた心理臨床
著者名：川畑隆, 菅野道英, 大島剛ほか
出版社：ミネルヴァ書房

書名：新版K式発達検査法2001年版 発達のアセスメントと支援
著者名：松下裕, 郷間英世
出版社：ナカニシヤ出版

書名：言語発達遅滞の言語治療 改訂第2版
著者名：小寺富子
出版社：診断と治療社

■ 留 意 事 項

授業科目	言語発達障害Ⅱ	担当者	齋藤典昭・工藤芳幸・中山清司 ほか		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	必修

■ 内 容

各言語発達障害児に対する支援プログラムについて学ぶ。

PIC シンボルを使ったコミュニケーション支援の意義、指導方法、事例を学習する。具体的には、AAC とシンボルの概要、PIC シンボルの概要と特徴、指導方法、PIC シンボルを使った知的障害、自閉症、失語症等の実践事例、教材教具の紹介。

■ 目 標

発達障害についての知識を深める。

言語発達障害児の指導計画の立案ができるようになる。

各種 AAC 手段の特徴や指導方法を理解する。

PIC シンボルを使用したコミュニケーション支援の意義と指導方法を知り、実践に活かす方法を理解する。

■ 授 業 計 画

第1回	広汎性発達障害の定義		
第2回	広汎性発達障害の行動・認知特性		
第3回	自閉症スペクトラム概念と基礎理論		
第4回	自閉症をめぐる諸理論		
第5回	自閉症スペクトラムのアセスメントと支援：関係論的な立場から		
第6回	学習障害の定義と原因		
第7回	学習障害をめぐる諸理論		
第8回	学習障害の特性に合わせた支援		
第9回	特異的言語発達障害をめぐる理論と支援		
第10回	注意欠陥多動性障害をめぐる理論と支援		
第11回	発達障害のライフステージに応じた援助	その1	乳幼児期
第12回	発達障害のライフステージに応じた援助	その2	学齢期
第13回	発達障害のライフステージに応じた援助	その3	思春期
第14回	発達障害のライフステージに応じた援助	その4	成人期
第15回	様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える		評価のまとめ→訓練目標
第16回	様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える		訓練目標→セッションプログラム
第17回	様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える		評価のまとめ→教材作成
第18回	様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える		評価のまとめ→教材作成
第19回	様々な訓練課題に応じて必要となる教材について、作成を通して考える		評価のまとめ→教材作成 →発表・質疑応答
第20回	AAC とシンボルの概要、PIC シンボルの概要と特徴		
第21回	PIC シンボルを使った指導方法		
第22回	事例、知的障害と自閉症		
第23回	事例：失語症 教材、教具の紹介		
第24回	マカトンサイン、サウンズ&シンボル	AAC 概論	
第25回	マカトンサイン、サウンズ&シンボル	理論	
第26回	マカトンサイン、サウンズ&シンボル	演習	
第27回	マカトンサイン、サウンズ&シンボル	理論	
第28回	マカトンサイン、サウンズ&シンボル	演習	
第29回	マカトンサイン、サウンズ&シンボル	当事者の方に来ていただき演習	
第30回	マカトンサイン、サウンズ&シンボル	当事者の方に来ていただき演習	

■ 評価方法

筆記試験50%, グループワーク50%

■ 教科書

中山

書名：自閉症支援のスタンダード Ver. 1 保留中 3月1日に決定予定

著者名：中山清司ほか

出版社：自閉症 e サービス

■ 参考書

書名：言語発達遅滞訓練マニュアル<1><2>

著者名：佐竹恒夫, 小寺富子, 倉井成子, 東江浩美, 那須道子

出版社：エスコアール

書名：日本語版 PIC 活用編

著者名：藤澤和子

出版社：ブレイン出版

書名：言語発達遅滞訓練ガイドンス

著者名：佐竹恒夫, 小寺富子, 倉井成子

出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	音声障害	担当者	城本 修・ST 教員		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

城本：1. 正常な発声の仕組みを学ぶ。 2. 声の調節の仕方を学ぶ。 3. 病的な喉頭と音声障害のメカニズムを学ぶ。 4. 音声障害の治療方法について学ぶ。
ST 教員：食道発声教室の見学及び音声言語障害に関する国家試験対策を行う。

■ 目 標

城本：正常な喉頭の解剖と生理が理解でき、音声障害が生じるメカニズムを説明できる。さらに、様々な音声障害に対する治療方法について理論的な原理を学ぶ。
ST 教員：喉頭摘出者の音声とその習得について理解を深める。
言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 正常な呼吸器の解剖と生理（城本）
- 第2回 正常な喉頭の解剖と生理（城本）
- 第3回 正常な発声の仕組みと声の調節の仕方（城本）
- 第4回 声の評価方法 1. インテーク 2. 聴覚心理的評価（城本）
- 第5回 声の評価方法 3. 喉頭視診 4. 空気力学的評価 5. 音響学的評価（城本）
- 第6回 音声障害の種類と特徴 1. 喉頭の視診上の病変 2. 喉頭運動障害 3. 喉頭病変のない音声障害（城本）
- 第7回 音声障害の治療方法について 1. 医学的治療 2. 行動学的治療（城本）
- 第8回 音声治療の原則と適応（城本）
- 第9回 病態対処的音声治療技法（城本）
- 第10回 病態対処的音声治療技法（城本）
- 第11回 包括的音声治療技法（城本）
- 第12回 包括的音声治療技法（城本）
- 第13回 特殊な音声障害への対応（城本）
- 第14回 喉摘出者の音声指導（城本）
- 第15回 まとめ（城本）
- 第16回 食道発声教室の見学（ST 教員）
- 第17回 食道発声教室の見学（ST 教員）
- 第18回 音声言語障害領域に関する国家試験対策（ST 教員）
- 第19回 音声言語障害領域に関する国家試験対策（ST 教員）
- 第20回 音声言語障害領域に関する国家試験対策（ST 教員）
- 第21回 音声言語障害領域に関する国家試験対策（ST 教員）
- 第22回 音声言語障害領域に関する国家試験対策（ST 教員）
- 第23回 音声言語障害領域に関する国家試験対策（ST 教員）

■ 評価方法

レポート 60%, 筆記試験 40%

■ 教 科 書

書 名：改訂 音声障害
著者名：苺安誠, 城本修編
出版社：建帛社

■ 参 考 書

書 名：ST のための音声障害診療マニュアル

著者名：廣瀬肇監

出版社：インテルナ出版

書 名：実践音声治療マニュアル

著者名：城本修，生井友紀子訳

出版社：インテルナ出版

■ 留 意 事 項

授業科目	構音障害 I (臨床の基礎)	担当者	松本 治雄		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

話しことばの三要素である「音声」「構音」「パタン」のうち、構音の障害はもっとも中核をなす障害要因である。言語聴覚士の仕事の中軸は構音指導であるとも言える。日本語による音声コミュニケーションの確立を目指すには日本語の音声学的な構造を知り、それを体得することにより、言語治療が成り立つといえる。

■ 目 標

本講義は機能性構音障害を取り上げて言語聴覚士が基本として体得しておくべき内容を演習的に習得することを目指している。

■ 授 業 計 画

- 第1回 障害児の音声の聞き取りと構音障害の定義
- 第2回 発声発語の仕組みと各器官の機能、名称
- 第3回 日本語音声学の成り立ち (母音)
- 第4回 日本語音声学の成り立ち (子音)
- 第5回 日本語音声学の成り立ち (五十音表の音声学的検討)
- 第6回 構音障害児の評価1 (構音障害に関わる要因)
- 第7回 構音障害児の評価2 (構音検査の種類と目的)
- 第8回 構音障害児の評価3 (異常構音の種類と聞き取り演習)
- 第9回 構音障害児の評価4 (情報のまとめと分析)
- 第10回 構音障害児の指導1 (指導の段階1)
- 第11回 構音障害児の指導2 (指導の段階2)
- 第12回 構音障害児の指導3 (事例による演習1)
- 第13回 構音障害児の指導4 (事例による演習2)
- 第14回 構音障害指導に関する総まとめ
- 第15回 テスト

■ 評 価 方 法

平常点とレポート (10%)、期末テスト (90%) を加味して評価する予定

■ 教 科 書

書 名：改訂機能性構音障害
 著者名：本間慎治編著
 出版社：建帛社

■ 参 考 書

書 名：発声発語障害学
 著者名：熊倉勇美他編著
 出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

受講に際しては知識として頭で覚えるのではなく、聴覚、視覚、触覚、筋運動覚を駆使して身体で身につけてもらうことを目指している

授業科目	構音障害Ⅱ（機能性）	担当者	吉田 紀子		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語の音声や子どもの言語・構音の発達をふまえ、機能性構音障害の基礎知識および評価、指導法を学ぶ。また音声の聴取、指導法の演習を行う。

■ 目 標

音声を聴き取り、表記することができる。
機能性構音障害と他の言語発達障害を鑑別し、適切な評価および指導ができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 構音障害とは
- 第2回 日本語の音声
- 第3回 幼児期の言語発達と構音発達
- 第4回 機能性構音障害および関連疾患について
- 第5回 構音の誤りの分類
- 第6回 機能性構音障害の評価～指導の流れ
- 第7回 機能性構音障害の評価
- 第8回 構音検査（演習）
- 第9回 構音の聴取および分析（演習）
- 第10回 機能性構音障害の指導
- 第11回 構音指導方法①（演習）
- 第12回 構音指導方法②（演習）
- 第13回 ケーススタディ①
- 第14回 ケーススタディ②
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

筆記試験 100%

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法シリーズ 改訂機能性構音障害
著者名：本間 慎治
出版社：建帛社

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	構音障害Ⅲ (器質性)	担当者	藤原 百合		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

器質性構音障害（口蓋裂）について、基礎的知識、口蓋裂言語の評価・分析・訓練方法、チームアプローチの重要性を理解する

■ 目 標

- ・口蓋裂に伴う様々な問題点を理解できる
- ・鼻咽腔閉鎖機能および構音の評価ができる
- ・評価に基づき治療方針を考えることができる
- ・チームアプローチの重要性と言語聴覚士の役割を理解できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 ・正常な発話運動について ・器質性構音障害の定義とその種類
- 第2回 口蓋裂言語の特徴：共鳴の異状、構音の異常
- 第3回 評価：口腔顔面の形態・機能
- 第4回 評価：鼻咽腔閉鎖機能
- 第5回 評価：構音の聴覚的印象
- 第6回 評価：エレクトロパラトグラフィ（EPG）を用いた構音動態
- 第7回 訓練：機能訓練
- 第8回 訓練：系統的構音訓練
- 第9回 訓練：機器を用いた訓練方法
- 第10回 口蓋裂に伴う、その他の問題（発達、聴覚、心理社会的問題）
- 第11回 口蓋裂治療におけるチームアプローチと言語聴覚士の役割
- 第12回 演習：構音の聴覚的評価
- 第13回 演習：症例
- 第14回 演習：症例
- 第15回 口蓋裂治療のまとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 発声発語障害学
 著者名：シリーズ監修：藤田郁代 編集：熊倉勇美、小林範子、今井智子
 出版社：医学書院

■ 参 考 書

書 名：DVD:目で見える日本語音の産生 エレクトロパラトグラフィ（EPG）を用いて
 著者名：EPG研究会
 出版社：エスコアール

書 名：口蓋裂言語検査（言語臨床用）
 著者名：日本コミュニケーション障害学会

■ 留 意 事 項

授業科目	構音障害Ⅳ (運動障害性)	担当者	熊倉 勇美		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

わが国では構音障害は機能性構音障害、器質性構音障害、運動障害性構音障害の3つに分けて論じられる。本講義では、これらの中から器質性構音障害（口腔・中咽頭がんなどの治療後に発生する後天性のもの）と、運動障害性構音障害を対象とする。これらの障害について画像・音声を提示しながら評価、訓練、予後などについて具体的に講義する。

■ 目 標

構音障害患者のコミュニケーションの問題がどのようにして発生するのか。発話の問題点を呼吸・発声・構音・共鳴・プロソディという視点で分析し、明瞭度、異常度というスケールで表現する方法などを学ぶ。検査法の実習も行う。次いで具体的なタイプ別の訓練法を実習で経験し、患者への実際的な対応が出来ることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 発話のしくみと構音障害を学ぶ
- 第2回 運動障害性構音障害の仕組みと発話症状：①痙性構音障害、②弛緩性構音障害
- 第3回 続き：③失調性構音障害 ④運動低下性構音障害
- 第4回 続き：⑤運動亢進性構音障害 ⑥混合性構音障害
- 第5回 意識障害、認知症、失語症などとの鑑別診断
- 第6回 評価の方法を学ぶ：SLTA-ST、AMSD など
- 第7回 訓練の方法を学ぶ：訓練法のさまざま
- 第8回 続き：訓練法
- 第9回 拡大・代替コミュニケーション
- 第10回 患者と家族の問題を理解し、ST の役割を理解する
- 第11回 1. 運動障害性構音障害と器質性構音障害の違い 2. 頭頸部の解剖学
- 第12回 3. がんの治療（放射線治療、化学療法、外科治療）
- 第13回 4. 構音障害と患者の抱える問題
- 第14回 5. ST の果たす役割（①評価 ②訓練）
- 第15回 6. 補綴治療と ST の役割

■ 評 価 方 法

筆記試験100%

■ 教 科 書

書 名：改訂運動障害性構音障害
 著者名：熊倉勇美編著
 出版社：建帛社

書 名：口腔・中咽頭がんのリハビリテーション：構音障害、摂食・嚥下障害
 著者名：溝尻源太郎・熊倉勇美編著
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 書

書 名：がん闘病とコメディカル：医療最前線からの提言
 著者名：福原麻希
 出版社：講談社現代新書

■ 留 意 事 項

--

授業科目	構音障害Ⅱ	担当者	福永真哉・前田留美子・山本一郎		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期・後期	選択・必修	選択

■ 内 容

- ・ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた訓練法について解説する。（福永）
- ・発声発語・嚥下障害学分野の国家試験対策を行う。（前田）
- ・口腔の果たす2大機能である食べるということ、話すことについてその発生と発達について学ぶ。（山本）

■ 目 標

- ・ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。ディサースリアの検査の評価データから総合的な分析を適切に行ない、訓練立案が出来るようにする。（福永）
- ・発声発語・嚥下障害学分野の国家試験問題を解くために必要な知識を身につける。（前田）
- ・口腔機能を発生と発達の視点から学び、様々な病態に対処できる知識を養う。（山本）

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について（福永）
- 第2回 呼吸機能の治療アプローチ（福永）
- 第3回 発声機能の治療アプローチ（福永）
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ（福永）
- 第5回 口腔構音機能の治療アプローチ（福永）
- 第6回 発話速度の調節法1（福永）
- 第7回 発話速度の調節法2、構音訓練、プロソディ訓練など（福永）
- 第8回 ディサースリア訓練法全般についてのまとめ（福永）
- 第9回 発声発語・嚥下障害学分野の国家試験対策（前田）
- 第10回 発声発語・嚥下障害学分野の国家試験対策（前田）
- 第11回 発声発語・嚥下障害学分野の国家試験対策（前田）
- 第12回 発声発語・嚥下障害学分野の国家試験対策（前田）
- 第13回 顔面・口腔の発生
口腔機能の発達（山本）
- 第14回 唇顎口蓋裂児における哺乳・摂食障害とその対処法（山本）
- 第15回 唇顎口蓋裂児における異常構音の分析と治療について
エレクトロパラトグラフィー（EPG）を用いた異常構音の分析と治療について（山本）

■ 評 価 方 法

定期試験100%

■ 教 科 書

書名：ディサースリア標準テキスト
著者名：西尾正輝
出版社：医歯薬出版

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

講義では教科書のみならず、プリント等も多く使用して行う。

授業科目	嚥下障害 I (基礎と評価)	担当者	前田 留美子		
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

正常嚥下のメカニズムや嚥下障害の評価等基本的な事項について学ぶ

■ 目 標

嚥下障害の基礎的な知識を理解する

検査を実施できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 嚥下障害総論 (前田留美子)
- 第2回 事例紹介 (前田留美子)
- 第3回 グループディスカッション (前田留美子)
- 第4回 摂食・嚥下のメカニズム① (前田留美子)
- 第5回 摂食・嚥下のメカニズム② (前田留美子)
- 第6回 摂食・嚥下のメカニズム③ (前田留美子)
- 第7回 摂食・嚥下のメカニズム④ (前田留美子)
- 第8回 情報収集・問診と観察① (前田留美子)
- 第9回 情報収集・問診と観察② (前田留美子)
- 第10回 各部位の評価① (前田留美子)
- 第11回 各部位の評価② (前田留美子)
- 第12回 嚥下障害のスクリーニングテスト① (前田留美子)
- 第13回 嚥下障害のスクリーニングテスト② (前田留美子)
- 第14回 嚥下障害のスクリーニングテスト③ (前田留美子)
- 第15回 実技演習 (前田留美子)

■ 評 価 方 法

記述試験 (再試は1回実施) と嚥下障害の評価に関する実技試験 (再試は1回まで実施) の点数を合算し、百分率で表した点数で評価する。記述試験と実技試験の両方に合格しなければ単位認定の対象としない。

■ 教 科 書

書 名：「動画でわかる摂食・嚥下リハビリテーション」
 著者名：藤島一郎、柴本勇監修
 出版社：中山書店

■ 参 考 書

書 名：「嚥下障害ポケットマニュアル 第3版」
 著者名：聖隷三方原病院嚥下チーム
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

授業科目	嚥下障害Ⅱ（訓練と画像診断）	担当者	田上 恵美子・戸倉 晶子		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下障害の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える
嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の目的、手順、評価方法について学習し、実際の画像を用いて症例検討を行う。

■ 目 標

摂食・嚥下障害の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える
VF・VEの評価方法を習得し、嚥下障害の症状を理解できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 嚥下関連筋の解剖、呼吸・構音器官評価の復習（田上恵美子）
- 第2回 間接訓練（呼吸筋・呼吸・咳嗽・息こらえ・pushing・pullingなど）演習（田上恵美子）
- 第3回 間接訓練（頸部・顎・シャキア・メンデルソンなど）演習（田上恵美子）
- 第4回 間接訓練（舌・口唇・軟口蓋・ガムラビングなど）演習（田上恵美子）
- 第5回 直接訓練（頸部聴診・意識嚥下・横向き嚥下・ひと口量・丸のみ・顎引き・頭頸部など）（田上恵美子）
- 第6回 直接訓練（複数回嚥下・交互嚥下・一側嚥下・姿勢など）演習（田上恵美子）
- 第7回 訓練周辺事項（バルーン・カニューレなど）とチームアプローチ（田上恵美子）
- 第8回 経口移行の目安と訓練計画、その他まとめ（田上恵美子）
- 第9回 嚥下造影検査の目的・手順について（戸倉晶子）
- 第10回 嚥下造影検査の評価①（戸倉晶子）
- 第11回 嚥下造影検査の評価②（戸倉晶子）
- 第12回 症例検討①（戸倉晶子）
- 第13回 症例検討②（戸倉晶子）
- 第14回 嚥下内視鏡検査の目的・手順について、評価①（戸倉晶子）
- 第15回 嚥下内視鏡検査の評価②、VFとVEの比較（戸倉晶子）

■ 評価方法

記述試験（再試は1回実施）と嚥下障害の訓練に関する実技試験（再試は1回まで実施）の点数を合算し、百分率で表した点数で評価する。記述試験と実技試験の両方に合格しなければ単位認定の対象としない。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

- 書名：「脳卒中の摂食・嚥下障害 第2版」
著者名：藤島一郎
出版社：医歯薬出版
-
- 書名：「目で見える嚥下障害－嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として」
著者名：藤島一郎
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

授業科目	嚥下障害Ⅱ	担当者	田上恵美子・糸田昌隆・前田留美子		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

摂食・嚥下リハビリテーションの取り組みの実際について学ぶ
成人・高齢者における摂食・嚥下障害の病態診断とリハビリテーション

■ 目 標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる
卒後、臨床での実践のためのスキルアップと国家試験合格にむけた基礎的事項の習熟

■ 授業計画

- 第1回 変性疾患の嚥下障害概論（田上恵美子）
- 第2回 ALS 事例による嚥下リハの進め方（田上恵美子）
- 第3回 ALS 事例に対する意思伝達演習（空書・読唇・50音表・透明版・読み上げ法）（田上恵美子）
- 第4回 パーキンソン病事例による嚥下リハの進め方（田上恵美子）
- 第5回 多系統萎縮症・筋ジストロフィー・重症筋無力症などの事例による嚥下リハの進め方（田上恵美子）
- 第6回 ST 訪問訓練について、その実際と課題（田上恵美子）
- 第7回 事例による嚥下リハの進め方（脳血管障害・廃用症候群）（前田留美子）
- 第8回 事例による嚥下リハの進め方（脳血管障害・廃用症候群）（前田留美子）
- 第9回 摂食・嚥下障害の社会的背景（糸田昌隆）
- 第10回 生理・解剖学的正常嚥下について（糸田昌隆）
- 第11回 咀嚼・嚥下運動の中樞神経・筋機構（糸田昌隆）
- 第12回 成人・高齢者の嚥下障害の病態診断（糸田昌隆）
- 第13回 摂食・嚥下障害のリハビリテーション（糸田昌隆）
- 第14回 摂食・嚥下障害のリハビリテーションⅡと栄養管理（糸田昌隆）
- 第15回 嚥下障害の周辺事項（グループワーク：症例検討 or 倫理問題）と国家試験対策（糸田昌隆）

■ 評価方法

試験100%

■ 教 科 書

田上
書 名：ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション in DVD ～50症例から学ぶ実践的アプローチ～
著者名：里宇明元，藤原俊之監修
出版社：医歯薬出版

■ 参 考 書

書 名：事例でわかる摂食・嚥下リハビリテーション 現場力を高めるヒント
著者名：出江紳一、近藤健男、瀬田拓 編集
出版社：中央法規

■ 留 意 事 項

授業科目	吃音	担当者	非公表		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

吃音は発話症状だけでなく身体的症状、心理的症状があり、しかも症状が進展したり戻ったりする。本人の心理的状态は他者との関わりによって、変化し、社会的場面か個人的場面かによっても変化する。このように他の言語障害にはない特徴を理解した上で、何を治療の対象とし、どのような方法を用いるかを学習する。

■ 目 標

吃音の基礎知識と臨床の基本的能力を習得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 吃音の定義、発生率、有病率、進展段階
- 第2回 吃音の症状（獲得性吃音の症状も含む）
- 第3回 吃音の原因論
- 第4回 指導・訓練法（直接法）
- 第5回 指導・訓練法（環境調整法）
- 第6回 指導・訓練法（間接法）
- 第7回 指導・訓練法（間接法）
- 第8回 指導・訓練法（間接法）

■ 評 価 方 法

定期試験100%

■ 教 科 書

書名：言語聴覚療法シリーズ13 改訂吃音
 著者名：都筑澄夫編著
 出版社：建帛社

■ 参 考 書

書名：吃音の基礎と臨床
 著者名：バリー・ギター著、長澤泰子監訳
 出版社：学苑社

■ 留 意 事 項

この授業では吃音を持つ人の状態を把握し、理論的に対処することを学びます。まず幼児期から成人期までに吃音がどのように変わっていくかを把握するために、教科書の第1章を読み、感想文を第1回目の授業で提出してください。（A4用紙、枚数自由）

授業科目	聴覚障害Ⅱ（聴覚検査法）	担当者	福田章一郎・長知子・田村薫 野田祥子・矢吹裕栄・山口忍		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	2単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚の検査法とその評価、及び聴覚発達を中心とした援助について講義を行う。

■ 目 標

聴覚障害を有する対象者に基本的な検査が実施でき、その結果を評価するとともに、発達を含めた援助を提案することができるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 乳幼児の難聴の基礎と聴覚に関する全般について解説する（福田）
- 第2回 聴覚障害児の早期発見と新生児聴覚スクリーニングの目的と意義について解説する（福田）
- 第3回 難聴の原因やリスクファクターと遺伝および症候性難聴の特徴について解説する（福田）
- 第4回 乳幼児の聴覚検査の種類とその特徴ならびにそれぞれの方法および留意点について解説する（福田）
- 第5回 乳幼児の補聴の必要性和その方法および評価法ならびに補聴手段の種類と特徴や補聴補助システムについて解説する（福田）
- 第6回 聴覚障害児への初期介入および療育法の種類と内容について聴力程度、発達などを考慮しながら解説する（福田）
- 第7回 聴覚障害の原因疾患（矢吹）
- 第8回 聴覚器・疾患・検査結果の関連（矢吹）
- 第9回 人工内耳の仕組み1（矢吹）
- 第10回 人工内耳の仕組み2（矢吹）
- 第11回 マスキングとは（矢吹）
- 第12回 マスキングの考え方（矢吹）
- 第13回 マスキングの考え方2（矢吹）
- 第14回 標準聴力検査について（野田または田村）
- 第15回 標準聴力検査の検査演習（野田または田村）
- 第16回 Bekesy 検査について（野田または田村）
- 第17回 Bekesy 検査の演習（野田または田村）
- 第18回 閾値上聴覚検査について（野田または田村）
- 第19回 閾値上聴覚検査の演習（野田または田村）
- 第20回 聴性脳幹反応の測定方法（野田または田村）
- 第21回 聴性脳幹反応の検査演習（野田または田村）
- 第22回 インピーダンスオージオメータについて（野田または田村）
- 第23回 語音聴力検査について（野田または田村）
- 第24回 聴覚検査結果の解説 検査の目的とその意義について 症例提示①（長）
- 第25回 聴覚検査結果の解説 検査の目的とその意義について 症例提示②（長）
- 第26回 幼小児の聴力検査（山口）
- 第27回 幼小児の聴力検査（山口）
- 第28回 臨床の実際－発達遅滞の聴力評価－（山口）
- 第29回 臨床の実際－補聴器のフィッティング－（山口）
- 第30回 まとめ（山口）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 教科書

書名：聴覚検査の実際（改訂3版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

出版社：医学書院

書名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山 稔

出版社：医学書院

書名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	聴覚障害 I (概論)	担当者	矢吹 裕栄・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・聴覚障害学の基礎となる聴覚の器官の解剖と機能を確認し、難聴と聴覚検査との関係を学習する。(矢吹)
- ・成人聴覚障害の病態を知り、検査及び評価について学ぶ。(山口)

■ 目 標

- ・聴こえの仕組みの基礎知識を習得する。難聴の分類と聴覚検査法の基礎を習得し、検査結果から難聴のタイプを推定できるようになる。(矢吹)
- ・聴覚障害をきたす疾患を知り、必要な検査の選択と評価を理解する。(山口)

■ 授 業 計 画

- 第1回 基礎用語の確認 音とは何か、「きこえる」ということ。(矢吹)
- 第2回 聴覚器の解剖 外耳・中耳の解剖と機能 (矢吹)
- 第3回 聴覚器の解剖 内耳の解剖・機能 (矢吹)
- 第4回 前半のまとめと復習 (矢吹)
- 第5回 聴覚障害とは何か (矢吹)
- 第6回 難聴の分類 (矢吹)
- 第7回 聴覚検査法1 (矢吹)
- 第8回 聴覚検査法2 (矢吹)
- 第9回 聴覚障害の実態 (山口)
- 第10回 聴覚障害をきたす疾患 (山口)
- 第11回 聴覚障害への対応 (山口)
- 第12回 補聴器の仕組みと適応 (山口)
- 第13回 人工内耳の仕組みと適応 (山口)
- 第14回 聴力検査の復習と結果の見方 (山口)
- 第15回 まとめ (山口)

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 教 科 書

書 名：聴覚検査の実際 (改訂3版)

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

出版社：医学書院

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山 稔

出版社：医学書院

書 名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	成人聴覚障害Ⅱ	担当者	田中美郷・大森千代美・箕谷健三・山口忍		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・人間の聴覚を脳の側から、聴覚機能の発達と言語との関係、手話の重要性、ノーマライゼーションにまで及んで講義する。(田中)
- ・聴覚障害乳幼児の療育について講義する。(大森)
- ・聴覚学習、補聴支援機器の装用指導、聴覚障害者の教育課程などについて学ぶ(箕谷)
- ・聴覚障害の臨床の目的と実際について学ぶ。(山口)

■ 目 標

- ・聴覚障害を診るのではなく聴覚障害者(児)を診るための姿勢を養う。(田中)
- ・聴覚障害乳幼児のこばを育てるための発達支援はどのようにあるべきかを学ぶ。(大森)
- ・聴覚障害教育の実態を知り、成人聴覚障害の理解を深める。(箕谷)
- ・聴覚障害児・者の適切な援助について、検査結果をふまえ適切な援助について提案できるようになる。(山口)

■ 授 業 計 画

- 第1回 「聴覚障害を診る」と「聴覚障害者(児)を診る」の違い(田中)
- 第2回 言語とその構造：音声言語と手話言語の比較(田中)
- 第3回 言語獲得：聴覚言語も視覚言語もその心理学的プロセスは同じ(田中)
- 第4回 聴覚障害の早期検出・早期診断法(田中)
- 第5回 人間の聴覚機能(田中)
- 第6回 聴覚活用法について(田中)
- 第7回 早期療育の成果とこれによって判ってきたこと(田中)
- 第8回 早期療育支援法(田中)
- 第9回 人工内耳について(田中)
- 第10回 聴覚障害児教育の難しさ、奥深さと何を目標とすべきか(田中)
- 第11回 聴覚障害乳幼児の発見について(大森)
- 第12回 聴覚障害乳幼児のこばを育てるために大切なこと(大森)
- 第13回 聴覚障害乳幼児の療育の実際①(大森)
- 第14回 聴覚障害乳幼児の療育の実際②(大森)
- 第15回 聴覚障害教育について(聴覚障害教育の歴史、聴覚障害教育の教育課程と現状など)(箕谷)
- 第16回 聴覚障害児の補聴器装用指導について(聴覚学習、補聴器フィッティングの基本的な考え方)(箕谷)
- 第17回 聴覚管理と補聴器管理、保護者支援などについて(箕谷)
- 第18回 聴覚障害の心理的援助1(山口)
- 第19回 聴覚障害の心理的援助2(山口)
- 第20回 聴覚障害の遺伝子診断(山口)
- 第21回 聴覚障害の検査と評価1(山口)
- 第22回 聴覚障害の検査と評価2(山口)
- 第23回 聴覚障害の検査と評価3(山口)
- 第24回 聴覚障害の検査と評価4(山口)
- 第25回 聴覚障害のケースワーク1(山口)
- 第26回 聴覚障害のケースワーク2(山口)
- 第27回 聴覚障害のケースワーク3(山口)
- 第28回 聴覚障害のケースワーク4(山口)
- 第29回 聴覚障害のケースワーク5(山口)
- 第30回 まとめ(山口)

■ 評価方法

試験100%

■ 教科書

書名：聴覚検査の実際（改訂3版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書名：言語聴覚士のための聴覚障害学

著者名：喜多村健

出版社：医歯薬出版

書名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山 稔

出版社：医学書院

書名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

出版社：医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	補聴器・人工内耳	担当者	竹田利一・柴田尚美・山口忍		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・補聴器のフィッティングにおける総合的な知識、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択について学ぶ。(竹田)
- ・人工内耳の仕組みや適応、マッピングについて学ぶ。(山口・柴田)

■ 目 標

- ・補聴器フィッティングにおける総合的な知識、補聴器適応の決定、調整と選択の基礎を身につけ、イヤモールドの採形について理解を深める。(竹田)
- ・補聴器・人工内耳の原理を知り、その適応と装着の手順について説明ができる。装用者に適切なかわりができ、適切な調整を提案することができる。(山口・柴田)

■ 授 業 計 画

- 第1回 補聴器の種類と仕組み (竹田)
- 第2回 補聴器の性能 (補聴器の最新デジタル技術) (竹田)
- 第3回 補聴器に関する測定、JIS、補聴器特性検査装置を使った実習 (竹田)
- 第4回 補聴器調整器の使い方、調整器の意味と実習 (竹田)
- 第5回 イヤモールドに関する講義 (竹田)
- 第6回 イヤモールドの採形実習 (竹田)
- 第7回 補聴器のフィッティングの考え方 (リニア、ノンリニア) (竹田)
- 第8回 補聴器装用効果の評価と補聴器適合検査の解説 (竹田)
- 第9回 人工内耳の仕組み (柴田)
- 第10回 人工内耳の音声処理方式について (柴田)
- 第11回 成人人工内耳装用者のリハビリテーションの進め方 (柴田)
- 第12回 小児人工内耳装用児のリハビリテーション、支援体制 (柴田)
- 第13回 聴覚障害総復習 (山口)
- 第14回 聴覚障害総復習 (山口)
- 第15回 聴覚障害総復習 (山口)

■ 評価方法

試験100%

■ 教科書

書名：竹田
補聴器のフィッティングの考え方（改訂第3版）
著者名：小寺一興
出版社：診断と治療社

書名：聴覚検査の実際（改訂3版）
著者名：日本聴覚医学会 編集
出版社：南山堂

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学
出版社：医学書院

書名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版
著者名：鳥山 稔
出版社：医学書院

■ 参考書

■ 留意事項

授業科目	視覚聴覚二重障害	担当者	森尚彫・大城克彦・ST 教員		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

視覚聴覚二重障害について概説する。(森)
AAC 導入のための知識と実践について講義を行う。(大城)
視覚障害施設の見学、国家試験対策 (ST 教員)

■ 目 標

視覚聴覚二重障害の概要を知り理解を深める。(森)
AAC を導入するための知識と基礎的技術を習得する。(大城)
視覚障害者を取りまく現状を知り理解を深める。(ST 教員)

■ 授 業 計 画

- 第 1 回 視覚障害、聴覚障害の概説とそれらによる視覚聴覚二重障害について (森)
- 第 2 回 視覚聴覚二重障害におけるコミュニケーションモードや過去の国家試験の解説等 (森)
- 第 3 回 視覚障害者福祉の歴史と現状 (日本ライトハウス)
- 第 4 回 視覚障害者福祉の歴史と現状 (日本ライトハウス)
- 第 5 回 障害に応じたコミュニケーションモード (大城)
- 第 6 回 AAC とは (大城)
- 第 7 回 AAC の実践例とスイッチの製作① (大城)
- 第 8 回 AAC の実践例とスイッチの製作① (大城)

■ 評 価 方 法

出席状況100%

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

授業科目	臨床実習 I	担当者	吉機俊雄 他		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

I 期臨床実習（見学実習）
期間：1 週間（40時間以上）

■ 目 標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授業計画

実習協力施設、病院様にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。

■ 評価方法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ② SV からの種々の情報
 - ③ SV 記載の成績表・所見
 - ④ 実習日誌
 - ⑤ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
- ①～⑤を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の 4 / 5 に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅱ	担当者	吉機俊雄 他		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	1年	総単位数	5単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅱ期臨床実習（評価実習）
期間：5週間（200時間以上）

■ 目 標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、言語聴覚療法における検査、及び評価を実際に行い、指導援助プログラムの立案までが指導を受けながら可能となる。

■ 授 業 計 画

実習協力施設、病院様にて、ご指導いただくSVの指示、監督のもと、患者（児）様に検査を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案

■ 評 価 方 法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ② SVからの種々の情報
 - ③ SV記載の成績表・所見
 - ④ 症例報告書
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント指導
 - ⑧ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
- ①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 教 科 書

--

■ 参 考 書

--

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅲ	担当者	吉機俊雄 他		
学科名	言語聴覚専攻科	学年	2年	総単位数	6単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅲ期臨床実習
期間：8週間

■ 目 標

検査および評価に基づき指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。言語聴覚士としての役割を理解し、言語聴覚療法の臨床に於いて必要な知識と技術を習得する。また、職務に対する倫理や基本的な姿勢など、言語聴覚士としての適性を養う。

■ 授 業 計 画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導、監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案から、実際の言語聴覚療法を経験する。

■ 評 価 方 法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ② SV からの種々の情報
 - ③ SV 記載の成績表・所見
 - ④ 症例報告書
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
 - ⑧ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
- ①～⑤を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 教 科 書

■ 参 考 書

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。